伯爵家の箱入り娘は婚儀のまえに逃亡したい

Yuiko Mizuhara 瑞原唯子

目次

伯爵家の箱入り娘は婚儀のまえに逃亡したい 1
公爵家の騎士団長は一目惚れの少女と結婚したい 20
侯爵家の強がり夫人は元婚約者を忘れられない 52
侯爵家の気弱な従僕は先輩侍女に逆らえない 71
伯爵家の堅物当主は元同級生から離れられない 90
エピローグ ～公爵家の幼妻は旦那様と仲良くしたい 119

伯爵家の箱入り娘は婚儀のまえに逃亡したい

明日、わたしは顔も知らないおじさまと結婚するために旅立つ。だから――。

伯爵令嬢のシャーロット・グレイは部屋の窓をそっと開いた。
その向こうには雲ひとつない抜けるような青空が広がっている。降りそそぐ光はとてもまぶしい。きっと雨にはならないだろう。どうか今日だけは晴れますようにと天に祈った甲斐があった。
準備は万端だ。
この時間なら庭に使用人がいないことも確認済みだし、屋敷内から目につかない経路も調査した。今日はひとりで過ごしたいからそっとしておいて、と両親や侍女に頼むことも忘れていない。
ひとつ深呼吸をして靴を履いたまま窓枠に立つと、向かいの木に飛び移り、すぐさま軽い身のこなしで音もなく庭に降りた。動きやすさを優先した簡素なドレスなのでそう難しくはない。
ごめんなさい、最後のわがままを許して――。
誰にも見咎められることなく裏門のひとつから敷地外に出ると、やわらかなストロベリーブロンドの髪を揺らしながら、カーディフの街へと続く一本道をためらうことなく駆けていった。

「わぁ……！」
街というものを目にしたのは幼少のころ以来である。
さまざまな店が大通りにも路地にも建ち並び、老若男女が行き来し、にぎやかな声がそこかしこで上がる――それは書物にしたためられた街の様子そのもので、シャーロットは心が躍った。
「まずは軍資金ね」
大通りで立派そうな宝飾店を見つけると、躊躇なく扉を開く。
「いらっしゃいませ」
「あの、これを買い取っていただきたいのですけど」

いくつもの宝石があしらわれた美しく華奢なネックレスを取り出し、若い男性店員に差し出す。しかし彼は微笑を浮かべたまま受け取ろうという素振りすら見せず、慇懃に問いかける。
「失礼ですが、身分証を拝見させていただけますか」
「えっ」
身分証は、それなりの身分を有する成年にしか持てない。
シャーロットは未成年なので当然ながら持っていなかった。だからといってこのままあきらめたくはない。せっかく一大決心で家を抜け出してここまで来たのに、望みのひとつも叶えられないなんて――。
「わたし、あしたが十六歳の誕生日なんです。だから……」
「それでは、明日、身分証を持参のうえでお越しください」
取り付く島もなかった。
肩を落として宝飾店を出ると、待ち構えていたかのように痩せた中年男性が近づいてきた。父親よりやや年上くらいだろうか。くたびれた服に無精髭という身なりからして貴族ではなさそうだ。
「お嬢さん、宝石を売りたいのかい？」
「ええ、でも身分証がないからと断られてしまって……」
「そういうことなら裏通りの店へ行くといい」
「身分証がなくても買い取ってもらえるんですか？」
「もちろんだ、案内するよ」
親切なひとに声をかけてもらえてよかった。ほっとして胸を撫で下ろし、よろしくお願いしますとお辞儀をしたところ――。
「イテテテテテテ！」
その声に驚き、はじかれたように顔を上げる。
彼はいつのまにか背後から青年に右手を捻り上げられていた。苦痛に顔を歪ませ、必死に逃れようとしているようだがビクともしない。青年はそのまま射るように冷たく睨めつけて言い放つ。
「いますぐ失せろ」
「わかったわかった！」
青年が手を離すと、もがいていた中年男性は反動でよろけて地面に転がった。衣服や手のひらがあちこち土で汚れていたが、そのまま払いもせずによろよろと起き上がり、くやしげに青年を睨みつける。
「チッ、護衛がいたのかよ」
そう言い捨て、逃げるように路地裏へ消えていった。

「ここで客引きをするのは大抵ロクなやつじゃない。君のような世間知らずな子はいいカモだ。二束三文で買いたたかれるくらいならまだマシで、取り返しのつかない悲惨な目に遭うこともある」
「……助けてくださってありがとうございます。ご迷惑をおかけしました」

呆気にとられていたシャーロットはようやく我にかえり、深々と頭を下げた。
捨て台詞から考えても、おそらく中年男性は騙すつもりで声をかけてきたのだろう。しかし彼に助けてもらうまでは疑いもしなかった。だから本当に心から感謝はしているのだけれど。
「お金……どうしましょう……」
ネックレスを売る以外の手立ては考えていなかったので、いまさらどうにかできるとは思えない。しゅんとして曖昧に目を伏せていくシャーロットに、彼はどこか複雑な顔をして尋ねる。
「どうしてそこまで現金がほしいんだ？」
「わたし、結婚のために明日この地を離れる予定で」
「まさか結婚が嫌で逃亡とかじゃ……ない、よな？」
「最後に街で遊びたかっただけです」
それを聞いた彼がほっとしたように安堵の息をつき、シャーロットもつられるようにくすりと笑ったが、すぐにまた顔を曇らせる。
「でも父が過保護なので黙って抜け出すしかなくて」
「なるほど、それで手持ちの現金がないってことか」
「はい……」
シャーロットは五歳のときに王都で誘拐されたことがある。
それ以来、父親はシャーロットを王都に連れて行かなくなり、領地においてもグレイ家の敷地外に出ることを禁じた。寂しかったが、自分の身を案じてのことなので仕方がないとあきらめていた。
けれど結婚が決まるといてもたってもいられなくなった。もし結婚後も外出を許されなければ、一生、外の世界を見られない。だから親の言いつけに背いてまで抜け出してきたのだ。なのに――。
「それなら俺が協力するよ」
その言葉にハッとして顔を上げる。
青年は手を腰に当て、仕方ないと言わんばかりの微苦笑を浮かべていた。きっと困っている未成年を放っておけなかったのだろう。

「責任は俺が持つから、この子のネックレスを買い取ってもらえないかな」
ここはシャーロットが最初に訪れた宝飾店だ。
にべもなく断られたばかりなのにとハラハラしながら、青年が交渉するのをすこし離れたところから見守っていたが、当然のように店員は冷ややかだった。しかし青年が白銀の懐中時計のようなものを開いて見せると、急に態度を翻す。
「承知しました」
「じゃあ……」
そのあとの交渉もすべて青年がやってくれた。
ネックレスの鑑定が済むと、彼を経由して現金と小さなバッグが渡される。現金は使いやすいよう少し崩してあり、バッグはそれを持ち歩くために用意したらしい。どちら

も彼が気を利かせて手配してくれたのだ。
「ありがとうございました」
「ああ」
　宝飾店を出て、シャーロットは感謝の気持ちをこめて深々と頭を下げるが、彼はたいしたことではないかのように軽く一言で受け流した。
「俺のことはリックと呼んでくれ。君は？」
「……ロッテと」
　シャーロットのことをロッテと呼んでいるひとはいない。けれど正式名を名乗ると素性が知られてしまうかもしれないと思い、念のため短縮名を告げた。答えるまでに少し間があいたものの不審には思われなかったようだ。
「ロッテ、君はこれからどうするんだ？」
「まずカフェに行って、それからお芝居を観に行くつもりです。そのあとのことはまだ決めていませんが、いろいろとお店をまわってみようかなって」
　うきうきと話すと、彼はどこか言いづらそうにしながら切り出した。
「それさ、もしよかったら俺も同行させてもらえないか？」
「えっ、でもこれ以上ご迷惑をおかけするわけには……」
「いや、ちょうどひとりで寂しいと思ってたところなんだ」
「それでしたら、ぜひ」
　恩人である彼のためになるのなら断る理由はない。
　それに、シャーロットも一人より二人のほうが楽しそうだと思ったのだ。

　カフェはリックが勧めてくれたところに決めた。
　明るい窓際の席に通されて、彼に促されるまま向かい合わせに座る。彼は紅茶を、シャーロットはカフェオレとケーキを注文した。家ではコーヒーが出ないので一度飲んでみたかったのだ。
　店内では多くのひとが楽しそうにおしゃべりに興じている。その適度なざわめきは不思議と心地よく感じた。だが方々からチラチラと視線を向けられていることに気付くと、急に落ち着かなくなる。
「心配しなくても君を見てるわけじゃない。俺を見てる」
　そわそわし始めたシャーロットを目にして、彼は小声でそう告げる。
　あらためて周囲を窺うと、確かにシャーロットではなく彼を見ているようだ。それも仲間内でひそかにはしゃいだり、うっとりしたり、ほんのりと頬を染めたりしながら。この反応は――。
「もしかしてリック様は有名な方なのでしょうか？」
「えっ？　　あ、いや、そういうわけじゃなくて……」
「宝飾店でも特別な対応をしてもらってましたよね？」
「あー……それは俺が王都の騎士団に所属してるからだな」
「騎士？！」
　思わず興奮し、胸元で両手を組み合わせて前のめりになるが、彼がいささか引きぎみ

に目を瞬かせるのを見て我にかえった。恥じ入りながらそそくさと淑女らしい居住まいに戻ると、静かに言葉を継ぐ。
「わたし、王都で誘拐されたことがあるんですけど、そのとき騎士の方に助けていただいて。まだ五歳だったので、当時のことはうっすらとしか記憶にありませんが、それでもわたしにとって騎士は憧れの存在になったんです」
「そう、か……」
　あの日以来、騎士のように強くなりたいとずっと思ってきたのだ。
　リックはどこか面映ゆそうな表情になりながら、目を伏せる。その頬はこころなしか赤みを帯びているように見えた。

　苦い――それが最初にカフェオレを飲んだときの感想だ。
　しかし、クリームたっぷりの甘いケーキを食べながらだとちょうどよく感じる。そのうち舌が慣れてきたこともあり、ケーキにはコーヒーのほうが合うかもしれないとまで思うようになった。
「けっこう気に入ったようだな」
「はい」
　コーヒーを飲むのは初めてだとあらかじめ断っていたので、リックは興味本位で観察していたのだろう。ティーカップを戻しながら面白がるように口の端を上げる。
「道具さえあれば家でもコーヒーを淹れられるぞ」
「ええ、でも嫁ぎ先であまりわがままは言えませんし」
「……なあ、君の婚約者ってどういうひとなんだ？」
「まだ会ったことがないのでわからないんです」
　シャーロットは肩をすくめて答えた。
「急に決められた結婚なので。相手は父と同じ年齢の侯爵様だと聞いています。悪い奴ではないと父は言っていましたが……その……ここだけの話にしてもらえます？」
「ああ」
　彼が頷くと、内緒話をするように口の隣に右手を立てて小声で告げる。
「その方、どうやら男色家らしくて」
「えっ……」
「十年前、それに目覚めて一度婚約を破棄しているんだそうです。でも嫡男なので、家存続のために仕方なく結婚することにしたんだろうって。両親がこっそり書斎でそう話しているのを聞いてしまって」
　彼は唖然としたまま身じろぎもせずに聞いていたが、話が終わると困惑したような混乱したような怪訝な顔になり、再びティーカップに手を伸ばす。
「それってただの噂だったりしないのか？」
「いえ、父は実際その方に懸想されているらしいです」
「ブフッ」
　シャーロットが答えた瞬間、彼は飲みかけていた紅茶を吹きそうになった。いや、すこし吹いた。幸いシャーロットにはかからなかったが、彼はハンカチで口元を拭いなが

らすまないと謝罪して、眉をひそめる。
「まさか、父上の身代わりとして君が望まれたとかいうんじゃ……」
「父はおそらくそうではないかと推測していました。先方がこの結婚を強く希望したらしくて。父としては断りたかったけれど、事情があって受け入れるしかなかったそうです」
　彼はチッと舌打ちし、顔をしかめたまま肘をついて額を押さえる。
「君は、嫌じゃないのか？」
「心配ではありますけど、わたしと向き合ってくださるのならそれで十分です。せっかく家族になるのですから仲良くしたいですし、そのためにはこちらが心を閉ざしていてはいけませんよね」
　それはまぎれもない本心だ。
　両親も家の都合で結婚を決められたそうだが、互いに互いを大切にしているのが傍目にもわかる。だから自分たちもそんなふうになれたらいいなと思ったのだ。
「……」
　彼はシャーロットの楽観的な考えに納得がいかなかったのか、ますます険しい面持ちになった。しばらくそのまま身じろぎもせずにじっと考え込んでいたが、やがてパッと顔を上げて力説する。
「よし、今日は思いっきり楽しもう！」
「え……あ、はい」
　一瞬、シャーロットは当惑して目をぱちくりさせたものの、すぐに笑顔で応じた。

　カフェを出ると、もうひとつの目的である観劇に向かった。
　大人気公演にもかかわらず運良く二つ並びの席が取れた。角度がついていて見づらいバルコニー席だが文句は言えない。彼と並んで座り、けれどまっすぐ食い入るように舞台だけを見つめる。
　それは想像をはるかに超えていた。ただ単にストーリーをなぞるように演じていくのではなく、歌と踊りも織り交ぜられていて、現実からかけ離れているのにどんどん引き込まれてしまうのだ。
　ただ、ストーリーには共感しがたい部分もあった。ヒロインが政略結婚の前夜に恋人と駆け落ちするという場面では、残されたひとたちのことばかり考えてしまい、物語に集中できなかった。
　そもそもシャーロットには恋がわからない。恋愛小説を読んでもどこか遠い世界のこととしか感じられないし、そんなに素敵だとも思えない。どうしてみんな恋をしたがるのか不思議だった。
「君は……その……好きなひとがいたりしないのか？」
「いませんよ」
　好きなひとがいたら、いまごろは絶望的な心境になっていたかもしれない。結婚相手ときちんと向き合おうとも思えなかっただろう。あのヒロインのように恋人と駆け落ちしていた可能性もある。
　だから、きっと、恋を知らないままでよかった――。

シャーロットは軽やかに劇場前の階段を駆け下りると、ふわりと身を翻して笑った。

観劇のあとは、昼食にしようと中央広場で移動販売のサンドイッチを買った。
シャーロットの知っているサンドイッチとは違い、バゲットにハムとチーズと野菜を挟んだもので、どうやって食べるのかわからなかった。
「そのままかぶりつくんだよ。君の小さい口ではちょっと難しいか？」
「大丈夫です」
こんな経験はなかったのでいささか抵抗はあったが、彼にならってかぶりつく。しかしやはり口が小さくて少しずつしか食べられない。その様子を、早々に食べ終えてしまった彼がずっとニコニコと見ていた。
「あの、あまり見られると恥ずかしいです……」
「ほかにすることがないからな」
堂々とそう返されてしまうと何も言えなくなる。なるべく彼のほうから意識をそらしながら黙々と食べ進め、最後にはだいぶ口まわりが疲れてしまったが、どうにかきれいに完食した。
「これ、とてもおいしかったです」
「気に入ってもらえてよかったよ」
「ほかにもいろいろ売ってるんですね」
「ジェラートでも食べるか？」
「いえ、おなかいっぱいなので……」
残念に思っていると、彼はふっと頬をゆるめて抜けるような青空を仰いだ。
「またいつか来ればいいさ」
いつか――。
そんな日は永遠に訪れないかもしれないけれど。シャーロットはうつむきそうになるのを堪えて、ただうっすらと曖昧に微笑んだ。

「さてと、あとは店を見てまわりたいんだったか？」
昼食を終えると、噴水のそばを歩きながらリックがそう尋ねてきた。シャーロットが最初に話したことを覚えていたらしい。
「はい。いろいろなお店があるらしいので楽しみにしていました」
「裏通りは怪しい店も少なくないからやめたほうがいい。大通りを歩こう」
「わかりました」
中央広場のすぐそばが大通りになっている。二人はそちらへ向かい、きれいに整備された石畳を並んで歩いていく。
「何か買いたいものはあるのか？」
「そうですね……家族へのおみやげを買いたいです」
「ん？　それだと抜け出したことがバレるんじゃないか？」
「帰ったら正直に話して謝罪するつもりですから」

「そうか……」
　叱られることは覚悟のうえだ。
　どうしても行きたかったので騙すようなかたちで抜け出してきたが、それがいけないことだというのはわかっている。たとえ気付かれなくても嘘をついたまま別れてしまうのは嫌だった。
「あ、このお店を見てみたいです」
　複雑そうな顔をしている彼には気付かないふりをして、軽やかに駆けていく。
　そのあとも興味をひかれた店をいろいろと見てまわった。服飾店では様々なデザインのドレスが飾られていてわくわくしたし、ワインを取り扱う店ではこんなにも種類があるのかと驚いた。
　もちろんおみやげのことも忘れていない。まずハンカチ専門店で家族それぞれに似合いそうなハンカチを購入した。そして紅茶が好きな父親のために茶葉も追加しようと決めたのだが。
「こんなに種類があるんですね……」
　紅茶専門店に入ると、ずらりと並んだ茶葉に圧倒されてしまった。
　ひとつひとつ名前は書いてあるものの、そもそも茶葉を知らないので味も香りもわからないし、どれが父親の好みに合うのかなんて見当もつかない。
「いつも飲んでるのがどれだかわかるか？」
「いえ、主にノンフレーバーでたまにフレーバーなんですけど」
「だったら……」
　彼はひとつひとつ説明をしながらいくつか勧めてくれた。稀少なのであまり日常的には飲まないものだったり、めずらしいが癖のないフレーバードティーだったり、おみやげとしてよさそうなものばかりだ。
「この三つにします」
　かなり悩んだが、シャーロットが飲んでみたいと思うものを選んで購入した。
　店を出ると、あてもなく足を進めながらどうしようかと考える。ひととおり大通りは歩いたし、おみやげも買った。でもまだ帰りたくない。ほかに何かすることがあればいいのだけれど――。
「自分のものは買わなくていいのか？」
「そうですね……」
　せっかくの助け船だが、これといって欲しいものが思いつかない。
　そもそも明日には嫁ぎ先に向かうのだ。相手方の希望により身ひとつで嫁入りすることになっているので、買っても置いていくしかない。いや、ごく小さなものであれば許してもらえるだろうか。
「あのお店を見てみてもいいですか？」
「もちろん」
　さきほどは通りすぎた雑貨店に足を踏み入れる。
　ここならいろいろと小物があるはずだ。必ずしも何か買おうという気はなく、ただ純粋に欲しいと思えるものが見つかれば買いたい。そんなつもりで店内をのんびりと見て歩いていると。

あ、これ――。
いくつか並べられていた指輪のひとつにふと目を奪われ、足を止めた。
銀色の細い流線型のリングに紫色の小さな宝石がはめ込まれている。それほど質の高いものではなさそうだが、デザインが素敵だった。そして角度により違って見える紫の宝石がとてもきれいだった。
「それ、気に入ったのか？」
「ええ……買いませんけどね」
「だったら俺に贈らせてくれ」
「えっ？」
彼は返事も待たず、その指輪を手にとって店員のところへ持っていこうとする。シャーロットはあわてて彼の腕をつかんで引き留めた。
「いけません！」
「高いものじゃない」
「そうではなくて」
そこで一呼吸おき、あらためて強く真剣なまなざしで彼を見据える。
「わたし、あしたには嫁ぎ先に向かうんです。そこに他の男性からの贈り物なんて持っていけません。それも指輪だなんて……自分で買わないのも変に誤解されたくなかったからです」
そう訴えると、彼は落ち込んだように顔を曇らせてうつむいた。
「悪い、今日の記念にと思ったんだ」
「わかっていただければ……」
焦っていたとはいえ、言い方がすこしきつくなってしまったかもしれない。
今日の記念にという彼の気持ちは素直にうれしく思っている。断らなければならなかったことが心苦しい。むしろこちらがお礼をしなければいけないくらいなのに――。
「そうだわ！　わたしのほうからリック様に何か贈らせてください。今日の記念とお礼をかねて。リック様のおかげで街を楽しむことができましたし、お父さまへのおみやげも買えました」
いいことを思いついたと両手を合わせ、声をはずませる。
彼も最初こそ驚いたように目を見開いていたが、お礼だと聞くと納得したのか、うれしそうに表情をゆるませていく。
「じゃあ、遠慮なくいただこうかな」
「はい！」
シャーロットは心のまま元気よく返事をした。

どうしましょう――。
しかし、いざ何を贈ろうか考えてみると途方に暮れてしまった。この年代の男性が喜びそうなものなんて見当もつかない。趣味嗜好をよく知っている相手ならともかく、彼とはまだ出会ったばかりなのだ。
大通りを歩きながら、こっそりと横目で隣のリックを観察する。

年齢は二十代半ばから後半くらいだろうか。さらりとした癖のない黒髪に、くっきりとした目元、きりっとした眉毛、すっと通った鼻筋、形のいい薄い唇――客観的に見ても美しく端整な顔だと思う。

背もかなり高くて、細身ながらしっかりと筋肉がついている均整の取れた体型だ。王都の騎士団に所属する騎士とのことなので鍛えているに違いない。騎士の制服もきっと似合うのだろう。

もっとも、今日はシャツとパンツにベストを合わせただけの簡素な私服だ。ただ、その仕立てや布地からはかなり上質なものであることが窺える。もしかするとあつらえたものかもしれない。しかし――。

「贈り物、カフリンクスはいかがですか？」

「これか……そろそろ買い換えたいと思ってたところだし、ロッテが贈ってくれるならうれしいよ」

その返事に、シャーロットは安堵の息をつく。

全体的に上質そうな装いの中で、袖口についた飾り気のない小さなカフリンクスだけがくたびれて見えたのだ。あちらこちらについた細かい傷のせいで輝きが失われていたからだろう。

さっそくカフリンクスを扱ってそうな店を探して、二人で入る。

しかし、陳列棚を見ても彼に贈りたいと思えるものはなかった。ただ店員によれば、他にもいろいろと店頭に出していない品があるので、要望さえ伝えてくれれば出すとのことだった。

彼には丸いものよりも角張ったものが似合うだろう。そして金色よりも銀色だ。邪魔にならないよう小さめのほうがいいはず――さっそくいくつかカウンターに出してもらって吟味する。

「うーん……」

「こういうものもございますが」

どれも悪くはないけれど決め手に欠けて、どうしようかと悩んでいると、店員がもうひとつ追加で奥から持ってきてくれた。それを見た瞬間、雷に打たれたように心を鷲掴みにされてしまった。

「リック様、これはいかがですか？」

「いいね」

彼も屈託のない笑顔で同調した。

それは白銀で小さな長方形の飾りがついたものだ。そこには直線的な模様が刻まれていて、シンプルながらシャープで洗練された印象を受ける。間違いなく彼に似合うと直感したのだ。

これにしますと店員に告げて包んでもらう。衝動のまま値段を確認せずに決めてしまったので、支払い時に思いのほか高価とわかって焦ったものの、どうにか手持ちの現金で足りた。

「ありがとうございました」

店員に丁重に見送られながら二人は大通りに出た。

贈り物の入った手提げ袋はまだシャーロットの手にある。しかしいまここで渡すのも

味気ない気がして、中央広場に行きましょうと誘い、そこであらためて彼と向かい合って手提げ袋を差し出す。
「これ、わたしの気持ちです」
「ああ……」
　彼は優しい顔をして受け取ると、ふいと何か物言いたげなまなざしになり、感情を抑えたような声で言葉を紡いでいく。
「ロッテ……今日、ここで君に出会えてよかった」
「はい……」
　わたしも、と言いかけてシャーロットは口をつぐんだ。
　それくらいなら言ってもよかったのかもしれないが、あの舞台劇が頭をよぎり、何とはなしに後ろめたい気持ちになってしまった。それでもどうにか気を取り直すと、言葉にできない気持ちをこめてにっこりと微笑んでみせた。

「あっ！」
　直後、見知らぬ若い男がリックにぶつかった。
　その拍子に、彼が持っていたカップからジュースらしきものがこぼれて、リックの衣服にかかった。白いシャツの袖からはオレンジ色の液体が滴り落ちている。
「ああっ、すみません！！」
「いいよ、仕方ない」
　勢いよく謝罪する若い男に、リックは苦笑しながら軽く手を上げてそう応じた。しかしながら若い男はどういうわけか必死に食らいつく。
「そのシャツ僕に洗わせてください！」
「え、洗う……？」
「泊まってる宿がすぐそこなので」
「いや、そこまでしてくれなくていい」
「それじゃあ僕の気がすみません！」
「だが、連れもいるし……」
「できるだけ急いでやりますので！」
　リックが困惑するのも構わず、上目遣いで見つめたままグイグイと距離を詰めていく。この様子では断るほうが時間がかかるかもしれない。
「……わかった」
　リックもそう思ったのか、疲れたように溜息をついて承諾の返事をした。

　宿は、中央広場からすぐ近くの大通りにあった。
　大通りにあるということはきちんとした宿なのだろう。実際、年季が入っているものの手入れは行き届いているようで、老舗といったおもむきだ。昼間だからか晴天だからか入口の扉は開け放たれている。
「お嬢さんはこちらでお待ちくださいね」

玄関に入ると、若い男――ジョンと名乗った――はシャーロットにそう告げた。
彼の客室に行くのなら、未婚女性である自分がついていくのは確かに良くない。わかりましたと応じたものの、ひとり待たされることになるとは思わなかったので、若干、心細く感じてしまった。
リックはそれを察したのだろう。なるべく早く戻るよと安心させるように微笑み、受付の男性従業員にシャーロットのことをよろしく頼むと、ジョンに急かされながら階段を上がっていった。
「どうぞ、おかけになってください。ハーブティーはいかがですか？」
「ありがとうございます、いただきます」
男性従業員に声をかけられ、シャーロットは淡く微笑んでカウンター近くの席に座る。
そこは宿泊者が待ち合わせなどに使うための場所らしく、こぢんまりとしているが、いくつか丸テーブルがあってカフェのようになっていた。いまは他に誰もおらずひっそりとしている。
「どうぞ」
しばらくして女性従業員がハーブティーを運んできた。
シャーロットはお礼を言い、階段のほうを眺めながらハーブティーに口をつける。そのさわやかな風味にほっと息をついた、そのとき。
「やめてください！！　許してくださいっ！！　ああーーーッ！！！」
そんな悲鳴とともに激しい物音が上階から聞こえてきて、ビクリとする。
すぐに転がり落ちんばかりの勢いでジョンが階段を下りてきた。シャツは破れ、ボタンもちぎれ、前がはだけて白い素肌が露わになっている。それを追うようにリックも上半身裸であわてて下りてくる。
「どうなさいました？」
受付の男性従業員が驚いて、様子を窺うためにカウンターの中から出てきた。
ジョンはその背中に隠れるようにまわり込んで縋り付く。
「助けてください！　あのひとに服を洗うからと脱いでもらったら、いきなりベッドに押し倒されてシャツを破かれて、もうすこしで襲われるところだったんです！」
「俺は何もしていない。こいつが急に一人芝居を始めたんだ」
「嘘です！　嫌だって言ったのに、押さえつけてキスして体をまさぐってきたじゃないですか！　僕が隙をついて逃げ出さなかったら強姦されてました！」
二人しかいない室内で起こった出来事なのだ。リックの話、ジョンの話、どちらが真実かなど証明しようがないだろう。けれど――。
「それはおかしいですね」
「えっ？」
怪訝に振り返ったジョンを、シャーロットは射るように見据えてすっと立ち上がる。
「わたしがここで待っていることも、宿の方がここにいらっしゃることも、リック様はご存知でした。それなのに軽率に襲ったりするでしょうか。悲鳴も物音も丸聞こえなくらい近い部屋なのに」
「それはっ……あのひとが男色のケダモノだからです！　我慢できなかったんです！」
後ろのリックを指差しながらジョンは必死に言い募る。だが、もはやそれは逆効果で

しかない。
「リック様が男色かどうかは存じ上げません。ですが、いずれにしてもそのような無体を働く方ではないと、わたしは信じています」
「ぐっ……」
　反論はつづかなかった。その表情からも、声からも、追い込まれている様子が見てとれる。やがてあたりがしんと静まりかえったそのとき――。
「ジョン！　　プランＢよ！！！」
　どこからか切り裂くような声が響いた。
　ジョンはわずかに顔をしかめて苦しげな表情を見せたが、それは刹那のこと。すぐさま迷いを振り切るようにシャーロットに襲いかかる。
「ロッテ！！！」
　リックは一瞬だけ出遅れた。しかしながら互いの距離が近いだけにその一瞬がとても大きい。全力で駆け出したときには、すでに大きく伸ばされたジョンの右手がシャーロットの胸元に届き――。
　ドタドタガシャン！！！
　目の前の光景に、その場にいたひとたちは一様に唖然とした。
　襲いかかったはずのジョンのほうが吹っ飛んでいたのだ。いくつもの丸テーブルと椅子を豪快になぎ倒し、その上に仰向けに倒れたまま、起き上がることもできずに苦痛に顔をゆがめている。
「えっ、と……」
　リックはまだ何が起こったのか理解できずにいるらしい。理解できないというより信じられないのだろうか。シャーロットは乱れたドレスの裾を直して姿勢を正すと、にっこりと微笑む。
「わたし、武術を少々たしなんでおります。主に身を守るためのものですけど」
　男性とまともに組み合ったら勝ち目はないだろうが、襲いかかってくる相手から身を守る術なら心得ている。特に、考えもなしに突進してくる相手であれば難しくない。相手の勢いを利用して投げるだけでいいのだから。
　リックは目を見開き、そしてようやくほっとしたように息をついた。
　そのあいだにジョンは見知らぬ青年に後ろ手で拘束されていた。もうあきらめたように憔悴した顔でおとなしくしている。そして、入口で指示した女性もまた別の見知らぬ青年に拘束されていた。
「痛っ！　　乱暴にしないで！！」
　ただ、こちらは往生際が悪く、髪を振り乱してヒステリックにわめき散らしている。
　その声につられるように振り向いたリックは、彼女の姿を目にするなり怪訝に眉をひそめ、そのまま近づいていくと身をかがめて覗き込んだ。
「おまえには見覚えがある。ロゼリアの侍女だな。俺を陥れるよう命じられたか」
「……」
　彼女は顔をそむけた。その表情からも、顔色からも、図星を指されて焦っていることは明白である。リックは冷ややかに見下ろしたまま何か言いかけたものの、ドタドタと派手な足音に遮られた。

「何があった？」
　入口から踏み込んできたのは衛兵と思われる二人組だ。騒ぎを聞きつけたのか、混沌とした光景を見まわして誰にともなく高圧的に尋ねる。しかし上半身裸のリックが白銀の懐中時計らしきものを開いて見せると、はじかれたように敬礼した。
「この件はこちらで預かりたい。拘束する場所だけ貸してもらえないか？」
「承知しました」
　衛兵が先導し、見知らぬ青年二人がそれぞれ拘束した二人を連行していく。
　その途中でリックは片方の青年に何やら耳打ちをした。おそらく互いによく見知った間柄なのだと思うが、この青年二人が何者なのか、なぜ都合よく現れたのか、シャーロットには何もわからないままだった。

「すまない、君を巻き込んでしまって」
　宿の一階で、リックは神妙な顔をしてシャーロットの向かいに座っていた。
　いまはもう上半身裸でなく新しいシャツを着ている。実は、彼もきのうからこの宿に泊まっていたのだという。それで荷物の置いてある自分の客室にいったん戻り、シャツを着てきたのだ。
　袖口には先ほど贈ったばかりのカフリンクスがついている。やはりというかとてもよく似合っていた。さっそくつけてくれたことがうれしくて胸が熱くなるが、いまは言及できる雰囲気ではない。
「おそらく俺の元婚約者ロゼリアの仕業だ。彼女とはいわゆる政略結婚をすることになっていたが、彼女の家が不正を働いていたことが発覚して婚約を解消した。それを恨んでのことだろう」
「そうでしたか……彼女もおつらかったのでしょうね」
「しかし、まさか十年も経ってこんなことを仕掛けてくるとはな。不正は内々に処理したから公にはならなかったし、それもあって彼女は他家に嫁ぐことができたと聞いていたんだが」
　もしかしたら、他の誰でもなくリックと結婚したかったのかもしれない。
　そう思ったものの根拠があるわけではないし、何となく彼に言いたくない気持ちもあって、シャーロットはうっすらと微笑んで話題を変える。
「連行していった方たちとはお知り合いなのですか？」
「あー……なんていうか……まあ、お目付役みたいなもんだな。来るなと言ったが勝手についてきた。いつもついてくるわけじゃないんだが、今回は特別で……」
　まるでイタズラの言い訳でもしているかのように、気まずげに目を泳がせながらしどろもどろになる彼を見て、思わずくすっと笑う。
「来てくださって助かりましたね」
「まあ、結果的にはな」
　彼はすこし不服そうに口をとがらせていたが、さて、と真面目な顔になって椅子から立ち上がると、シャーロットのまえにすっと手を差し出した。
「君はもう帰ったほうがいい。送るよ」

「はい」
　その手をとってシャーロットも立ち上がった。
　日が傾きかけているのでそろそろ帰る頃合いだろう。充実した一日を過ごすことができて思い残すことは何もない。そのはずだから――胸によぎった寂寥感には気付かないふりをした。

　なんと、リックは白馬で街に来ていたそうだ。
　その白馬で送ってくれるというので素直に甘えることにした。前にシャーロットを乗せて、後ろで彼が手綱を握る。安全のためか、疾走することなく軽やかな歩みで進んでいくのだが。
　すごく、近い――。
　あたりまえだが二人乗りなのでところどころ密着していて、彼の体温や筋肉、息づかいまで感じてしまって落ち着かない気持ちになる。父親と二人乗りしたときは特に何とも思わなかったのに。
「ロッテ、怖いなら無理しなくていいからな」
「大丈夫です」
　背後からの気遣うような声にドキリとしながらも、乗馬を怖がっていると思われたことが心外で、誤解を解こうと振り向くと――心配そうに覗き込んできた彼と至近距離で目が合った。
　えっ――。
　瞬間、幼い日のことがぶわりと色鮮やかに脳裏によみがえった。思わず息が止まりそうになり、どうにか前を向いてゆっくりと呼吸をするものの、鼓動は次第に速くなり喉もカラカラに渇いていく。
「……わたし、いま思い出しました」
　そう声を絞り出すと、背後でリックがこころなしか体を硬くしたように感じた。ドクンと壊れそうなくらい心臓が収縮するが、あえて何も気付かないふりをして慎重に話をつづける。
「誘拐されたとき、とある騎士様に助けていただきましたが、あのときもこうやって白馬に乗せていただいて……わたしを見つめる騎士様の瞳は、アメジストのようにきれいな紫色でした」
　そこまで言うと、そっと息を詰めて再び振り返った。
「リック様も同じですね」
　紫色の瞳はとてもめずらしいと言われている。
　王都の騎士で、瞳が紫色で、年齢的にも当てはまるひとが、そう何人もいるとは思えない。じっと目をそらさずに無言で答えを求めていると――リックはふっとやわらかく頬をゆるめた。
「騎士様みたいに強くなりたいと言っていたが、本当に強くなったんだな」
「……がんばりました」
　目頭がじわりと熱くなって涙がにじみ、前に向きなおる。

　それきり二人の会話は途絶えた。背後の彼がどういう表情をしているのか気になったものの、何となく振り返ることができず、自邸へとつづく一本道をただ静かに馬に揺られて進んでいった。

「お嬢さまーーー！　どこですかぁーーー！！！」
　敷地の近くまで来ると、シャーロットを捜しまわる侍女の声が聞こえてきた。
　どうやら部屋にいないことに気付かれてしまったらしい。だが比較的のんきな声で敷地内を捜しているということは、まだそれほど大事にはなっていないのだろうと、ひとまずほっとした。
「ここからはひとりで帰ります」
「わかった」
　一本道の脇のほうに馬を止めて下ろしてもらうと、預けていた荷物を受け取り、あらためてすっと背筋を伸ばして彼と向かい合う。
「わたし、今日のことは一生忘れません」
　そう告げて、淑女の礼をとり精一杯の笑顔を見せた。
　そのとき彼が何か言いたそうな顔をしていることに気付いたが、振り切るように身を翻して走り去る。追いかけてくる気配はないのに全力疾走が止まらない。息が、胸が苦しくてたまらなかった。

　翌日、十六歳になったシャーロットは、嫁ぎ先であるウィンザー公爵家に向かった。
　しかし、そこに夫となる三十六歳の男性はいなかった。
　普段は王都に住んでおり、シャーロットたちに合わせて帰ることになっていたが、外せない仕事があるとかで遅れているという。だが、三日後の結婚式には必ず間に合わせるとのことだった。
　ただ、義理の両親となるウィンザー公爵夫妻は諸手を挙げて歓迎してくれた。ようやく結婚する気になった嫡男の婚約者を逃がすまいとしているのか、とてもかわいがってくれるのだ。
「え、騎士なんですか？」
「そうなのよ。それも騎士団長にまでなってしまったのよね。わたしとしては危険な仕事だからやめてほしいのだけど、まだ当分やめる気はないみたい。公爵家の嫡男としての仕事もあるのに困ったものだわ」
　結婚式の準備の合間には、ウィンザー公爵夫人がたびたびお茶に誘ってくれた。
　そのときの歓談で初めて婚約者が王都の騎士であることを知った。父親からは名前と年齢くらいしか聞かされていなかったし、シャーロットもあえて詳しく尋ねようとはしなかったのだ。
　この事実を一昨日であれば無邪気に喜んだかもしれない。けれど――騎士団長というのはリックの上司にあたるのだろう。今後、団長の妻として彼と顔を合わせる可能性を考えると、複雑な気持ちになった。

「あなた、もしかして故郷に好きなひとがいるのかしら」
「えっ？」
　紅茶に目を落としたまま考え込んでいたシャーロットは、はじかれたように顔を上げる。ウィンザー公爵夫人は優しくも寂しそうに微笑んでいた。
「なんだかそんな顔をしていたわ」
「いえ、好きなひとなんて……」
　恋なんて知らない――そのはずなのに、リックの姿が脳裏に浮かんでズキッと胸が痛くなる。ひどく後ろめたくて、顔を見られたくなくて、言葉を詰まらせたまま再びうつむいてしまった。
「ごめんなさいね、あの子、早くあなたと結婚したいと必死だったのよ。陛下に縁談の口添えまで頼んで、あなたの社交デビューも待たず、婚約期間もほとんどなくて……心の準備をする時間もなくて大変だったと思うわ」
「……」
　彼がこの結婚を強く望んだのは、シャーロットの父親に決して成就することのない恋心を抱いているからだ。そしてシャーロットもまた他の男性を心にとどめたままでいる。それでも――。
「わたしは……互いに大切に思い、信頼し合える夫婦になろうと思ってここに来ました。せっかくご縁があったのですから仲良くしたいです。だからウィンザー侯爵様ときちんと向き合いたいと思っています」
　しっかりと顔を上げて決意を述べる。
「そう……ありがとう」
　ウィンザー公爵夫人は安堵したように息をつき、やわらかく微笑んだ。

「お嬢さま、とてもおきれいです」
　結婚式当日、シャーロットは純白のウェディングドレスを身にまとった。
　シルクチュールを使ったシンプルな形のロングスリーブドレスには、エンブロイダリーレースとビーズが贅沢に施され、美しく清楚でありながら豪奢な仕上がりになっている。それに合わせてメイクも華やかな清楚系だ。そしてゆるくまとめ上げられたストロベリーブロンドには、長いベールがかぶせられていた。
　支度をした侍女たちは皆一様にうっとりとしている。ただ単に美しいから見とれているというわけではなく、自分たちの仕事に満足し、とても誇らしく思っているであろうことが窺えた。
　一方で両親は複雑そうだ。きれいだと喜びながらも、ときどきふと我にかえったように悲しそうな苦しそうな表情になる。この一方的な縁談を断れなかったことに責任を感じているのだろう。けれど――。
「お父さま、お母さま、これまで本当にありがとうございました。わたし、お二人のように幸せになります。だから、どうか心配なさらず笑って送り出してください」
　そう告げてシャーロットはふわりと笑う。
　二人は戸惑ったように互いにぎこちなく顔を見合わせたものの、娘としての最後の願

いを叶えようとしてくれたのか、寂しくも慈しむような笑みを浮かべてシャーロットに向きなおった。

色鮮やかなステンドグラスの光が落ちる教会に、オルガンの音色が響く。
結局、婚約者とは挨拶もできないまま結婚式を迎えた。戻ってきたのがギリギリだったのだ。それでも急いで支度をして間に合ったと聞いている。いまはもう向かいで待機しているのだろう。
新郎新婦は、それぞれ両側から中央の祭壇へ向かうことになっている。
シャーロットはベールを下ろしたままゆっくりと足を踏み出した。向こう側から新郎も歩き出した。視界がベールで霞んでいるため明確にその姿はわからないが、かなりすらりとして見える。
二人は同時に祭壇のまえに到達し、足を止めた。
シャーロットが目を伏せたままその場で片膝をつくと、新郎が一歩前に進み、丁寧な所作でそっとウェディングベールを上げた。そして新郎が一歩下がったのを確認して立ち上がり、前を向く——。
「……ッ！！」
声を出さなかった自分を褒めたい。
そこにいたのは、先日、カーディフの街で出会ったあのリックだった。そっくりなだけの別人かとも思ったが、彼がふっと意味ありげに口元を上げたことで、間違いなく本人だと確信する。
どうして、どういうこと——？
ひどく混乱したそのとき、新郎の名前がリチャード・ウィンザーだということを思い出す。リチャードだからリックと名乗ったのだろうか。シャーロットがロッテと名乗ったのと同じように。
わたしのことを知っていたの？
街で出会ったのは偶然なの？
本当にお父さまに懸想しているの？
わたしは、わたしのことは——。
様々なことが走馬燈のように脳裏を駆け抜けていき、ますます混乱する。
心ここにあらずで気付けば誓いの言葉も終わっていた。誓います、と司祭に促されて答えたことだけはかろうじて覚えている。
「指輪を交換してください」
彼は真面目な顔のままシャーロットの手をとり、プラチナの指輪をはめた。シャーロットも彼に指輪をはめる。それで指輪交換は終わりのはずなのに、彼は再びシャーロットの手をとった。
「えっ？」
プラチナの指輪に重ねてもうひとつ指輪をはめる。銀色の細い流線型のリングに、紫色の小さな宝石がはめ込まれていて——それは、シャーロットが街で惹かれたあの指輪に違いない。

顔を上げると、彼はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

それだけでどうしようもなく胸が熱くなる。どんな相手でも幸せになる努力をしようとは思っていたけれど、本当の本当にこのひとと結婚するのだとしたら、きっと、すごくうれしい――。

「それでは誓いのキスを」

その言葉にドキリとして鼓動が早鐘を打ち始めた。端整な顔が近づいてきたことに気付くとあわてて目を閉じる。やがて互いの息がふれあうのを感じてとっさに呼吸を止めた、そのとき。

「十年、君を待っていた」

そっと、シャーロットにだけ聞こえるような声でささやく。

驚いて思わず目を開けてしまったと同時に唇が重なり、すぐに離れていく。いろいろとついていけずにきょとんとするシャーロットを、彼は愛しさがあふれるような甘いまなざしで見つめて、声をかける。

「行こう」

彼が差し出した手に、シャーロットはいまだ当惑したまま手をのせた。

参列者の祝福を受けながら、二人はゆっくりと中央の通路を進んでいく。開け放たれた入口から外に出ると、雲ひとつない青空の下、集まっていた大勢のひとたちからわっと歓声が上がった。

「あとで、きちんと説明してくださいね」

喧噪にまぎれるように、隣のリック、いやリチャードを横目で見上げてそう告げる。ほんのすこしだけ唇をとがらせて。彼は前を向いたまま目を細めてふっと笑った。

「すべて正直に話すよ」

そう答えるなりひょいとシャーロットを横抱きにして、額にキスをする。

観衆が大きく沸き立つ中、シャーロットは顔が熱くなるのを感じながら、恨めしげに彼を睨む。それでも幸せそうに顔を輝かせている彼と目が合うと、つられるように笑ってしまった。

高く遠く澄みわたった青空に色とりどりの花びらが舞い、二人を包む。その鮮やかな光景のせいか、やわらかな香りのせいか、シャーロットは何か無性に胸がくすぐったくなるのを感じた。

公爵家の騎士団長は一目惚れの少女と結婚したい

俺って本当に信用ないな――。

雲ひとつない穏やかな青空の下、ウィンザー公爵家の嫡男であり王都の騎士団長でもあるリチャードは、殊更美しい白馬に乗ったままチラリと後ろを振り返ると、その光景にあらためて嘆息した。

二人の執事が、それぞれ栗毛の馬を駆って着いてきている。

来なくていい、その必要はない、むしろ来るなと言い渡したにもかかわらず、二人は旦那様の命令ですからと聞く耳を持たなかった。雇い主は父であるウィンザー公爵なのだから致し方ない。

この二人は腕が立つので、護衛としての役割を求められることも少なくないが、今回はお目付役としてついてきているのだろう。必ずリチャードを連れ帰るように厳命されたと聞いている。

しかし、リチャードにはもとよりすっぽかす気などない。

自身が十年ものあいだひそかに待ち望んでいたことなのだ。だからこそ待ちきれずにこうしてグレイ伯爵家へと向かっている。ここに至るまでの長い長い道のりに思いを馳せながら――。

「君はまたこんなところで寝ていたのか」

どことなくあきれを含んだ声が上から降ってきて、リチャードは目を開けた。

そこにいたのは同級生のアーサー・グレイだった。生真面目な性格を体現するかのように制服にはわずかな乱れもなく、木陰で仰向けに寝転んでいるリチャードを無表情で見下ろしている。

「別に構わないだろう。昼休みくらい」

リチャードは起き上がりもせずにそう応じると、ふわぁ、とあくびをした。生徒も先生もほとんど通らないここは、ひとりになりたいときに訪れる安息の場所だ。それを知っているのはアーサーだけである。

「経済学の課題を提出するよう先生から言付かった。期限は今日だぞ」

「ああ、あれならもうとっくに出来上がってるから心配するな」

「君は……なぜいつも期限ギリギリに提出しようとするんだ」
「期限を守ってるんだからいいだろう。遅れたことは一度もないぜ」
「……忘れるなよ」
　そう言うと彼はすぐに身を翻して立ち去っていった。
　あいつ、このためだけに来たのか――。
　緊急ではないのだから次の授業のときでもいいのに。まあ、そういう融通がきかないところがあいつらしいけど。さらさらと風に揺れる枝葉を眺めながらそんなことを思い、口元を緩ませた。
　向こうはどうだか知らないが、リチャードは彼にけっこう好感を持っていた。
　貴族の子息が数多く通っているこのパブリックスクールでも、公爵家の嫡男というのは特別らしく、機嫌を損なわないよう気を遣われたりへつらわれたりする。生徒だけでなく先生にさえも。
　だが、彼だけは違う。説教めいたことも平然と言ってくるし、間違っていると思うときには真っ向から反論してくる。頭にくることもあるが、こそこそと陰で言われるよりはよほどよかった。
「さてと、せっかく来てくれたことだし提出してくるか」
　リチャードは起き上がり、まだらな白い木漏れ日を浴びながら大きく伸びをした。

　結局、卒業するまでアーサーとは友達未満のままだった。
　その後、リチャードは王都の騎士団に所属したが、彼はグレイ伯爵領に戻ったらしく顔を合わせることもなくなった。連絡も取り合っていない。彼が結婚したということも元同級生の噂で耳にしたくらいである。

「え、アーサー？！」
　卒業から七年ほど過ぎたある日。
　騎士団本部を歩いていると、前方から歩いてきた男がアーサーに似ていて思わず声を上げた。その声に反応して振り向いた彼もすこしだけ目を大きくしたが、すぐに冷静な表情に戻る。
「ウィンザー侯爵、お久しぶりです」
「いや、リチャードでいいよ」
「そういうわけにはまいりません」
「相変わらずだな」
　リチャードは苦笑する。
　ウィンザー公爵家の嫡男であるリチャードは、現在、従属爵位であるウィンザー侯爵を儀礼称号として名乗っている。もっとも畏まった場でないかぎりリチャードと呼んでも構わないのだが、堅物の彼には難しいようだ。
「おまえ領地に帰ったって聞いたけど」
「はい、ですが王宮に勤めることになりまして」

「なるほどな」
　このところ王宮の事務方が不足しているという話だったので、彼のところへ話が行ったのだろう。領地のほうは領主である彼の父親がいるので問題ないはずだ。
「奥方も王都に来ているのか？」
「妻だけでなく子供たちも一緒です」
「へぇ、おまえが父親とはな」
　詳しく聞くと、娘一人、息子二人がいるという。彼が結婚して家庭を持つというのは何か不思議な感じだった。子供たちにどう接しているのかあまり想像がつかない。
「あなたは……」
「ん？　　ああ、俺は先日婚約したところ」
「それは、おめでとうございます」
　いわゆる政略結婚なので個人的にはあまりめでたくないし、むしろ気が重いのだが、両家にとっては確かにめでたいことだといえるだろう。否定はせずに曖昧な笑みを浮かべて受け流した。
「すみません、失礼ですがグレイ卿でしょうか？」
　そのとき、騎士団本部の事務方が頃合いを見計らったように近づいてきて、なぜか部外者であるアーサーのほうに声をかけた。
「そうですが……」
「さきほど近所の子供がこれを持ってきまして。どうやら見知らぬ男から騎士団本部に届けるよう頼まれたらしいのですが」
　差し出された封筒には『グレイ卿』と宛名が記してあった。
　二人して怪訝な顔になる。
　アーサーはたまたま用事で騎士団本部に来ただけだという。封筒を裏返しても差出人の名前は見当たらない。ただ封蝋には紋章のようなものが刻印されていて――それを認識した瞬間、リチャードは冷たい手で心臓を掴まれたようにゾクッとする。
「アーサー！　　いますぐ開けろ！」
「えっ、どういうことでしょうか？」
「いいから開けろ！！！」
　血相を変えたリチャードに気押されて、アーサーは戸惑いながらも封蝋を破り、二つ折りになっていた紙を取り出して開く。その瞬間、彼の顔からサーッと血の気が引いた。
「貸せ！」
　リチャードはそう言ってひったくるように奪い、目を通す。
　やはりか――。
　それはいわゆる脅迫状と呼ばれるもので、娘のシャーロットを誘拐したこと、その身代金を要求する旨が端的に記されていた。期限は三日。要求に従わなければ娘の命はないとのことだ。
　この一年、同じような事件が王都で三件起こっている。
　一件目、二件目は身代金を払って子供は無事に戻ってきた。しかし三件目では子供が殺された。身代金の受け渡しに来た男を捕らえたが、彼が自害し、子供の監禁場所を突き止められなかったのだ。

いずれの事件も封蝋の紋章などから同じ組織の犯行と思われた。そして今回も――封蝋に刻印されていたのは、過去三件と同じく月と刀をモチーフにした紋章である。手口からしても間違いないだろう。

そうした詳しいことをリチャードが知っていたのは、その組織が身代金をもとに国家転覆を企てているかもしれないということで、王都の騎士団のひとりとして捜査に当たっていたからである。

「アーサー、おまえ身代金は用意できそうか？」

「領地に帰れば……ですが、三日で用意できるかは……」

「だったら俺が個人的に貸してやる」

「えっ」

アーサーが驚きの声を上げて目を見開いた。その瞳が揺れる。

「いえ……それ、は、さすがに……」

「他に当てはあるのか？」

平時の彼であれば絶対にこんな申し出は受けないだろう。けれどいまは娘の命がかかっている。グッと静かに奥歯を食いしめて逡巡していたかと思うと、深く頭を下げた。

「お言葉に甘えさせていただきます」

「おまえは家に帰って状況を確かめてこい」

「わかりました」

アーサーが踵を返すと、リチャードもすぐさま隊長のところに赴いて報告する。ほどなくして自分たち一番隊が任務に就くことに決まった。二番隊、三番隊も必要に応じて支援につくという。

ただ、騎士団はあくまで国家転覆を謀る組織を一網打尽にするために動く。一応、人質の命が最優先ということになっているが、それが建前であることは騎士団員なら誰しも理解しているだろう。

それでも、絶対に娘は助ける――。

見たこともないほど顔面蒼白になったアーサーの姿を思い浮かべながら、リチャードはグッとこぶしを握りしめた。

戻ってきたアーサーによると、シャーロットはいつものように侍女の買い出しについていったが、侍女だけが路地裏でうつぶせに倒れているところを発見され、近くの病院に運ばれていたそうだ。

意識を回復したばかりの侍女に話を聞いたところ、いきなり後ろから殴られたので顔は見ていないが、船乗りのような靴を履いていたとのことである。そしてかすかながら潮の匂いもしたという。

「やはり港だ」

以前の事件で、無事に戻った子供たちは『ゆれた』と証言し、遺体で戻った子供からは潮の匂いがした。それらの情報から船が監禁場所ではないかと推測したが、手がかりはつかめなかった。

しかし現在進行形で監禁が行われているのだとしたら、必ず何かしらの手がかりがつ

かめるはずだ。隊長の許可を得たうえで、リチャードは三人の後輩をつれて王都の外れにある港へと向かった。

「怪しいな」
「ええ」
　リチャードは隣の後輩とひっそり言葉をかわす。
　二手に分かれて港の様子を見ていると、小型船のひとつに複数の男が出入りしていることに気付いた。ずっと停泊したままで出港準備をする様子もないのに。ひとまず本部へ報告しておこうかと考えた、そのとき。
「たすけてぇええっ！　おとうさまぁあああっ！！！」
　その小型船から、助けを求める子供の声がはっきりと聞こえた。
　おそらく誘拐された娘だろう。
　口をふさがれたのかすぐに聞こえなくなってしまったが、これまでの手口からして期限までは生かしておくはずだ。焦る気持ちを抑えつつ、このことを本部へ報告してくるよう隣の後輩に指示を出した。

　救出作戦は夜明け前に決行することになった。
　小型船の子供は、誘拐された娘のシャーロットでほぼ間違いないという結論に達している。念のためアーサーにはリチャードが用立てた金を身代金として貸してあるが、使うことはないだろう。
　救出作戦が完了すると、すぐさま別動隊が組織の拠点に突入する手筈になっている。小型船から出てきた男が街で連絡係らしき人物と接触しており、そこから組織の拠点が判明したのだ。
　本当は、素直に身代金を払ったほうが娘が助かる確率は高い。
　それでも騎士団としてはこの機を逃すわけにはいかなかった。これからの被害者をなくすためにも。もちろん人質の命を蔑ろにした作戦であれば全力で反対したが、そうではない。だから――。
　何がなんでもこの作戦を成功させる。
　いまのリチャードにできるのはそれだけだ。強く意気込みながらも決して冷静さを失うことのないよう心がけつつ、救出作戦実行部隊のリーダーとしてあらためて気を引きしめて、決行の時を待った。

　船には三人の男が乗っている。
　外で見張っているのが一人、中にいるのが二人だ。娘も中にいるのだろう。もしかすると他にも潜んでいる人物がいるかもしれないが、船の大きさからして可能性は低いという判断である。
　まずは騎士一人が泳いで沖のほうから船に侵入し、そっと見張りの背後に近づくと、

口をふさいで首を絞めて一気に落とした。そして彼の合図で、リチャードを含めた騎士三人がひそやかに乗り込んだ。

カーテンの隙間から中を覗くと、一人は長椅子で横になり、もう一人は椅子に座ってうつらうつらしていた。そして娘は奥のほうに転がされている。手足を縛られ、目隠しをされ、口をふさがれたままで。

四人の騎士は打ち合わせどおり所定の位置につく。両側の窓にそれぞれ一人、入口の扉に二人。リチャードは扉のほうだ。合図を出すと全員無言でカウントを取り始める。五、四、三、二、一……。

ドゴン！　ガシャガシャン！！

三方から同時に窓や扉をぶち破って四人の騎士が突入し、男たちを取り押さえた。二人とも夢うつつだったせいか抵抗らしき抵抗もなく、終わってみれば実にあっけない幕切れだった。

「……っ！」

息を飲む音に振り向くと、娘が床に転がったまま驚愕したように目を見開いていた。いつのまにか目隠しがすこしずれている。もしかすると一連の逮捕劇を見てしまったのかもしれない。

リチャードは男たちを連行するよう部下に命じてから、しゃがんで娘を覗き込む。

「シャーロットだね？」

そう尋ねると、彼女は怯えたように顔をこわばらせながら曖昧に頷いた。リチャードは意識的に表情をやわらかくして続ける。

「俺は騎士のリチャード。お父さんに頼まれて君を助けに来たんだ。いまから口のそれを外してロープをほどくけど、いいかな？」

『お父さん』と聞くなり彼女はハッとして目を見開き、今度はしっかりと頷いた。

下方にずれていた目隠しの布を外し、猿ぐつわを外し、手足を縛っているロープをほどくと、あたたかくてやわらかい小さな体をそっと起こす。そのとき、壊れた窓から差し込んでいた朝日が彼女を照らし出した。

――……っ！

リチャードは言葉もなく息を飲む。

潤んできらめく緑の瞳がまっすぐにリチャードを捉えていた。濡れたまつげはかすかに震え、小さな口はきゅっと結ばれ、目に涙をためながらも必死に泣くのを堪えていることが窺える。

「泣いてもいいんだぞ」

そう告げても、彼女はふるふると首を横に振るだけだった。

しかしそっと頭を抱き寄せると、おずおずと縋るようにリチャードの上着を掴んで顔を埋めてきた。簡単に壊れてしまいそうな幼気な体をわずかに震わせながら。

早朝の朝靄の中を、リチャードは白馬に乗ってゆっくりと進む。

自分のまえにはシャーロットを乗せていた。怯えることもなく思いのほかしっかりと危なげなく座っている。緩いウェーブを描くストロベリーブロンドはふわふわと揺れ、

朝日を浴びて輝いていた。
「騎士さま」
　ふいに彼女が振り返り、リチャードはやわらかく微笑んで緑の瞳を見つめ返した。
「なんだい？」
「わたしも騎士さまみたいに強くなりたいです」
「そうだな、頑張ってたくさん訓練したらなれるかもな」
「……がんばります」
　幼子とは思えないほど真剣に答える彼女を見つめたまま、そっと頭に手を置く。
　それだけで胸がキュッと熱くなる。できることならもっと触れたいし、抱きしめたいし、手放したくない――そのときにはもう自分の感情を理解していたものの、目をそらすつもりはなかった。

「シャーロット！！！」
　騎士団本部のまえでアーサーが待ち構えていた。無事に救出した旨の連絡は受けていたと思うが、それでも居ても立ってもいられなかったのだろう。シャーロットの姿に気付くなり全力で駆け寄ってきた。
　リチャードは馬を止め、道中で眠りに落ちたシャーロットを片手で抱いて下りると、待ちきれずに両手を差し出しているアーサーに渡す。彼は泣きながら娘を抱きしめてその場に崩れ落ちた。
「ありがとうございます。本当になんとお礼を言ったらいいか……ああ……」
「俺は騎士として仕事をしただけだ」
　そう受け流し、じゃあなと軽く手を上げて仲間とともに騎士団本部に入っていく。まだ後処理などやらなければならないことが山積みなのだ。チラリと振り返ると、アーサーは娘を抱いたまま深く頭を下げて見送っていた。

「ロゼリア・クレランス嬢との婚約を解消したい」
　リチャードは父であるウィンザー公爵にそう告げて、書類を差し出した。
　それはクレランス侯爵家の調査報告書である。例の組織による誘拐事件が一段落したあと、リチャードが自ら調査してまとめたものだ。ウィンザー公爵はそれを怪訝な面持ちで手にとり、目を通す。
「……なるほど、限りなく黒に近いグレーだな。だが黒と証明するのは難しい」
　クレランス侯爵家には不透明な金の流れがあった。もはや黒としか考えられないような状況ではあるものの、決定的な証拠までは掴めていない。しかしながらそれも織り込み済みである。
「我々が証明する必要はありません。この件を告発すれば本格的な調査が入りますし、証拠も見つかるでしょう。そうなれば相手の瑕疵として婚約を破棄できます」
「そこまで追いつめては恨みを買うぞ」
「ええ、ですから告発するまえにクレランス侯爵に持ちかけるつもりです。この不正を

すぐに是正して婚約解消に合意するのであれば、告発も公表もしないと」
「なるほど、おまえの計画はわかった」
　ウィンザー公爵は疲れたように重々しく溜息をついた。そして視線を上げると、奥底まで見透かすようなまなざしを向けて問いかける。
「どうしてそこまでロゼリア嬢との結婚を回避したい？」
　彼は気付いていた。クレランス侯爵家が不正を行っているから婚約を解消したいのではなく、婚約を解消するためにクレランス侯爵家の不正を突き止めたということに――それでもリチャードは動じることなく答える。
「他の女性と結婚したいからです」
　女性といっても、まだ当分は結婚できない少女だけれど。
　さすがに自分でもどうかと思わないでもなかったが、抗えないくらい惹かれてしまったのだから仕方がない。幼女趣味ではなく、運命の相手がたまたま自分より年若かっただけなのだ……多分。
「どこのご令嬢だ」
「わたしが一方的に考えているだけなのでまだ言えませんが、家柄にも本人にも問題のない未婚女性です。ただ、結婚の約束を取り付けるまでには少々時間がかかると思います」
　少々どころか十年くらいかかってしまいそうだが――まずはこの婚約を解消しないことには始まらないので、そこは曖昧に伏せておく。とりあえず嘘は言っていないのだから構わないだろう。
　ウィンザー公爵は難しい顔をして溜息をついた。
「おまえが何を考えているのか今ひとつ測りかねるが、クレランス侯爵家の不正を知ってしまった以上、どのみちこのまま婚姻を結ぶわけにはいかない。ロゼリア嬢との婚約は解消しよう」
「ありがとうございます」
　ほどなくしてロゼリア嬢との婚約は穏便に解消された。一方的な婚約破棄ではなく、双方の合意による婚約解消という形である。告発されるよりはとクレランス侯爵が素直に応じたのだ。
　そういう事情なので、当然ながら婚約解消の理由は公表していない。
　もともと政略結婚であることは知られていたので、ウィンザー公爵家側の都合によるものではないかというのが一般的な見方だが、一部ではリチャードが男色に目覚めたからだとまことしやかに囁かれていた。
　なんでだよ――！
　一体全体どうしてそうなるのかわけがわからず、頭を抱えたくなる。
　それでもあえて否定はしなかった。シャーロットが成人するまで結婚を回避しなければならない身としては、縁談を持ちかけられることも令嬢に言い寄られることも格段に減るので、都合がよかったのだ。

「よう、元気にしてるか？」
　あの日から、王宮で仕事をするアーサーのもとをたびたび訪れるようになった。

　シャーロットも含めて妻子は領地へ戻ったと聞いている。あんなことがあったのだから無理もない。落ち着いたら会いたいと思っていたので残念ではあるが、あきらめてはいなかった。
「おまえ十日ほど領地に帰るんだって？」
「そんなことまでよくご存知ですね」
「それさ、俺もついていっていいか？」
「……何か御用がおありなのでしょうか」
「シャーロットに会いたくなってな」
　冗談めかして軽く答えたが、それを聞いたアーサーはなぜか苦しげに目を伏せ、机の上で組み合わせていた両手にグッと静かに力をこめた。
「あなたがシャーロットを救ってくれたことには、本当に心から感謝をしています。ですが……こちら側の事情で非常に申し訳ないのですが、シャーロットには会わないでいただきたいのです」
「事情？」
「シャーロットはあの事件のことをあまり覚えていないようなのです。それだけショックが大きかったのでしょう。ですから、それを思い出させるようなことは避けたいと考えていまして」
「そうか……それなら仕方ないな……」
　事情は理解した。
　それなりの時間が経過しているならともかく、あれから一年も経っておらず、彼女もまだ幼いのだから、残念ではあるが気をつけてしかるべきである。
「じゃあ、せめて写真を撮ってきてくれないか」
「……わかりました」
　本来、写真は貴族でも特別なときにしか撮らないので、こんなに気軽に頼むようなものではないのだが、彼は拍子抜けするくらいあっさりと了承してくれた。きっとせめてもの誠意なのだろう。

「シャーロットの写真です」
　アーサーは領地から戻ってくると、騎士団本部のリチャードを訪ねてきて五枚の写真を机に並べた。肖像画のようだったり、立ち姿だったり、座り姿だったり、顔のアップだったりと様々な姿を捉えている。
「あのときよりもすこし大きくなってるよな」
「はい、元気にすくすくと育っております」
　写真からも成長が見てとれて微笑ましい気持ちになる。そして芯の強そうな凜としたまなざしには胸が熱くなり、聡明さを感じさせる表情には心を掴まれ、かわいい顔には愛おしさがあふれた。
「ありがとな。五枚ももらえるとは思ってなかったよ」
「……あの……差し上げるつもりはなかったのですが」
「えっ？」

思わずきょとんとする。どういうことかわからず怪訝な顔になるが、彼のほうもまた困惑しているようだった。
「元気にしている姿をお目にかければいいだけかと」
「いや、せっかく撮ってきたんだからくれよ」
「ですが……よその子供の写真なんて要りますか？」
「俺とおまえの仲だろう！」
写真が欲しいあまり不自然なくらい必死に言い募ってしまった。
彼は困惑の色を深めていたが、それでもリチャードに恩義を感じているからか、気を取り直したようにわかりましたと首肯する。
「それでは一枚だけ差し上げますのでお選びください」
「ん、一枚だけ？」
「もともとわたしが眺めるために持参したものですから」
「なるほど、それで五枚も撮ってきたというわけか」
なかなかの親馬鹿だ。王都と領地で離ればなれに暮らしているのだから、せめて写真だけでもという考えは納得できるのだが、あの堅物のアーサーがなぁと何か不思議な気持ちになる。
「んー……じゃあ、これをもらうよ」
五枚の中から顔がアップになっているものを選んだ。まるでこちらを見つめているかのような緑の双眸が、印象的に捉えられている。リチャードが最初に惹かれたのはこの瞳だったのだ。
アーサーは残りを回収し、脇に抱えていた仕事用のファイルに大事そうに挟んだ。
「あなたも早く結婚すればいい。我が子はかわいいですよ」
「そうはいっても当分のあいだは結婚できないんだよなぁ」
「それは、どうして……」
聞いていいのか迷ったらしく遠慮がちに尋ねてきた。リチャードはふっと思わせぶりに口元を上げながら、彼に視線を流す。
「おまえのせいだ。責任は取ってもらうからな」
「えっ……わたしの……？」
嘘は言っていない。彼の娘と出会ったせいでこうなってしまったのだから。いずれ結婚させてもらうから覚悟しておけ――動揺する彼を見て、胸の内でそんなことを思いながら悪戯っぽく笑った。

以来、アーサーは帰郷のたびにシャーロットの写真を撮ってくるようになった。
リチャードもそのたびに一枚もらっていた。そして、そのついでに彼からシャーロットの様子を聞くことを楽しみにしていた。義理堅いので何だかんだ言いつつもつきあってくれるのだ。
本当は写真だけでなく実際に会いにいきたいと思っているのだが、アーサーには断られつづけている。いまでもまだ娘の記憶がよみがえることを恐れているらしい。気持ちはわからないでもないけれど。

「弱ったな……」
　これではシャーロットが成人するまでに親しくなるという正攻法がとれない。
　最終的には公爵家として正式に申し入れをするつもりだが、下位の伯爵家でも断れないわけではない。アーサーなら相手が公爵家でも命の恩人でも断るだろう。娘のためにならない縁談であれば。
　とりあえず縁談などまだまだ考えるつもりもないと言っていたので、いましばらくは安心だが、だからといっていつまでも手をこまねいているわけにはいかない。彼女が成人になるまでもう六年もないのだから。

　休日の昼下がり、リチャードは久しぶりに従兄弟のエドワードのもとを訪れた。
　子供のころは親戚としてときどき一緒に遊んだ仲だが、いまの彼は国王である。いかに従兄弟といえどふらりと訪れることはできず、たまには会いたいと時間を取ってもらった次第だ。
　彼の私室に通されて、用意されたお茶を飲みながら互いに近況を話し合う。私的な場ということで口調も砕けたものになっていた。そのうちに幼いころのいろいろな出来事にまで話が至り、盛り上がっていたのだが――。
「それで、本題は何だ？」
　一段落したところで、彼は不意打ちのようにそう切り込んできた。涼しい顔のまま見透かしたようなまなざしをこちらによこして。リチャードは思わず苦笑する。
「あいかわらず嫌になるくらい察しがいいですね」
「おまえがわかりやすいだけだ」
「そんなことを言うのはあなただけです」
　この九歳上の従兄弟には幼少のころからずっと敵わなかった。リチャードはあらためてすっと姿勢を正して彼を見つめると、用件を告げる。
「縁談の申し入れをする際、あなたに国王陛下として口添えをお願いしたいのです」
「口添えね……わかっているとは思うが、従兄弟だからといって特別扱いすることはできんよ。わたしを、そして皆を納得させられるだけの道理はあるのかい？」
「騎士団長に就任した際にいただける支度金の代わりであれば、前例があります」
「ほう」
　エドワードの目が興味深そうに輝いた。
　一般的には国益となる功績を挙げたときに褒美として口添えしてもらうのだが、いまは周辺国と和平を結んでおり、一介の騎士が国益となる功績を挙げることは現実的に不可能と言っていい。
　他に何か方法はないだろうかと必死に調べたところ、騎士団長就任の折に、支度金を辞退して口添えを求めた人物が過去にいた。異例ではあるが、前例があるのだから不可能ではないはずだ。
「おまえは騎士団長になるつもりなのかい？」
「はい、そのつもりです」
　昇進についてはこれまであまり積極的に考えてこなかった。だがシャーロットと結婚

するためなら本気で騎士団長を目指す。動機は不純だが、職務はもちろん真面目にしっかりと果たすつもりだ。
「いいだろう……と言いたいところだが、女性側の意思を蔑ろにする口添えはいささか時代遅れでね。わたしもあまり気が進まない。相手の女性とすでに恋仲になっているというなら話は別だが」
「……俺は、必ず彼女を幸せにします」
　もちろん一点の曇りもない本心ではあるのだが、論点はそこではない。わかっていてもそう宣言することしかできなかった。いたたまれなさを感じて曖昧に目を伏せると、エドワードが軽く肩をすくめた。
「まあ、当主のウィンザー公爵に無断で進めるわけにもいかないからな。彼と相談して結論を出すことにしよう。騎士団長になるにはまだしばらく時間がかかるだろうし、それで構わないな？」
「はい」
　どのみち父であるウィンザー公爵に賛成してもらわなければ始まらない。リチャードは祈るような気持ちで深々と頭を下げた。

「おまえ、結婚したい女性なんて本当にいるのか？」
　後日、父であるウィンザー公爵に領地まで呼びつけられた。
　エドワードが縁談の口添えについて彼に相談すると言っていたので、その話だろうと予想はしていたが、まず大前提である結婚したい女性の存在を疑われるとは思わなかった。
「ロゼリアとの婚約解消を求めたときにそう言ったはずですが」
「あれから五年だぞ。男色を隠すための方便かと思っていたよ」
「あなたまでそんな噂を信じてたんですか……」
　新たに婚約する気配もなく、浮いた話もないことから、一部ではいまだに男色だの何だのと囁かれているようだが、まさか家族にまでそう思われていたなんて――さすがにげんなりしてしまう。
「では、相手がどこの令嬢なのか今度こそ教えてもらおう。陛下に口添えを頼む以上、素性を伏せたままというわけにはいかんからな。公爵家にふさわしい相手かどうかをまずこちらで見極める必要もある」
　できれば彼女がもうすこし大きくなるまで伏せておきたかったが、その言い分はもっともである。彼の意向に反してまで隠しつづけるのは得策でないと判断し、正直に答えることにした。
「グレイ伯爵家のシャーロット嬢です」
　それを聞いて、彼は考えをめぐらせるように首をひねる。
「グレイ伯爵家には確か息子しかいなかったと記憶しているが……おまえが親しくしている元同級生のアーサーが長男で、あとは次男、三男、四男だけではなかったか？」
「そのアーサーの娘です」
「ああ、そういうことか……ん？」

納得しかけたところで混乱したように再び首をひねった。その顔は、だんだんと困惑をにじませた不安そうなものに変わっていく。
「その娘は何歳なのだ？」
「いま十歳ですね」
予想はしていただろうが、予想以上の若さだったのかもしれない。
彼は愕然として組んでいた両手のうえにうなだれかかった。そのまましばらく身じろぎもせず固まっていたかと思うと、やがて疲れたように深く溜息をついて顔を上げる。
「このことを他に誰が知っている？」
「父上にしか話していません」
「もう誰にも口外するんじゃないぞ」
「わかっています」
彼に請われて、シャーロットとの出会いについてなど詳細を話していく。
誘拐事件のときに出会ってどうしようもなく惹かれたこと、顔を合わせたのはそのときだけということ、アーサーにも気持ちを伝えていないこと、アーサーからたびたび写真をもらっていること――。
ウィンザー公爵は何とも言えない複雑な顔をして聞いていたが、話が終わると椅子の背もたれにゆっくりと身を預け、しばらく思案をめぐらせるような素振りを見せたあと、静かに口を開く。
「このことは陛下にも話すが構わないな？」
「それは……ええ……」
「口添えについては陛下と相談のうえでどうするか決める。おまえは騎士団長になれるよう励め。騎士団長を拝命しないかぎり話は始まらないのだからな」
リチャードはひとまず断られなかったことにほっとして、深く頭を下げた。
可能性があるのなら口添えを得るための努力は惜しまない。だが、たとえ口添えを得られなかったとしても結婚をあきらめるつもりはない。そのときのために別の方法もすでに模索していた。

三年後、アーサーが慌ただしく王宮の職を辞して領地に戻った。父親であるグレイ伯爵が急死したため爵位を継ぎ、当面は領地経営に専念するのだという。再び王宮勤めをするかは未定とのことだ。
しばらくして、彼から挨拶と近況をしたためた手紙が届いた。律儀にもシャーロットの写真を添えて。愛らしく凛々しく聡明に成長しつつある彼女の姿を見て、ふっと頬が緩んでしまったが。
俺が何を望んでいるかを知ったら、おまえは――。
彼と親しくなるにつれて、騙して利用していることへの罪悪感が大きくなっていく。いつだって誠実に接してくれるからなおのこと。それでもこの望みだけはどうしても譲るつもりはなかった。

さらに一年が過ぎ、リチャードはようやく騎士団長を拝命した。
すぐさまグレイ伯爵家にシャーロットとの縁談を申し入れる。国王陛下の口添えとともに。こうなると余程の事情がないかぎり断ることはできないのだ。それでも承諾の返事が届くと大きく安堵した。
あいつ、俺を軽蔑してるかもな――。
形式的な文面からは彼がどう思っているかなどわかりようがない。それでもどんな気持ちで返事をしたかは想像がつく。もとより覚悟を決めたうえでこういう選択をしたはずなのに、胸が苦しかった。
「え、アーサーが？」
そんな折、彼が騎士団本部を訪れてリチャードに面会を求めてきた。部下に通すよう命じると、ややあって彼が一礼して騎士団長の執務室に入ってくる。その表情はいつもより硬い。
「……久しぶりだな」
「はい」
部下を下がらせると、二人きりで応接ソファに向かい合って座る。
「約束もなくお伺いして申し訳ありません。所用で王都まで来たので、失礼ながらついでに寄らせていただきました」
「来てくれてうれしいよ」
リチャードが淡い微笑を浮かべてそう応じると、アーサーも頬を緩めた。縁談には触れないまま互いに近況などを話すものの、長くは続かず、やがて息の詰まるような気まずい沈黙が落ちる。
「……シャーロットは」
そう切り出したのはアーサーだ。しかしながら目は曖昧に伏せられたままである。
「あの子は、わたしたち夫婦にとってかけがえのない大切な娘です。これまで愛情をもって大事に育ててきました。なので……こんなことを言える立場でないのは重々承知しておりますが……」
彼はそこで意を決したように顔を上げるとリチャードを見据えて訴える。
「どうか、シャーロットを幸せにすると約束してください」
その声にはどこか悲痛な響きがあった。
本当は卑怯だと非難したかったのかもしれないし、最低だと侮蔑したかったのかもしれないし、裏切られたと怒鳴りたかったのかもしれない。けれど彼に言えるのはそれが精一杯だったのだろう。
「ああ……必ず幸せにすると約束する」
リチャードはまっすぐ目をそらすことなく受け止めて、真摯に応じた。

それから数か月、挨拶にも行けないまま婚儀の日が迫っていた。
騎士団長に就任したばかりで思った以上に忙しかったのだ。王都で重要な行事がつづいたというのもある。何より婚儀のときに十日も休暇を取ることを考えると、それ以前にもというのは躊躇われた。

アーサーは無理して来なくてもいいと言ってくれた。
しかし直前になり結婚休暇を一日前倒しにできたので、急遽、連絡も入れないままグレイ伯爵家へ行くことにした。挨拶をして、その翌日に一緒にウィンザー公爵家へ向かえばいいと考えて。
本音を言えば、挨拶より何より一刻も早くシャーロットに会いたい、顔を見たい、姿を見たい、声を聞きたい、できればほんのすこしでいいから触れたい。ただそれだけなのだけれど——。

カーディフの街に到着したのは予定どおり夜だった。
ここからほど近いグレイ伯爵家にはあした向かうつもりである。今日のところは馬を預けて大通りの宿に泊まった。執事二人は隣の部屋だが、寝るとき以外はリチャードの部屋に居座った。
「本当にグレイ伯爵家に行くんですか？」
「あたりまえだろう」
翌朝、宿の近くにあるカフェで執事二人と朝食をとった。
彼らはいまだにグレイ伯爵家に行くことに難色を示している。失礼になるとか迷惑になるとかで。ここに来るまでの道中でもさんざん引き留められたのだが、気持ちは変わらなかった。
「さあ、そろそろ準備をして行くぞ……ん？」
カフェを出て、着替えるためにいったん宿に戻ろうとしたそのとき——向かいを軽やかに歩く少女が目に留まった。すこし距離があり顔もはっきりとは見えなかったが、それでも見紛うはずがない。
「あの子はシャーロットだ」
「えっ……？！」
特徴的なストロベリーブロンドからしても間違いない。
だが、彼女はグレイ伯爵家の敷地外に出ることが許されていないはずだ。もしかしたら今現在は変わっているのかもしれないが、さすがにひとりで街をうろつくことが許されているとは思えない。
執事二人とこっそりあとをつける。
彼女は大通りにある最も店構えのいい宝飾店に入った。窓から覗くと、どうやら手持ちのネックレスを売ろうとして断られたようだ。未成年で身分証も持っていないのだから当然の結果である。
沈んだ顔をして彼女が出てきた。声をかけようかどうしようか迷っていると、そそくさと近づいてきた怪しい男にあっさりと騙されている。こうなってはもう静観などしていられない。

「おまえらは出てくるんじゃないぞ。いいな？」
「あ、ちょっと……！」
　執事二人に言い含めると、そろりと背後から男に近づいて汚い手をひねり上げる。
「イテテテテテテ！」
　男は苦痛に顔を歪ませながら悲鳴を上げた。逃れようともがいているが力はすこぶる弱い。雑魚だ。リチャードは無表情のまま冷たく吐き捨てるように言う。
「いますぐ失せろ」
「わかったわかった！」
　手を離すと、男はその反動でよろけて蹴躓いてひとり地面に転がった。よろよろと起き上がり、リチャードから距離を取ったまま恨めしげに睨みつける。
「チッ、護衛がいたのかよ」
　失敗したとばかりにそんな捨て台詞を吐いて、路地裏へと走り去った。

　シャーロットは唖然としていた。
　そんな表情もかわいい。現実の彼女は写真とは比べものにならないほど色鮮やかで、みずみずしくて、やわらかそうで、あたたかそうで、いい匂いもして、こうやってただ見ているだけでドキドキする。
　しかし彼女の後方で呆れたような顔をしている執事が目に入り、我にかえった。さほど表情には出ていなかったのではないかと思うが、あらためて真面目な顔を装ってから彼女に声をかける。
「ここで客引きをするのは大抵ロクなやつじゃない。君のような世間知らずな子はいいカモだ。二束三文で買いたたかれるくらいならまだマシで、取り返しのつかない悲惨な目に遭うこともある」
「……助けてくださってありがとうございます。ご迷惑をおかけしました」
　ようやく彼女も我にかえり、美しく可憐な声でそう応じて深々と一礼した。しかし急に不安そうに顔を曇らせたかと思うと――。
「お金……どうしましょう……」
「……」
　意に沿わない結婚を目前に控えているときにひとりで街に来て、手持ちのネックレスを売ってまで金を得ようとするなんて、嫌な予感しかしない。
「どうしてそこまで現金がほしいんだ？」
「わたし、結婚のために明日この地を離れる予定で」
「まさか結婚が嫌で逃亡とかじゃ……ない、よな？」
「最後に街で遊びたかっただけです」
　彼女がそう無邪気に笑いながら答えるのを聞いて、安堵の息をついた。
　とりあえず結婚から逃げ出すつもりはないようだ。しかし一日だけとはいえこうやって前日に逃亡しているのだから、嫌ではあるのかもしれない。たとえそうでも結婚をあきらめてやることはできない。だから――。
「それなら俺が協力するよ」

せめて、このささやかな願いくらいは叶えてやりたいと思ったのだ。

さきほどの宝飾店で、リチャードが騎士団長の身分を明かして頼んだところ、すぐに態度を翻してネックレスを買い取ってくれた。断られたら公爵家の身分証を見せるつもりでいたが、その必要はなかった。
「ありがとうございました」
店を出るとシャーロットは深々と頭を下げる。
あのネックレスは未成年が持つにしてはなかなかの品だったらしく、かなり高値で売れたが、本当に売ってしまってよかったのかはいささか心配になる。まあ、いざとなれば買い戻せばいいだろう。
「俺のことはリックと呼んでくれ。君は？」
「……ロッテと」
ありのままの彼女をもうすこし見てみたいという出来心で、ひとまず素性を隠すことにした。リチャードという名前だけで気付かれるとは思えないが、念のため短縮形を告げる。彼女も素性を隠そうとしているのか短縮形を名乗った。
「ロッテ、君はこれからどうするんだ？」
「まずカフェに行って、それからお芝居を観に行くつもりです。そのあとのことはまだ決めていませんが、いろいろとお店をまわってみようかなって」
わくわくと心躍らせながら話す彼女はとてもかわいらしかった。ただただ楽しみで仕方がないという気持ちが伝わってくる。だからこそ危なっかしくてとてもひとりにはしておけない。
「それさ、もしよかったら俺も同行させてもらえないか？」
「えっ、でもこれ以上ご迷惑をおかけするわけには……」
「いや、ちょうどひとりで寂しいと思ってたところなんだ」
「それでしたら、ぜひ」
彼女は愛らしい笑顔でそう答えた。
もちろんリチャードとしてはありがたいのだが、あまりにもあっさりと承諾されたことについては何とも言えない気持ちになる。ますますひとりにはしておけないと思ってしまった。

これは、いわゆるデートなのでは――？
カフェの窓際の席でシャーロットと向かい合わせに座っていたところ、ふとそんなことを考えてしまい、だらしなく顔が緩みそうになるのをこらえて努めて何気ない表情を装った。
窓の外では執事二人がじとりとした視線をこちらに送っている。いいかげんにしてくださいという声が聞こえてくるかのようだ。それでも出てくるなという命令には従ってくれるらしい。
幸いにも彼女はそんな二人に気付いていない。初めて見るカフェにきらきらと目を輝

かせたり、まわりの視線に落ち着かなさそうにそわそわしたり、いちいち初々しい反応をしている。けれど——。
「騎士？！」
　王都の騎士団に所属していると話したらすごい勢いで食いついてきた。驚いて思わずのけぞりがちに目を瞬かせると、彼女は我にかえり、恥ずかしそうに頬を染めながら居住まいを正す。
「わたし、王都で誘拐されたことがあるんですけど、そのとき騎士の方に助けていただいて。まだ五歳だったので、当時のことはうっすらとしか記憶にありませんが、それでもわたしにとって騎士は憧れの存在になったんです」
「そう、か……」
　誘拐のことは記憶から消え失せているという認識だったが、そうではなかった。しかもそのときの自分たちを見て騎士に憧れてくれたなんて——くすぐったくて、うれしくて、思わず口元が緩みそうになってしまった。

「なあ、君の婚約者ってどういうひとなんだ？」
　結婚の話が出たついでに、緊張しつつもさりげなくそんな質問を振ってみる。どう思っているのか彼女の本音を聞いてみたかったのだ。
「まだ会ったことがないのでわからないんです」
　シャーロットは肩をすくめる。
「急に決められた結婚なので。相手は父と同じ年齢の侯爵様だと聞いています。悪い奴ではないと父は言っていましたが……その……ここだけの話にしてもらえます？」
「ああ」
　流れからしてどうやらあまりいい話ではなさそうだ。不安を感じながらも素知らぬ顔をしたまま頷くと、彼女は小さな口の横に小さな手を添えて身を乗り出し、こそっと小声で言う。
「その方、どうやら男色家らしくて」
「えっ……」
「十年前、それに目覚めて一度婚約を破棄しているんだそうです。でも嫡男なので、家存続のために仕方なく結婚することにしたんだろうって。両親がこっそり書斎でそう話しているのを聞いてしまって」
　まさかアーサーにそう認識されていたなんて——。
　確かに男色の噂はあったが、彼はずっと変わりなく普通に接してくれていたので、てっきり知らないものとばかり思っていた。たとえ知っていても、そもそも軽率に噂を鵜呑みにする人間ではないはずだ。怪訝に思いながら、渇いた喉を潤そうとティーカップを手にとる。
「それってただの噂だったりはしないのか？」
「いえ、父は実際その方に懸想されているらしいです」
「ブフッ」
　思わず飲みかけていた紅茶を吹いた。どうやら彼女にはかからなかったようだが、そ

れでもハンカチで口元を拭いながらすまないと謝罪する。彼女はあまり気にしてなさそうでほっとした。
　それにしても……懸想って、俺が、あいつに？！
　一体全体どうしてアーサーはそんな突拍子もない勘違いをしたのだろう。あまりにもわけがわからなくてクラクラする。それならわざわざ娘のシャーロットを結婚相手に選んだりはしないはず――いや。
「まさか、父上の身代わりとして君が望まれたとかいうんじゃ……」
「父はおそらくそうではないかと推測していました。先方がこの結婚を強く希望したらしくて。父としては断りたかったけれど、事情があって受け入れるしかなかったそうです」
　おまえなぁ！！！
　頭を抱えながらうなだれる。これではまるで歪んだ執着心をもった危ない奴だ。いますぐ釈明したい衝動に駆られたものの、グッと堪える。ここで感情的に行動するのは得策ではないだろう。
「君は、嫌じゃないのか？」
「心配ではありますけど、わたしと向き合ってくださるのならそれで十分です。せっかく家族になるのですから仲良くしたいですし、そのためにはこちらが心を閉ざしていてはいけませんよね」
　気負いのない様子からしても本心だろう。
　前向きに受け入れる心づもりがあることにはとりあえず安心した。だがそれは相手がリチャードだからというわけではない。顔合わせもしていないのに望みようのないことだとはわかっていても、それでも――。
「よし、今日は思いっきり楽しもう！」
「え……あ、はい」
　リチャードは気持ちを切り替えた。
　誤解はあれど、彼女に結婚から逃げる意思がないのなら焦る必要はない。ここでどうにもならないことをモヤモヤと考えているより、いまは彼女の希望を叶えることだけに注力しよう、そう心に決めた。

　まずは観劇だ。
　現在公演中の演目は大人気らしくほぼ満席だったが、運良く二つ並びの席が取れた。ただし角度がついていて見づらいバルコニー席だ。それでも彼女は食い入るように舞台だけを見つめていた。
　一方でリチャードはそんな彼女の横顔ばかり見つめていた。それだけで幸せな気持ちになる。もちろん大事な場面では舞台にもチラチラと目を向けたし、歌やセリフはそれなりに聞いていたけれど。
　よりによってこんな話とは――。
　ヒロインが政略結婚の前夜に身分違いの恋人と駆け落ちするが、最終的にはまわりにも認めてもらい、正式に結婚を許されてめでたしめでたしという話だった。よくある王道のラブロマンスである。

けれども何となく彼女には見せたくないと思ってしまった。これに感化されて駆け落ちすることはさすがにないだろうが、ヒロインに自己を投影して見るかもしれない。そう考えるだけでモヤモヤする。
「君は……その……好きなひとがいたりしないのか？」
「いませんよ」
どうしても気になり、劇場を出てからおそるおそる尋ねてみたところ、彼女は動じる素振りもなくさらりとそう答えた。そして劇場前の広い階段を軽やかに駆け下りると、ふわりと身を翻して笑った。
リチャードはつられたように軽い笑顔を見せながら、内心ほっとしていた。

観劇のあと、昼食にしようと中央広場で移動販売のサンドイッチを買った。
レストランに行くという手もあったが、せっかくなので彼女には縁遠いものを経験させてやりたいと思ったのだ。移動販売も、立ち食いも、バゲットにかぶりつくのも初めてに違いない。
もちろん嫌がれば無理をさせないつもりだったが、彼女は慣れないながらもそれを楽しんでいるようだった。その一生懸命な姿がかわいくて、ニコニコと満面の笑みを浮かべたまま見つめてしまう。
その後ろで執事二人がそろって呆れた顔をしているのが見えたが、素知らぬふりをして、彼女に見つからないようこっそりと追い払うような仕草をする。それでも彼らは動かなかった。
「これ、とてもおいしかったです」
ひそかな攻防には気付かないまま、彼女はきれいに完食するとそう声をはずませる。どうやら他の移動販売にも興味を持ったようだが、もうおなかいっぱいだからと残念そうにしていた。
「またいつか来ればいいさ」
結婚したら、たびたびこんなふうに二人で街に繰り出そう。王都ならもっといろいろなものを見せてやれる。リチャードは青く晴れわたった空を見上げながら、遠くはない未来に思いを馳せた。

そのあと大通りの店をいろいろと見て歩き、おみやげを買った。
紅茶店では紅茶選びに困っていたようなので助言をした。アーサーの好みはだいたい把握しているので、勧めたものはどれも彼に気に入ってもらえるはずだ。そのことはまだ言えないけれど。
「自分のものは買わなくていいのか？」
そう水を向けると、彼女はすこし迷いつつも雑貨店に入った。
特に目当てはないのか店内をのんびりと見て歩いていたが、ふいに動きが止まった。その視線の先にあったのは銀の指輪だ。細い流線型のリングに紫色の小さな宝石が埋め込まれている。

ただ、アクセサリというよりほとんどおもちゃのようなものだ。見たところ貴金属としての価値は低そうだし、埋め込まれた紫色の小さな宝石もたいしたものではないだろう。それでも——。
「それ、気に入ったのか？」
「ええ……買いませんけどね」
「だったら俺に贈らせてくれ」
「えっ？」
緑色の瞳をきらきらと輝かせながら見ていたのだから、気に入ったことは明白だ。さっと手にとり店員のところへ持っていこうとしたが、腕をつかんで引き留められた。
「いけません！」
「高いものじゃない」
「そうではなくて」
そこであらためて強く真剣なまなざしを向けられて、リチャードは息を飲んだ。
「わたし、あしたには嫁ぎ先に向かうんです。そこに他の男性からの贈り物なんて持っていけません。それも指輪だなんて……自分で買わないのも変に誤解されたくなかったからです」
当然だが、彼女はここにいるリックが結婚相手だとは知らない。
だからといってそこまで深く考えているとは思わなかった。黙っていればわからないのに。父親譲りのそういう誠実なところを好ましく思うと同時に、軽率な自分に落ち込みもした。
「悪い、今日の記念にと思ったんだ」
「わかっていただければ……」
彼女はどこか申し訳なさげにそう応じたが、次の瞬間、急にパッと表情を明るくして両手を合わせる。
「そうだわ！　わたしのほうからリック様に何か贈らせてください。今日の記念とお礼をかねて。リック様のおかげで街を楽しむことができましたし、お父さまへのおみやげも買えました」
彼女が、俺に——？
予想もしなかった申し出に驚いたが、落ち着くにつれてじわじわと喜びが湧き上がってくる。そしてその気持ちのまま素直に表情を緩ませてしまう。
「じゃあ、遠慮なくいただこうかな」
「はい！」
シャーロットは溌剌とした笑顔でそう返事をした。

「贈り物、カフリンクスはいかがですか？」
ひとまず店をあとにして大通りを歩いていたところ、彼女にそう提案された。
これか——と自分のカフリンクスを見る。いまつけているものは細かな傷があちこちにあってだいぶ古びていた。実はきれいなものもいくつか持っていたりするのだが、それは言わないことにする。

「そろそろ買い換えたいと思ってたところだし、ロッテが贈ってくれるならうれしいよ」
　シャーロットからもらえるのならきっと何でもうれしいが、カフリンクスは長く使えそうだし、何より仕事中でもさりげなく身につけていられるのがいい。想像するだけで胸が躍った。
　さっそくカフリンクスを取り扱っていそうな店を探して入ると、彼女はすぐさま目当ての品を吟味し始めた。時折リチャードを見つめて似合うものを考えているようで、何かくすぐったくなる。
「リック様、これはいかがですか？」
「いいね」
　興奮ぎみに尋ねられて、リチャードも同調するようにそう声をはずませた。
　彼女が選んだからではなく本当に気に入ったのだ。シンプルで洗練されたデザイン、邪魔にならないサイズ、気品が感じられる上質な輝き――どれも自分の好みに合っていて文句のつけようがない。
　即座に彼女は購入を決めた。思いのほか高かったらしく値段を聞いて焦っていたが、どうにか足りたようだ。申し訳なく思いつつも、謝罪は求めていないだろうとあえて気付かないふりをした。

「これ、わたしの気持ちです」
　中央広場に誘われ、そこであらためてカフリンクスの入った手提げ袋を渡される。
　思いがけずシャーロットと出会って街を楽しんだうえ、一生の宝物になるであろう贈り物までもらえるなんて、僥倖としか言いようがない。けれど、いまはまだ知り合いとも呼べないような間柄でしかなく。
「ロッテ……今日、ここで君に出会えてよかった」
「はい……」
　“リック”に言えるのはここまでだ。
　彼女も何か言いたいことがありそうな様子に見えたが、そっと口をつぐむと、気を取り直したように顔を上げてにっこりと微笑んだ。

「あっ！」
　直後、見知らぬ若い男がリチャードにぶつかった。
　その拍子に、彼が持っていたカップからジュースらしきものがこぼれて、リチャードの衣服にかかった。白いシャツの袖からはオレンジ色の液体が滴り落ちている。
「ああっ、すみません！！」
「いいよ、仕方ない」
　勢いよく謝罪する若い男に、リチャードは苦笑しながら軽く手を上げてそう応じた。故意でないならこれしきのことで責めるつもりはない。しかしながら若い男はなぜか必死に食らいついてくる。
「そのシャツ僕に洗わせてください！」

「え、洗う……？」
「泊まってる宿がすぐそこなので」
「いや、そこまでしてくれなくていい」
「それじゃあ僕の気がすみません！」
「だが、連れもいるし……」
「できるだけ急いでやりますので！」
　こちらが困惑するのも構わず、上目遣いで見つめたままグイグイと距離を詰めてくる。
　何か、意図があるのかもしれないな——。
　リチャードは王都では騎士団長としてそこそこ顔が知られているし、公爵家嫡男であることも隠していない。その正体に気付き、何らかの目的で事を起こそうとしている可能性は十分に考えられる。
　それなら、ここで誘いに乗ったふりをして探ってみるべきだろう。
　ただシャーロットが問題だ。あまりこちらの都合に巻き込みたくないが、万一のときは近くにいてもらったほうが守りやすい。迷ったものの、やはりこのまま一緒に連れて行くことにした。
「……わかった」
　あえて仕方ないとばかりに大きく溜息をついて、承諾する。
　さっそく若い男の案内でシャーロットととも宿に向かう。その途中、遠巻きに窺っていた執事二人にこっそりと目配せすると、彼らは委細承知しているような面持ちでうっすらと頷いた。

　連れてこられたのは、リチャードが昨晩から執事二人と泊まっている宿だった。
　大通りの宿は二つしかないので同じでも不思議ではない。執事二人がひそかについてきていることを確認してから、若い男——ジョンという——に促されてシャーロットと中に入った。
「お嬢さんはこちらでお待ちくださいね」
　ジョンは振り返ってそう告げた。
　客室に行くなら、未婚女性のシャーロットは置いていかざるを得ない。いささか不安だが、そもそも彼女が狙われているわけではないし、宿の主人も執事二人も近くにいるのだから大丈夫だろう。
「なるべく早く戻るよ」
　どこか心細そうな彼女にやわらかく微笑んでそう告げると、念のため宿の主人に彼女のことを気にかけてくれるよう頼んでから、ジョンにつづいて階段を上っていく。
「ここです、どうぞ」
　案内されたのは二階に上がってすぐの部屋だった。
　警戒しつつ足を踏み入れるが、取り立てて変わったところのない簡素な客室で、他の人物がひそんでいるような気配もなかった。それでも何があるかわからないので警戒は怠らない。
「シャツ、洗いますので脱いでくださいね」

「ああ……」
　シャツを脱ごうとするが、ジョンはじっとこちらを見たまま目をそらそうとしない。どことなく緊張しているようにも見える。やはり脱ぐところを狙って何か仕掛けてくるつもりだろうか――。
「なあ、悪いんだけど向こうを向いててくれるか？　同じ男とはいえ、そんなに熱心に見つめられると落ち着かない」
「あっ、すみません」
　彼は素直に背を向けた。
　気のせいだったか――その動きからも体格からも訓練を受けた人間とは思えない。だから彼自身が仕掛けるとすれば隙を狙うはずである。シャツを脱ぐというのはその絶好の機会だと思ったのに。
　部屋の中で唯一隠れられそうなベッドの下を確認してみるが、やはり誰もいない。部屋の外にもこちらを窺うような人影や気配はない。神経を張り詰めたまま素早くシャツを脱いで上半身裸になる。
「脱いだぞ」
　そう言うと、振り返った彼にシャツを投げるようにして渡した。すぐそばにまで来る必要がないように。彼は落としそうになりながらもどうにか受け取り、人懐こい笑みを浮かべる。
「では、洗ってきますね」
　そう言い置き、そそくさと扉のほうへ向かっていった。
　入れ違いに刺客がやってくる手筈になっているのか、シャツに何らかの細工をするつもりなのか、あるいは本当にシャツを洗うだけのつもりなのか。リチャードは彼を目で追いながら思案をめぐらせていたが――。
「やめてください！！　許してくださいっ！！　ああーーーッ！！！」
　彼は扉のまえで動きを止めたかと思うと、悲鳴を上げながら自分の着ているシャツを力任せに破り、何度も扉に体当たりした。そして叩きつけるように勢いよく扉を開けて飛び出し、階段を下りていく。
「えっ……」
　何が起こったのか即座には理解できなかった。
　これは罠だ――一呼吸遅れてようやくそのことに思い至ると、上半身裸のまま全速力でジョンを追って階段を駆け下りていく。一階に着くと、彼はもうすでに宿の主人の背中に縋り付いていた。
「助けてください！　あのひとの服を洗ってあげようと脱いでもらったら、いきなりベッドに押し倒されてシャツを破かれて、もうすこしで襲われるところだったんです！」
「俺は何もしていない。こいつが急に一人芝居を始めたんだ」
「嘘です！　嫌だって言ったのに、押さえつけてキスして体をまさぐってきたじゃないですか！　僕が隙をついて逃げ出さなかったら強姦されてました！」
　二人のほかに誰もいない密室内でのことであり、どちらも証明はできない。
　ただ状況的にはこちらが不利である。シャツを破かれたまま逃げる彼を半裸で追っていたのだ。おまけに彼の露わになった肌は白く、体は細く、顔はかわいく、男に襲われ

るというのにも妙な説得力がある。
　もっともこちらには公爵家の地位があるので、彼の証言しかないのなら最終的にはどうとでもできるだろう。それでも多くのひとにこの状況を見られるとやっかいだ。できるだけ早急に手を打たなければ――。
「それはおかしいですね」
　ふと涼やかな声が上がった。
　シャーロットだ。彼女はジョンのいるところからそう遠くない席に座っていた。怪訝に振り返った彼を、意志の強そうなまなざしで見据えたまますっと立ち上がる。
「わたしがここで待っていることも、宿の方がここにいらっしゃることも、リック様はご存知でした。それなのに軽率に襲ったりするでしょうか。悲鳴も物音も丸聞こえなくらい近い部屋なのに」
「それはっ……あのひとが男色のケダモノだからです！　　我慢できなかったんです！」
　ジョンは後ろのリチャードを指差しながら必死に言い募る。それでどうにか反論したつもりだろうが――。
「リック様が男色かどうかは存じ上げません。ですが、いずれにしてもそのような無体を働く方ではないと、わたしは信じています」
「ぐっ……」
　シャーロットは動じることなく粛々と追い込んだ。
　その凛とした緑色の瞳にリチャードはゾクッと身を震わせる。そう、幼かったあのころから確かにその片鱗があった。聡明で、まっすぐで、凛として、勇気があって――彼女に惹かれたのは間違いではなかったのだ。そう胸を熱くしていると。
「ジョン！　　プランＢよ！！！」
　突如、静寂を切り裂くような甲高い声がどこからか響いた。
　リチャードは思考の海から引き戻されて、反射的に声の聞こえた入口のほうに振り返ろうとしたが、そのときジョンが全力でシャーロットに突進し始めたのを目にして、ハッと息を飲む。
「ロッテ！！！」
　床を蹴るが、いまからではもう間に合わない。
　大きく伸ばされたジョンの右手がシャーロットにかかり――。
　ドタドタガシャン！！！
　リチャードは動きを止めて呆然とした。なぜか襲いかかったジョンのほうが吹っ飛んでいたのだ。テーブルや椅子を派手になぎ倒し、その上に仰向けに横たわったまま苦痛に顔をゆがめている。
「えっ、と……」
　何が起こったのか理解しきれない。
　その様子に気付いたのか、シャーロットは乱れたドレスの裾を直して姿勢を正すと、リチャードのほうに目を向けてにっこりと微笑む。
「わたし、武術を少々たしなんでおります。主に身を守るためのものですけど」
　彼女がジョンを軽く投げ飛ばしたように見えたのは、現実だったのだ。
　そういえば誘拐事件のときに「騎士さまみたいに強くなりたい」と言っていたが、ま

さか本当に強くなるとは思わなかった。ようやくふっと息をついて気を緩めると、彼女に微笑み返す。
「痛っ！　乱暴にしないで！！」
　そのあいだに執事二人がジョンと女性を拘束していた。
　ジョンはもうあきらめたように憔悴した顔でおとなしくしている。しかし、女性のほうは髪を振り乱してヒステリックに喚き散らしていた。声からして「プランＢ」の指示を出した人物のようだ。
　ん、彼女は――。
　リチャードは遠目ながらその顔に既視感を覚えた。怪訝に眉をひそめ、そのまま近づいていくと身をかがめて覗き込む。
「おまえには見覚えがある。ロゼリアの侍女だな。俺を陥れるよう命じられたか」
「……」
　彼女は顔をそむけた。表情からも、顔色からも、図星を指されて焦っていることが見てとれる。リチャードはさらに追及しようと口を開きかけたが、その寸前に衛兵らしき二人組が踏み込んできた。
「何があった？」
　騒ぎを聞きつけたのか、混沌とした光景を見まわして誰にともなく高圧的に尋ねる。だがリチャードが騎士団長の身分を示す白銀の懐中時計を見せると、はじかれたように敬礼した。
「この件はこちらで預かりたい。拘束する場所だけ貸してもらえないか？」
「承知しました」
　彼らがそこまで先導してくれることになり、執事たちはさっそく連行しようとそれぞれ二人を引っ立てた。リチャードはジョンを拘束しているほうの執事に近づくと、そっと小声で話す。
「こいつらは別々に拘束しておいてくれ」
「承知しております……あなたは？」
「シャーロットを家まで送ったら行く」
「まさか挨拶なさるんですか？」
「いや、そんな時間はないだろうしな」
　できればアーサーに挨拶したかったが、ここにきてすべきことが増えてしまったので仕方がない。急がなければ結婚式に間に合わなくなってしまう。リチャードは一行を見送りながらひっそりと溜息をついた。

「ロッテ、すまないが少しここで待っていてくれ。服を着てくる」
　いつまでも上半身裸のままというわけにはいかないので、そう言って階段に向かおうとしたところ、シャーロットがふと心配そうな顔になり声をかけてきた。
「そういえばまだシャツを洗っていないのではありませんか？」
「大丈夫だ。俺もここに泊まっているから部屋に着替えがある」
「そうだったんですね」

リチャードは彼女に見送られながら階段を上がる。二階でジョンの部屋に寄り、置き去りになっていた手提げ袋とシャツを回収すると、自分が宿泊している最上階の部屋で新しいシャツを着た。
そうだ、どうせならこれも――。
手提げ袋を開け、彼女からの贈り物であるカフリンクスをつけてみる。グレイ伯爵家へ挨拶に行くときに着るつもりだった新しい上質なシャツに、その新しい上質なカフリンクスはよく合っていた。
いろいろな角度から姿見に映しては見え方を確認する。袖口の小さな白銀が視界に入るだけで口元が緩んでしまうが、いまは浮かれている場合ではないと引き締め直し、彼女の待つ一階へ下りていった。
「すまない、君を巻き込んでしまって」
カウンターからほど近い席で向かい合わせに座ると、彼女にそう謝罪する。
「おそらく俺の元婚約者ロゼリアの仕業だ。彼女とはいわゆる政略結婚をすることになっていたが、彼女の家が不正を働いていたことが発覚して婚約を解消した。それを恨んでのことだろう」
「そうでしたか……彼女もおつらかったのでしょうね」
「しかし、まさか十年も経ってこんなことを仕掛けてくるとはな。不正は内々に処理したから公にはならなかったし、それもあって彼女は他家に嫁ぐことができたと聞いていたんだが」
詳しくは知らないが、ポートランド侯爵家から望まれての婚姻だと聞いている。年齢も家格もつりあいがとれていて相手も実直な人らしいので、嫁ぎ先としては悪くなかったはずだ。だからといって上手くいっているとは限らないのだけれど。
「連行していった方たちとはお知り合いなのですか？」
「あー……なんていうか……まあ、お目付役みたいなもんだな。来るなと言ったが勝手についてきた。いつもついてくるわけじゃないんだが、今回は特別で……」
いい年をした大人なのに過保護すぎると思われたくなくて、嘘をついているわけではないのにしどろもどろになってしまった。そんなリチャードをどう思ったのか彼女はくすっと笑う。
「来てくださって助かりましたね」
「まあ、結果的にはな」
二人を素早く拘束してもらえて助かったのは確かだ。
本当は彼女に矛先が向く前にどうにかしてほしかったが、自分にそれを言う資格はないだろう。そもそも彼らの本職は執事であって護衛ではないのだから。
「さて……君はもう帰ったほうがいい。送るよ」
「はい」
リチャードが立ち上がって手を差し出すと、彼女はどことなく寂しそうにしながらも素直にその手をとった。

「わぁ、白馬なんですね！」

そのほうが早いと思い、グレイ伯爵邸までリチャードの愛馬で送ることにした。街外れの厩舎に預けていた馬をとってくると、目を輝かせているシャーロットを前に乗せて、後ろで手綱を握る。
これは、思った以上に――。
図らずも密着した彼女のやわらかさとぬくもりに鼓動が速くなり、ほのかな甘い匂いに正気をなくしそうになる。しかしその華奢な体がふとこわばったことに気付くと、すこし冷静になった。
「ロッテ、怖いなら無理しなくていいからな」
「大丈夫です」
本当に大丈夫なのだろうかと顔色を窺おうとしたところ、急に彼女が振り返った。ぶつかりそうなほどの至近距離に二人とも大きく目を見開き、そのまま時が止まったかのように見つめ合う。
「……わたし、いま思い出しました」
やがて彼女はぎこちなく前に向きなおってそう告げた。そのかすかに震えた声からは少なくない緊張が見てとれる。それでも冷静さを失うことなく慎重に話をつづけていく。
「誘拐されたとき、とある騎士様に助けていただきましたが、あのときもこうやって白馬に乗せていただいて……わたしを見つめる騎士様の瞳は、アメジストのようにきれいな紫色でした」
そこで再び振り返り、まっすぐにリチャードの双眸を見つめて言う。
「リック様も同じですね」
すでにほぼ確信しているのだろう。まさか乗馬がきっかけで記憶を取り戻すとは思わなかったが、こちらとしては別に隠したいわけではない。シャーロットと初めて出会った日の大切な思い出なのだから。
「騎士様みたいに強くなりたいと言っていたが、本当に強くなったんだな」
「……がんばりました」
彼女の目にはうっすらと涙がにじんだ。
しかしすぐに前を向いてしまって表情が見えなくなる。話をつづけようにも何を言ったらいいかわからなくなり、揺れるストロベリーブロンドの後頭部を間近で眺めながら、ただ静かに馬を走らせた。

「お嬢さまーーー！　どこですかぁーーー！！！」
敷地の近くまで来ると、使用人と思われる若い女性の大きな声が聞こえてきた。シャーロットがいないことに気付かれてしまったのだろう。それでも彼女はあまり動じていないようだった。
「ここからはひとりで帰ります」
「わかった」
騒ぎになっているようなのでいささか心配ではあったが、アーサーなら叱ることはあっても悪いようにはしないはずだ。一本道の端のほうに馬を止めて彼女を下ろすと、預かっていた荷物を手渡す。

「わたし、今日のことは一生忘れません」
　彼女はまっすぐリチャードを見つめてそう言い、淑女の礼をとった。
　これきりもう二度と会えないと思っているに違いない。どう応じればいいかわからず口をつぐんでいるうちに、彼女はパッと身を翻し、ただの一度も振り返ることなく走り去っていった。

　カーディフの街に戻ると、衛兵の詰所に拘束しておいた例の二人組を取り調べた。
　男性のほうはポートランド侯爵家の従僕でジョンといい、女性のほうはポートランド侯爵家のロゼリア付き侍女でアンナという。アンナのほうがジョンより年上で、先輩で、使用人としての立場も上のようだ。
　アンナはすべて自分が企てたことでロゼリアは一切関与していないという。しかしジョンはロゼリアがリチャードの結婚を潰すよう命じたのだと証言した。どちらにしてもロゼリアに原因があるのは間違いない。
「俺はあしたポートランド侯爵家へ行く」
「ちょっ……結婚式はどうするんですか？！」
「大丈夫だ。式までには間に合わせる」
　執事は渋い顔をしたが、こちらが折れなければ従うしかないわけで。
　翌日、リチャードは執事のひとりをウィンザー家へ向かわせて、帰郷が遅れる旨の伝言を頼むと、もうひとりの執事を連れてポートランド家へ向かった。

　ポートランド侯爵夫妻は使用人の起こしたことを知ると驚愕し、真摯に謝罪した。
　特に夫人のロゼリアは真っ青だった。リチャードの婚約を知って感情的になったのは事実だが、命令のつもりはなく、本当に行動に移すとは思いもしなかったという。その動揺した様子はとても演技とは思えなかった。
「それでは、後ほど二人を送りますのでよろしくお願いします」
　侯爵が責任を持って身柄を引き受けると約束してくれたので、あとは彼に任せることにした。主人から命令を受けたと思い込んでのことであり、結果的にたいした被害もなかったので、処罰までする必要はないだろうという判断である。

「明日、早朝に出発すれば間に合いますね」
　カーディフの街に戻り、例の二人をポートランド家へ送る手配をすませると、執事がようやく安堵したように息をついてそう言った。しかし――。
「悪いが、ちょっと用事があって早朝には出られない。昼過ぎに出よう」
「え、それでは日没までに着けませんよ？　　夜に走らせるんですか？」
「そこまでしなくていい。途中で宿をとって早朝に出れば間に合うだろう」
「間に合うって……本当にギリギリじゃないですか……」
　執事はあからさまにげんなりしていた。

けれどリチャードにはどうしても譲れない用事があった。ここであきらめたら後悔してしまう。執事に気苦労をかけていることについては申し訳なく思うが、取り下げる気はさらさらなかった。

「まさか用事ってそれですか？」
翌日、大通りの雑貨屋が開くのを待って指輪をひとつ買うと、執事が信じられないとばかりに声を上げた。おもちゃのような指輪だからなおのこと驚いたのだろう。
「俺にとっては大事なんだよ」
「はぁ……」
あのとき贈らせてもらえなかったこの可愛らしい指輪を、ぜひとも夫として贈りたい。どうせなら結婚式のときに。にやけるリチャードを見て、執事は半眼になりながら疲れたように溜息をついた。

ウィンザー家には予定どおり結婚式当日の午前中に着いた。
両親はリチャードの姿を視界に映すなり安堵して崩れ落ちた。その顔色は悪く、ずいぶんと気を揉んでいたであろうことが窺えた。さすがにこんな姿を目の当たりにすると心苦しくなる。
しかし、謝罪する間もなく教会に追いやられて大急ぎで支度が始められる。シャーロットもとっくに教会に来ているらしいが、互いに準備があるので会いに行く暇はないと言われてしまった。
おおよその支度が終わったところでコンコンと扉が叩かれた。おそらく両親だろうと何の気なしに「どうぞ」と応じると、静かに扉が開いた。しかし、そこにいたのは両親でも従者でもなく――。
「アーサー！」
思わず椅子から立ち上がる。リチャードの髪を整えていた従者が驚いていたが、構ってなどいられない。アーサーは当然のようにすっかり支度を終えていて、こちらの姿を見るとほっと息をつく。
「どうやら間に合いそうですね」
「ああ……おまえにも心配かけたな」
「あなたは昔からいつもギリギリだ」
「それでも遅れたことはないよ」
パブリックスクール時代のようなやりとりをすこし懐かしく思いながら、リチャードは肩をすくめる。もっともあのころのアーサーはいまよりずっと厳しい口調だったけれど。
「ところで何の用だ？」
「いえ、あなたが結婚式に間に合うのか確認に来ただけです。気が気でなくて……シャーロットに惨めな思いはさせたくありませんから」
そうだ――！

　アーサーが切なそうに微笑んだ瞬間、言うべきことを思い出して頭に血がのぼった。彼とのあいだを一気に詰めると、背後の扉にドンと手をついて覗き込む。息がふれあうくらいの至近距離で。
「じょっ、冗談にしても……あまりこのようなことをなさるのは……」
「おまえさ、俺がおまえに懸想してるだなんて本気で思ってるのか？」
「えっ……ぁ……えっ……？」
　アーサーはしどろもどろになりながら目を瞬かせる。驚くというより、思いもしなかったことを言われて混乱しているようだ。
「どうしてそれを……いえ、あの……違うのですか？」
「おまえのことは友人としか思ったことがないし、そもそも俺は男色じゃない」
「……本当に？」
　はぁ、とリチャードは盛大な溜息をついて体を起こした。シャーロットに話を聞いたときからわかっていたことだが、あらためてこうして本人の反応を目の当たりにすると、何とも言えない気持ちになる。
「なあ、俺がおまえに懸想してるだなんてどうして思ったんだ？」
「同僚がそうではないかと……いえ、すぐにそれを信じたわけではなかったのですが、あなたが……結婚しないのはおまえのせいだ責任を取れなどと言うので、やはりそういうことなのかと……」
　アーサーは困惑したような顔をしながらそう話すが、リチャードも困惑した。
「そんなこと言ったか？」
「言いました」
　もちろん彼が嘘をつくような人間でないことはわかっている。
　言ったのなら、おまえの娘と出会ったせいだから結婚を認めろという意味だろうか。あのときはまだそう明言するわけにはいかなかったので、思わせぶりな言いまわしをしたのかもしれない。
「まあ、何にせよおまえに懸想してるってのは完全な誤解だ」
「でしたらシャーロットとの結婚を望んだのはなぜですか？」
「ああ……」
　もっともな疑問である。ウィンザー公爵家がグレイ伯爵家と姻戚関係を結んでも特に利はないのだ。リチャードはかすかな緊張を覚えながらすっと姿勢を正すと、真摯に彼を見つめて告げる。
「シャーロットとの結婚を望んだのはシャーロットが好きだからで、他意は一切ない。おまえが心配しなくても彼女のことは大事にするし、二人で幸せになるつもりだ。何せ十年も待ったんだからな」
「えっ？」
　彼が目を見開くと、リチャードはうっすらと口元を上げて肩を押した。
「ほら、時間だぞ」
「ですが……」
「またあとでな」
　やや強引に追い出し、素早く扉を閉めてそこに背中からもたれかかる。そのまま身じろ

ぎもせずに耳を澄ませていると、やがて靴音が響き、どことなく躊躇いがちに遠ざかっていくのが聞こえた。
「……」
　気のせいか従者たちから生温い視線を向けられているのを感じて、きまりが悪い。しかしそんな素振りを見せることなく何食わぬ顔で椅子に座ると、すこし乱れてしまった髪を整えてもらう。
「リチャード様、そろそろ礼拝堂に向かうお時間です」
「ああ」
　執事は懐中時計を確認して事務的に告げると、控え室の扉を開いた。
　その先はまばゆいくらいの白い光に包まれている。リチャードはそこから目をそらすことなく静かに呼吸をすると、ポケットに忍ばせた指輪の存在をあらためて確認し、挑むような笑みを浮かべて足を踏み出した。

侯爵家の強がり夫人は元婚約者を忘れられない

そのときまで、ロゼリアは世界でたったひとりのお姫さまだった。

貴族の中でも裕福なクレランス侯爵家に生まれ、蝶よ花よと育てられ、いつどんなときもロゼリアを中心に世界がまわっていた。そして、それをあたりまえのこととして享受していた。けれど——。

それは、五歳になってまもないころのことだった。

ロゼリアは両親に連れられて初めてパーティに行った。敷地外に出るのも初めてだったので、馬車から見える光景にわくわくしていたが、会場に入るや否やひどくショックを受けた。

どうして——。

そこには時間をかけて準備したロゼリアと同じように、あるいはそれ以上に、きらびやかに着飾った女の子があちこちにいた。すこし年上の子はきらきらとしたアクセサリまでつけている。

まわりの大人たちはロゼリアのことを褒めてくれるけれど、彼女たちも褒めている。そして両親までもが彼女たちを褒めるのだ。そのことにガツンと頭を殴られたような衝撃を受けた。

まだ幼いロゼリアは気持ちを言葉にすることもできず、無言で逃げるように庭に飛び出した。両親はほかの大人としゃべっていて気付いてもいない。そのこともまたロゼリアを傷つけた。

おとうさまも、おかあさまも、だいっきらい——！

小さなこぶしをグッと握りしめて心の中で絶叫した瞬間、ズキリと胸が痛んだ。じわじわと目が熱くなり涙がこぼれる。そのまま崩れ落ちるように地べたに座ると、グズグズと泣いた。

「君、迷子？」

前触れもなく降ってきたその声にびっくりして、涙も拭わずに顔を上げる。

そこにいたのは見たこともないくらいきれいな男性だった。さっぱりとした清潔な黒髪に、紫色の瞳、白い肌、ほんのりと甘さのある整った顔。まるで絵本に描かれている王子様のようだと思った。

「お父さんお母さんのところへ戻ろうか」

ぽかんと口を半開きにしたまま見とれていたが、そう言われてあわててふるふると首を振る。彼は不思議そうに小首を傾げた。

「迷子じゃないのか？」
「……イヤだからここにきたの」
「そっか、俺と同じだな」
　そう言って隣に腰を下ろす。
　ロゼリアはどきりとして、いまさらながらあたふたと手で涙を拭う。王子様みたいな素敵なひとに、みっともない顔を見せたくなかったのだ。しかしながら彼はもうこちらを見ていなかった。
「こういうパーティとか苦手でさ。ちょっと挨拶だけして抜けてきたんだ。できれば出たくないんだけど、たまには出ろって父がうるさくて」
　はぁ、と遠くに目を向けたまま気怠げに溜息をつく。
　その横顔もとてもきれいでロゼリアは胸がドキドキした。無意識に息を詰めて見入っていたところ――突然、ぐぎゅうとおなかが鳴った。恥ずかしくて真っ赤になりながらうつむくと、彼はハハッと笑った。
「パーティで食べてなかったのか……おいで」
　そう言って颯爽とした足取りで庭を横切っていく。ロゼリアがあわててトタトタと小走りで追いかけると、彼はすみっこの木から小さな赤い実を二つもいで、その一つをロゼリアに手渡した。
「これ、なぁに？」
「ヤマモモだ。真ん中に種があるから気をつけろよ」
　赤い実を掲げて答えると、半分ほどかじってその断面をロゼリアに見せる。まわりはとげとげしているが、思ったよりもやわらかくてみずみずしいようだ。興味をひかれてロゼリアもおずおずとかじってみる。
「ん……っ！」
　甘いのかと思ったら、びっくりするくらい酸っぱかった。
　ギュッとおもいきり目をつむって顔をしかめてしまったが、だからといって吐き出すなんて行儀の悪いことはできなくて、涙目になりながら飲み込んだ。
「ダメだったか？」
「すっぱいの……」
「そうかぁ」
　彼は苦笑すると、ロゼリアの手から食べかけのヤマモモをひょいとつまみ、そのまま自分の口に放り込んだ。たったそれだけのことなのに、ロゼリアはすごくびっくりしてドキドキとしてしまった。
「ロゼリア！」
　後ろから息が上がったような父親の声が聞こえてきて、思わず振り向く。父親は心からほっとしたような顔になりロゼリアを抱きしめた。
「いなくなって心配したんだぞ」
「だって……おとうさまが……」
「寂しくさせてごめんな」
　それだけではなかったが、うまく言えそうになかったし言いたくもなかった。もやもやした気持ちのまま口をつぐんで小さく頷く。父親は慈しむようにロゼリアの頭をなで

てから、すっと立ち上がった。
「リチャード様、お手を煩わせてしまったようで申し訳ありません」
「いや、こちらの暇つぶしにつきあってもらっただけだ」
　リチャードと呼ばれた彼は、たいしたことではないかのようにさらりと答えた。
　それを聞いて父親は安堵したようにありがとうございますと頭を下げた。いつだって頭を下げられる側の父親が、頭を下げている。ロゼリアはどうしてだろうと不安になりながらリチャードを見上げた。
「じゃあな」
　そんな気持ちを知ってか知らずか、リチャードは淡く微笑んで小さなロゼリアに手を振ると、さらりと黒髪をなびかせながら立ち去っていった。

「ねぇ、リチャード様と会わせて」
　それからというもの、ロゼリアはしょっちゅう父親にそうねだるようになった。
　しかし何でも叶えてくれるはずの父親でも難しいらしい。当時はわからなかったが、リチャードは最上位貴族である公爵家の嫡男なのだ。娘が会いたがっているというだけの理由で会えるわけはない。
　リチャードが来そうなパーティには何度か連れて行ってもらったが、彼が来たことはなかった。パーティが苦手だと言っていたので避けているのだろう。それでも思いが薄れることはなかった。
「ほかにも素敵なひとはいると思うぞ」
「でも、わたしはリチャード様と結婚したいの」
「うーん……頑張ってはみるけどね……」
　いつからか結婚までも望むようになっていた。
　けれど父親はいつも困ったように曖昧な返事をするばかりである。会うことさえ叶わないのに、結婚の約束などできるはずもない。とはいえ子供のロゼリアにはわかりようもないことだった。

　そうしてリチャードとは会えないまま十六歳になり、社交デビューを迎えた。
　そのころにはもうだいぶ現実を理解していた。いくらこちらが結婚したいと言ったところで、相手が同意しなければどうにもならない。そしてその相手というのは引く手あまたの公爵家嫡男なのだ。
　一応、父親が顔を合わせた折にそれとなく持ちかけているとのことだが、色よい返事はもらえていない。ロゼリアは侯爵家なので家格としてはつりあいが取れている。だからこそ希望を捨てきれずにいた。
　いっそ、誰かと結婚してくれればあきらめがつくのに――。
　このままでは行き遅れてしまいそうで怖い。父親はロゼリアに甘いので、嫌だと言えば無理に嫁がせるようなことはしないだろう。だからこそロゼリア自身がどこかで見切りをつけるしかないのだ。

こんなことを考えるようになったのは、わりと親しくしている三つ年上の侯爵令嬢が婚約したからだ。彼女はよくリチャードと結婚したいと夢見がちに話していたが、婚約相手は伯爵家の三男だった。
「緊張しているのかい？」
「大丈夫ですわ」
ロゼリアはそう答えて、隣の父親を安心させるようにゆったりと微笑んでみせる。彼もロゼリアを見つめたまま愛おしげに目を細めた。
「さあ、行こう」
彼のエスコートで会場に入ると、そこには目も眩むほどのきらびやかな世界が広がっていた。昼間のパーティにはない豪奢な雰囲気に圧倒されそうになったが、負けてはいられないとあらためて背筋を伸ばす。
このデビュタントのために用意した純白のドレスは、シルエットが美しくなるよう精緻にデザインされ、夜会の照明に映えるよう素材にもこだわり、クラシカルでありながら人目を惹く仕上がりになっている。
そしていつもよりすこしだけ大人びた夜会用のメイクも、華やかに結い上げられた金の髪も、趣向を凝らした絢爛なアクセサリも、純白のドレスとともにロゼリアを美しく見せてくれるはずだ。

まず国王陛下と妃殿下に謁見し、そのあと父親を相手にファーストダンスを踊った。
ダンスにはそれなりに自信があった。大人になったら夜会でリチャードと踊るのだからと、幼いころからずっと特訓をつづけてきたのだ。いまでは先生のお墨付きをもらうほどの腕前である。
ダンスが終わると、ふと会場の一角がざわめいていることに気がついた。どうやら年頃の令嬢たちがひとりの男性を取り囲み、色めき立っているようだ。こちらからだと男性は後ろ姿しか見えていなかったが、ふいに横顔が見えて。
えっ、リチャード様――？
ロゼリアの心臓は壊れそうなほどドクリと強く収縮する。
長いあいだ恋い焦がれていた相手を見紛うはずがない。彼は十年前の面影を色濃く残したまま大人の男性になっていた。身長が伸び、精悍になり、あのころよりもはるかに素敵になっている。
「リチャード様のところへ行かないのかい？」
「いまは……」
父親に煽られたが、ロゼリアは曖昧な笑みを浮かべて受け流した。
あの令嬢たちに加わったところで良い印象は残せない。だからといってどうすればいいかはわからない。彼はいまもほとんど夜会やパーティに姿を現さないので、この機を逃すわけにはいかないのに。
ふと、彼がこちらに振り向いた。
目が合ったように感じたのはさすがに気のせいだろう。そう思っていたのに、彼はまわりの令嬢たちに断りを入れると、輪から抜け出してまっすぐこちらへ歩いてくる。ロ

ゼリアの鼓動はどんどんと高まり――。
「クレランス卿」
　しかしながら彼が見ていたのは父親のほうだった。
　期待した分だけ落胆したが、またとない絶好の機会であることには変わりない。それは父親も承知のはずだ。そっと隣を窺うと、彼は人好きのする柔和な笑みを浮かべて一礼していた。
「ご無沙汰しております、リチャード様」
「そういえば数年ぶりですね」
　リチャードは軽く苦笑しながら肩をすくめると、ロゼリアに目を向ける。
「こちらは？」
「娘のロゼリアです。この格好を見ればおわかりかと思いますが、今宵がデビュタントでして。ファーストダンスはわたしと済ませましたので、よろしければ一曲踊ってやってもらえませんか？」
　ほんのすこし話をするだけでもいいと思っていたのに、まさかダンスを踊ってもらえるの？　　ロゼリアは内心ドキドキしながらリチャードに目礼する。彼は困ったように逡巡していたが――。
「ダンスはあまり踊りたくないんですけどね……一曲だけ……」
　そう言うと、観念したように力なく微笑んでロゼリアに手を差し出した。

　すごい――。
　踊りたくないと言っていたのでダンスが苦手なのかと思ったが、そうではなかった。むしろ上手すぎる。父親よりも、兄弟よりも、もしかすると先生よりも踊りやすいかもしれない。
　彼が相手だと、動きを合わせようとするまでもなく自然とできてしまう。いつのまにか心地よく踊らされてしまっているのだ。それだけ彼のリードが上手いということに他ならない。
　夢のようだった。きらびやかな光を浴びて華麗に踊りながら、彼はロゼリアの目を見てくれるし、ロゼリアもずっと彼だけを見つめている。まるで世界にたった二人しかいないかのように。
「わたし、リチャード様とお会いしたことがあるんです」
　だから、つい、熱に浮かされたようにそっと打ち明けてしまった。
　しかし彼はそんなことなど言われ慣れているのだろう。もしかしたらうんざりするほど聞かされているのかもしれない。どこか作り物めいた微笑を浮かべてさらりと応じる。
「ごめんね、君のことは覚えていなくて」
「庭になっていたヤマモモを一緒に食べました」
「あ……あのときの子か」
　そのとき仮面がはがれた。彼は軽く目を見開いてそう言うと、ハハッと笑う。
「大きくなったからわからなかったよ」
　柔らかなその声に、ロゼリアはじわりと胸が熱くなって泣きそうになる。それだけで

十年の恋がすこし報われたような気がした。

「リチャード様と婚約したぞ！」
　デビュタントから半年ほどが過ぎたある日のこと。父親が帰宅するなりロゼリアの私室に駆け込んできたかと思うと、興奮ぎみにそんなことを叫んだ。ひとり読書をしていたロゼリアはきょとんとして小首を傾げる。
「えっと、どなたと婚約なさったのです？」
「おまえがリチャード様と婚約したんだ！」
「……えっ？」
　思考が追いつかず固まってしまう。
　父親によれば、近々正式に婚約して一年後に結婚という予定らしい。ただしリチャード自身が望んだわけではなく、いわゆる政略結婚だ。両家が繋がることで互いに利があるという判断である。
　もっともウィンザー家からすれば他にもっと条件のいい選択肢はあった。それなのにクレランス家を選んだのは、ロゼリアと踊ったときにリチャードが楽しそうに笑っていたからだという。
　ウィンザー公爵は息子がそんな顔で女性と話すのを初めて目にした。だから彼女とならと思ったそうだ。そしてこれまで結婚に乗り気にならなかったリチャードも、渋々ながら受け入れた――と。
「うっ……う……」
「ど、どうした？」
　うつむいて両手で顔を覆いながら泣き始めたロゼリアに、父親はギョッとしたが、それがうれし泣きだとわかるとほっと安堵の息をついた。ロゼリアの向かいに腰を下ろすとティーテーブルに頬杖をつく。
「おまえがリチャード様と結婚したいって言うから、ウィンザー家に認められるように事業を拡大したり、父さんもいろいろと頑張ったよ。それでも正直なところ難しいと思ってたんだが……最後はおまえ自身が掴み取ったな」
「いえ、お父さまのおかげです……本当にありがとうございます……」
　ロゼリアは顔を伏せたまま涙声で応じる。すぐにふっとやわらかく笑う気配がして、優しく頭をなでられた。

　ほどなくして正式に婚約し、月に三、四回ほどデートをするようになった。
　観劇に出かけたり庭園を散策したりといったごく一般的なもので、リチャードはいつもそつなく紳士的にこなしていたが、ただの義務として行っているのだということは何となく感じ取れた。
　仕方ないわ、彼はこの結婚を歓迎しているわけではないもの――。
　それでもロゼリアはすこしもあきらめていなかった。いつか心を許してもらいたい、屈託なく笑い合いたい、好きになってもらいたい。そのために可能なかぎりの努力をし

ていくつもりでいた。

　しかし半年がすぎてロゼリアが十七歳になったころ、突然、婚約は解消された。

「えっ……どういうことなの……？」
　にわかには言われたことの意味さえ理解できなかった。婚約解消というのは結婚しないということだろうか。ほんの数日前にリチャードとデートしたばかりなのに。彼はいつもどおり紳士的だったのに。
　呆然とするロゼリアを見て、父親はひどくつらそうに顔を歪めてうつむいた。
「おまえは何も悪くない……すべて父さんのせいなんだ……」
　彼によれば、事業で不正をしていたことがウィンザー家に知られ、この件を是正するとともに婚約解消に応じるよう迫られたらしい。そうしなければ告発すると言われて受け入れるしかなかったのだと。
「……ひとりにしてください」
　感情がぐちゃぐちゃだ。このままだと父親にひどい言葉をぶつけてしまいそうで、ロゼリアはどうにかそれだけ告げると私室にひとり閉じこもった。

　翌日、リチャードが挨拶に来た。
　まだ心の整理がついていないし、目も腫れているし、とても顔を合わせられるような状態ではないのだが、それでも挨拶もせずに終わりにはしたくない。両親には外してもらって応接室で会うことにした。
「ロゼリア嬢、わたしたちの婚約解消についてはもうご存知ですね？」
「はい、きのう父から詳細に聞かされました」
「あなたに非はないが、どうか家のこととしてご理解いただきたい……すまない」
「こちらこそ、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
　ロゼリアの非ではなくてもクレランス家の非である。彼をまえにして被害者ぶることは許されない。目が潤みそうになるのを堪えながら謝罪して頭を下げると、彼はつらそうに目を伏せた。
「あなたが望むなら、良いところに嫁げるよう個人的に手を尽くします」
「……結構です」
　わずかながら声に怒りがにじんだ。リチャードにだけはそんなことを言われたくなかった。だからといって自分に責め立てる権利がないことくらい承知している。
「わたくしの結婚はあくまで当家の問題ですから」
「わかりました……気が変わりましたらいつでもご連絡ください」
「お心遣い感謝します」
　彼の誠意に、ロゼリアは表情を変えることなく淡々と応じて一礼した。あなたにだけは絶対に頼らない、たとえ何があっても――そんな強く燃えたぎるような決意を心に秘

めたまま。

三日後、招待を受けていた夜会があったので予定どおり出席することにした。
婚約解消についてはおととい正式に公表している。夜会に行けば、好奇の目にさらされて噂の的になることは間違いない。父親は無理して行くことはないと言ってくれたが、逃げるのは嫌だった。
「アンナ、完璧に仕上げてちょうだい」
「はい！　もちろんです！！」
侍女は元気よく答え、いつも以上に張り切ってロゼリアの支度を始めた。

ザワッ――。
ロゼリアが兄とともに会場に足を踏み入れると、一瞬で空気が変わった。
数多くの参加者がこちらに注目している。ひそひそと何かをささやき合ったり、憐れみの目を向けたり、嘲笑するような顔をしていたり――前を向いているだけで嫌でも視界に入ってくる。
それでもロゼリアはうつむかなかった。兄と離れても、ひとり背筋を伸ばしたまま優美な笑みを浮かべる。婚約解消された不憫な女だなんて思われたくない。それはロゼリアの矜持だった。
「ロゼリア様！」
皆が遠巻きに見る中、同じ年齢の男爵令嬢がにこやかに声をかけてきた。
彼女は社交界ではめずらしいほど率直なひとである。ただ、それゆえか気遣いというものが抜け落ちているらしく、悪意はないのだろうが、ことあるごとに相手の地雷を踏み抜いているのだ。
「リチャード様との婚約は解消されたのですって？」
「ええ、もう終わったことですわ」
その会話をつづける気はないと暗に示したつもりだが、やはりというか彼女には伝わらなかったらしい。琥珀色の目をきらきらと輝かせながら顔を近づけてくる。
「当然リチャード様のほうからですわよね？」
「双方が納得して決めたことですわ」
「でしたら理由は何だったのでしょう？」
「さあ、わたくしにはわかりかねます」
「もしかしてリチャード様に女ができたとか？」
「あら、男かもしれませんわよ」
「え……ええっ！　リチャード様ってそっち？！」
あまりにしつこかったので冗談めかした返しで煙に巻こうとしたら、彼女は真に受けてしまったらしい。誤解を解く間もなく、なぜかうれしそうに「きゃあ～！！」と興奮して走り去っていった。
え、何なの――？

ロゼリアは呆気にとられた。
わけがわからないまま小さく息をついて気持ちを仕切りなおすと、まわりから向けられる不躾な視線にはあえて気付かないふりをして、努めて優雅な所作でフルートグラスを手に取った。

婚約解消から一年半が過ぎた。
そのあいだ両親から縁談を持ちかけられることはなかった。傷心のロゼリアをそっとしておいてくれたのか、単に相手が見つからなかっただけなのかはわからない。おそらく後者だろう。
そしてリチャードも未婚のままだ。男性側なら婚約解消もあまり汚点にならないし、公爵家嫡男なら引く手あまたのはずなのに。何か事情でもあるのかと気になっていたところ、とある噂を耳にした。
リチャードは男色に目覚めたようだ、と。
もともとあまり女が好きではなかったが、婚約解消してから男が好きだということに気付いたらしい。いまはパブリックスクール時代の同級生に懸想しているという。もちろんすべて噂だけれど――。
「本当なのかも」
「え？　何ですか？」
「独り言よ」
思い返せば、彼は女性に話しかけられてもうれしそうではなかったし、女性とつきあったとか娼館に通ったとかいう話も聞いたことがない。決めつけるわけにはいかないが男色であれば納得がいく。
そうこう思案しているあいだにお茶の用意が調えられていく。そろそろかしらと読んでいた本を閉じてティーテーブルの隅に置くと、ロゼリア付きの侍女であるアンナがそれを目に留めた。
「あ、それ面白いですよね！」
「……ええ」
「最初は男色なんて気持ち悪そうだなって気が進まなかったんですけど、読んでみたらせつなくてきゅんきゅんしちゃって！　報われなくても一途に想いつづけるってほんと純愛ですよね！！」
彼女は頬を紅潮させながら両手を組み合わせて力説する。だがロゼリアは同調しなかった。ほとんど表情を動かすことなく冷ややかに一瞥して言う。
「アンナ、口ではなく手を動かしなさい」
「あっ、すみません！」
彼女はこなれた手つきで紅茶をティーカップに注ぎ、一礼して退出した。

両親が家にいるときは一緒にお茶を飲むことも多いのだが、今日はどちらも所用で出かけているため、ロゼリアは私室でひとりきりのティータイムを過ごしていた。侍女の

アンナも当分は戻ってこない。
　紅茶に口をつけると、さきほどティーテーブルに置いた本に目を向ける。
　それは若い女性のあいだで流行している娯楽小説だった。とりわけ貴族令嬢のあいだで大きな話題になっているらしい。というのも、リチャードを主人公にして書かれたと言われているからだ。
　ただ、作者は何も公言していない。
　本当はどうなのかと気になったので入手して読んでみたところ、登場人物の名前はみんな違うし、創作も多分に含んでいるが、リチャードまわりのことを土台にしたのは確かだろうと感じた。
　当然、ロゼリアらしき女性もいる。事業で財をなした裕福な貴族の一人娘で、金に物を言わせて主人公の婚約者になった悪役令嬢である。最終的には悪事を暴かれて惨めに婚約破棄されるのだ。
　事実とはだいぶ異なるが、世間からはそういうイメージを持たれているということだろう。そして今後ますますそうなりそうだ。面識もないうちから悪役令嬢と決めつけられてしまうのは正直つらい。
　こうなってはもう結婚など望めないのではないか。
　ひどく気持ちが沈むが、せめてもの救いはリチャードもまだ結婚していないことだ。先を越されたらきっと惨めでたまらなくなる。その結婚相手にも一方的に敗北感を抱いてしまうだろう。
　本当に彼が男色なら今後も結婚することはないのかもしれない。少なくとも好きなひととは結ばれない。どれだけ強く望んだところで同性とは結婚できないのだ。そう思うといささか溜飲が下がる。
　嫌ね、これでは本当に悪役令嬢だわ――。
　ロゼリアはふっと力なく自嘲の笑みを浮かべて、目を伏せた。

「ロゼリア、ちょっといいか？」
　数日後、何とも言えない表情をした父親に呼び出された。
　もしかしたらあまり良くない話なのかもしれない。そう覚悟しつつ、促されるまま書斎の応接ソファに向かい合わせで座る。使用人がお茶の用意を調えて退出するとすぐに、父親が話を切り出した。
「おまえ、グレアム・ポートランド卿を知っているか？」
「何度か夜会でダンスに誘っていただきました」
　いまやロゼリアをダンスに誘うひとはあまりいないので、記憶に残っている。彼は婚約解消してから三度ほど誘ってくれただろうか。
「どんな印象だ？」
「そうですね……とても真面目そうな方だと……」
　会話が苦手なのか必要なこと以外はあまり喋らないし、容姿も平凡なので、印象を問われてもそれくらいしか言えることがない。ただ、朴訥ながらも丁寧に接してくれるので嫌な気はしなかった。

父親はどことなく神妙な面持ちでひとつ頷いてから、本題を切り出す。
「実は、ポートランド家から縁談が来ていてな」
「えっ？」
「もちろんおまえの婚約解消については承知のうえだ。相手のグレアム・ポートランド卿は二十代で婚姻歴なし、誰に聞いても実直な男という評判で、結婚相手としては悪くないと思うんだが……どうだろう？」
ゆったりと両手を組み合わせて遠慮がちにロゼリアを窺う。その表情からは複雑な感情が見てとれる。ロゼリアのためだけに勧めているわけではなさそうだ。
「これはクレランス家にとって望ましい縁談なのですね？」
「ん……まあ、それはそうだが……」
きまり悪そうに目が泳いだ。どうやら図星らしい。
もっとも貴族令嬢が家のために結婚するのは当然のことである。一方的に命じても構わないのに、彼はこうして意向を確かめてくれる。おそらくロゼリアが難色を示せば断るつもりでいるのだろうが――。
「お父さまさえよろしければ、お受けしてください」
「いいのか？」
「わたしも行き遅れたくはありませんから」
冗談めかして答えると、まだあたたかい紅茶を優雅な手つきで口に運ぶ。
もちろんクレランス家の役に立ちたいという気持ちはあるが、行き遅れたくないというのも本心だ。こんなロゼリアを娶ってくれるひとが他にいるとは思えない。ありがたく受けようと心を決めた。
父親は安堵の息をつき、それでもどこか心配そうに複雑な微笑を浮かべた。

後日、正式に婚約をして、その一年後に予定どおり結婚した。
ロゼリアは二十歳だ。女性が結婚する年齢としては早くも遅くもない。一時は独身のまま生涯を終えるのだろうと覚悟していただけに、ロゼリアを望んでくれたポートランド家には感謝している。
ただ、夫となるグレアムは不本意に思っているのかもしれない。婚約中のデートでも真面目な表情を崩さず、口数も少なく、楽しそうでもなく、義務感だけというのがありありと伝わってきた。
なのに――初夜のいま、彼の表情はいつになく緩んでいた。
ほんのりと紅潮した顔に、どことなく気怠げな笑みを浮かべ、まなざしも甘くとろりとしている。それが酒のせいであることは理解しているが、あまりにも普段と違うのでドキリとしてしまった。
「触れても？」
「はい、妻の役目を果たす覚悟はできております」
真新しいベッドの上であらためてすっと背筋を伸ばし、恭しく決意を伝えると、彼は気のせいか物寂しそうにふっと淡く微笑んだ。そして遠慮がちにロゼリアに手を伸ばして抱きしめる。

「ありがとう……わたしのような何の取り柄もない男のところに、あなたのような気高く美しい女性が来てくれるだなんて……本当に夢のようだ」
「？！」
おおよそ彼らしからぬ美辞麗句にロゼリアは耳を疑った。だがさらに言葉は続く。
「あなたの気持ちがわたしにないことはわかっているが、精一杯、大事にする……好いてもらえるように努力する……だから……」
あっ――。
抱擁が解かれると、ひどく熱っぽいまなざしを向けられて息をのんだ。そのまま口づけられ、清潔な白いシーツに沈められていく。ロゼリアは緊張で無意識に体をこわばらせながらも、彼のすべてを受け入れた。

翌日から、グレアムとの結婚生活が始まった。
夫婦となっても彼は寡黙だった。ほとんど必要なことしか話さないため打ち解けるのは難しい。それでも何かとロゼリアのことを気遣ってはくれるので、それなりに平穏に日々を過ごせていた。
初夜の彼らしからぬ発言については尋ねられないままだ。それを口に出したのは酒に酔っていたからだろうが、本心なのか、睦言なのか――確かめたい気持ちはあるのにどうしてもできずにいる。
きっと恐れているのだ。心にもない言葉だったと言われてしまうのを。ロゼリアに好意はないと明かされてしまうのを。これが両家の利になる政略結婚であることくらい、とうに承知のはずなのに。
馬鹿みたい――。
気まぐれに与えられた不確かなものに縋っている自分が、ひどく滑稽に思えた。
確かめられないのならもう考えるのはやめてしまおう、忘れてしまおう――そう心に決めて意識的に奥底に沈めることにした。いまは妻の役割を果たすことに注力すべきなのだから。

しかし――。
一年が過ぎても、二年が過ぎても、ロゼリアに懐妊のきざしは見られなかった。
義両親には何かにつけて早く跡継ぎをと催促されていた。見かねたグレアムが追いつめるなと注意してくれたので、面と向かって言われることはなくなったが、その空気はひしひしと感じている。
もちろん跡継ぎを産むのが責務であることは理解している。だが医者に診てもらっても原因は判然としないし、教会で祈っても効果はない。これ以上はもうどうしたらいいかわからなかった。
このままではいつ離縁されてもおかしくない――。
ロゼリアはあまり気にしていないかのように振る舞いながらも、次第に思い詰めるようになっていった。

二十七歳になっても子供は授からないままだった。
さすがにもう彼女に跡継ぎは望めないのではないか――そんな閉塞した空気の中、針のむしろに座っているかのように感じながらも、どうにか背筋を伸ばして日々を過ごそうとしていた。

その日、ロゼリアは同年代の女性三人を招いて茶会を開いた。
場所はポートランド家が誇るバラ庭園である。他では見られないバラや景色が楽しめると評判なので、準備はやや大変になるが、気候のいいときには度々こうして庭園で行っているのだ。
「そういえば、みなさまご存知です？」
紅茶を味わいながら、それぞれの近況などをひとしきり穏やかに語らったあと、伯爵家夫人のフローラが思い出したようにそう切り出した。その口元はどことなくウズウズとしているように見える。
「何でしょう？」
ロゼリアが水を向けると、待ってましたとばかりに前のめりになって言葉を継ぐ。
「ウィンザー公爵家のリチャード様なんですけど、先日、騎士団長になられて」
「まあ！」
まさかここで彼の名前が出てくるなんて思いもしなかった。驚きのあまりロゼリアは凍りついたが、他の三人は色めき立っていたので気付いてもいないようだ。
「きっと騎士団長の衣装もお似合いでしょうね」
うっとりと夢見がちに応じたのは侯爵家夫人のアメリである。既婚者となったいまでもリチャードに憧れを抱いているのだろう。そういう女性は少なくないと聞く。物語の登場人物を好きになるような感覚なのかもしれない。
「ここからが本題よ」
フローラはますます楽しそうに声をはずませる。
「騎士団長に就任すると通常は支度金を賜るのですけど、リチャード様は支度金の代わりに陛下のお口添えをいただいて、ご婚約なさったの」
「ご婚約？！」
驚くアメリの隣で、ロゼリアはガンッと鈍器で頭を殴られたような衝撃を受けた。思考も感情も追いつかずただ呆然とすることしかできない。まさか、いまになって結婚だなんて――。
「お相手はまだ十五歳のとても可愛らしい伯爵令嬢という話よ」
「でもリチャード様って、その、男性がお好きだったはずでは……」
「そう思うでしょう？」
もっともなアメリの疑問に、フローラはなぜか得意満面でそう返してふふっと笑う。
「実は、お相手はリチャード様が懸想なさっている方の娘さんなの！」
「えっ……それって、彼とは許されないから彼の娘とってことかしら？」

「でしょうね。そこまで一途に求めるなんて究極の純愛ですわ！」
「せつなくてキュンとしますわね！」
　二人はきゃいきゃいと少女のようにはしゃいでいた。
「その娘さんと結婚することは十年前から決めていたって噂よ。もちろん十年前はまだ小さな子供だったから、十年待ったの。リチャード様が婚約解消したのもそのためだったようですわね」
「ちょっと、あの、フローラ様……」
　それまでおとなしく聞いていた男爵家夫人のシーリアが、気まずげに声を上げる。それでようやくフローラは思い至ったのだろう。その婚約解消した相手がロゼリアだったということに――。
「申し訳ございません！！」
　悪気がなかったことは、青ざめたまま必死に頭を下げるその姿を見ればわかる。ロゼリアはナイフで切り刻まれたような胸の痛みを隠して、どうにか優美に微笑んでみせる。
「いいのよ。もうずいぶん昔のことですし、わたしもこうして結婚して幸せに暮らしていますもの……リチャード様も結婚して幸せになれるといいですわね」
「ええ」
　三人ともほっと安堵の表情を浮かべた。
　それからは話題を変え、何事もなかったかのように平和におしゃべりを楽しんだ。ロゼリアもにこやかに招待者としての務めを果たした。少なくとも表面上は――。

「冗談じゃないわ！！」
　ロゼリアは茶会を終えて私室に戻ると、リチャードをもとにしたとされる例の小説を本棚から引っ掴み、怒りまかせに絶叫しながら床に叩きつけた。一部が折れ曲がった状態で床に転がる。
　結婚せずに想いを貫くのならよかった。
　でも十五歳の子と結婚ですって？
　しかも好きなひとの娘？
　そのためにわたしは婚約解消されたの？
　原因は父親の不正だが、それが発覚したタイミングについては違和感を覚えていた。相手の家を調査するなら普通は婚約前である。婚約中に調査したのは婚約を解消したかったからではないか、と。
　たとえそうだとしてもウィンザー家の都合によるものだと思っていた。それならまだ受け入れられた。けれど、もし、本当に彼が元同級生の娘と結婚するためにロゼリアを捨てたのだとしたら――。
「よくも馬鹿にしてくれたわね！！」
　ダンッ！　と床に転がっている小説を力いっぱい踏みつけて歯噛みする。じわりと目が潤むが、グッとこぶしを握りしめて涙がこぼれるのを必死にこらえる。すこし離れたところで侍女のアンナがおろおろとしていた。
「ロゼリア様……あの、わたしに何かできることは……」

「あるわけないでしょう！！」
「でも……」
「だったらリチャード様の結婚を潰してちょうだい！！」
　何も悪くないアンナに感情的に当たり散らしたものの、彼女がいまにも泣きそうに唇を噛みしめているのを見て、我にかえった。
「ごめんなさい……いまはひとりにして……」
「はい……失礼します」
　静かに扉が閉まり、躊躇いがちに足音が遠ざかっていく。
　その場でロゼリアは膝から崩れ落ち、床にうずくまったまま子供のように声を上げて泣いた。大粒の涙がぼたぼたと小説の上に落ちる。こんなふうに号泣するのは結婚してから初めてのことだった。

　しかし、そのことがまさかあんな騒動を引き起こすだなんて、このときはまだ想像もしなかった――。

「あの、明日から五日間おやすみをいただけますか？」
　例の茶会から数か月が過ぎ、ロゼリアの傷ついた心も緩やかに癒えつつあったころ、侍女のアンナがおずおずとそう切り出した。彼女がこれほど急に休暇を申し出るなど初めてのことである。
「ご実家で何かあったの？」
「あ、いえ、そうではなく……大事な用があって……」
「そう……わかったわ。行ってらっしゃい」
「ありがとうございます！」
　アンナはうれしそうにパッと顔をかがやかせると、勢いよく一礼する。
　いつも素直に答える彼女が言葉を濁したことは気になったものの、もういい大人なのだから言いにくいことのひとつやふたつあるだろうと、ロゼリアはあまり深く考えようとしなかった。

　翌日からアンナは予定どおり休暇を取った。
　当然、代わりの使用人はいるので特に不自由なく過ごしている。もちろん長年の専属侍女である彼女ほどは行き届かないが、戻ってくるまでの数日のことなので辛抱すればすむ話である。

　そんな折、リチャードが何の前触れもなくポートランド家にやってきた。それもロゼリアに面会を求めて。婚約解消してから一度たりとも連絡を取っていなかったのに、いったいどうして――。

「わたし、本当に何も心当たりはないのです」
「とりあえず彼の話を聞いてみよう」
　ロゼリアはひどく動揺したが、夫のグレアムに促されて彼と二人で面会に応じることにした。拭えない不安はありながらも、彼が一緒にいてくれるというだけで随分と心強く感じられた。

「時間がないので単刀直入に申し上げます」
　あれから十年――にもかかわらず姿は驚くほど変わっていない。ロゼリアと夫が客間に入り、すでに通されていたリチャードと軽く挨拶を交わすと、さっそく彼のほうから本題を切り出してきた。
「そちらの使用人であるアンナとジョンが、わたしを陥れて犯罪者に仕立て上げようとしたうえ、わたしの婚約者に危害を加えようとしました」
「えっ……？」
　にわかには理解できず、思わずロゼリアは素で聞き返してしまう。
　リチャード様を陥れようとした？　　彼の婚約者に危害を加えようとした？　　あの二人には彼との接点などほとんどないはずなので、考えられるとしたら――もはやそれしかないという心当たりに血の気が引いていく。
「十年前、アンナはあなたの侍女でしたよね。顔を覚えています」
「はい……いまもわたくしの専属侍女です……」
「彼女は自分が勝手にしたことだと主張していますが」
　それを聞いて、息もできないほど胸が押しつぶされそうになった。しかしうつむきはしない。あらためて真摯なまなざしで彼を見つめて自供する。
「申し訳ありません、アンナの行動はすべてわたくしのせいなのです」
「説明していただけますか」
　そう言われ、ロゼリアはそっと頷いてから話し始める。
「数か月前、リチャード様がご婚約なさったという話を知人から聞きました。お相手は恋い慕っている方の娘で、わたくしと婚約解消したのは彼女と結婚するためだったとも。それでショックのあまり我を忘れてアンナに叫んでしまいました。リチャード様の結婚を潰して、と」
　リチャードはじっと表情を変えることなく聞いていた。どう思っているのかは窺えない。ロゼリアはますます緊張して手のひらが汗ばんでいく。
「わたくしとしては、ただ感情的になっただけで命令のつもりはありませんでしたし、そのすぐあとに謝罪して発言を撤回した気になっていたのですが……軽率だったと思っています」
「……そうですね」
　リチャードは静かに肯定の相槌を打つと、言葉を継ぐ。
「忠実な使用人であればあるほど主人の意向に従おうとします。直接、命令を下さなくても。だからこそ我々は間違いのない言動を心がけねばならないし、主人として相応しい人間であらねばならない」

「はい……」
「まあ、わたしが偉そうに言えたことではありませんが」
　神妙に頷いたロゼリアに、彼は肩をすくめておどけるようにそう付言した。
「それで、あなた方はアンナとジョンをどうしますか？　　彼らは命令もなかったのに主人の意向を読み違えて暴走した。その結果、主人が不利益を被るなら解雇もやむなしと思いますが」
「いえ、二人はこれからも我がポートランド家の使用人です」
　間髪を入れずに答えたのは隣に座っている夫のグレアムだ。これまでずっと沈黙していたので驚いたが、振り向くと彼はかつてないほど緊張した顔をしていた。
「あなた方が主人としてその責を負うことになっても？」
「覚悟しております」
　毅然と応じたグレアムを、リチャードはじっと深く探るようなまなざしで見つめる。グレアムも逃げることなく真正面から受け止める。しばらくそのまま息の詰まるような沈黙がつづいたが、やがてリチャードがふっと表情を緩めた。
「わかりました。それでは後ほど二人をこちらにお送りします。あなた方が身柄を引き受けてくださるのであれば、罪には問いません。さいわい未遂でしたし。あなた方のほうから軽く説教でもしておいてください」
　思いもよらない話だった。グレアムも驚いたらしくわずかに目を見張る。
「寛大なご処置に心より感謝いたします」
　そう応じて深々と頭を下げた。隣のロゼリアも同じように深々と頭を下げた。ただ単に妻として夫に従ったというだけでなく、アンナの主として、ロゼリア自身もこの処置に心から感謝していた。
　リチャードは湯気の立たなくなった紅茶に手に取り、一気に飲み干した。
「結婚式が迫っていますので、慌ただしくて申し訳ありませんがそろそろ失礼します。何かありましたらウィンザー家までご連絡ください」
「リチャード様」
　立ち上がろうとする彼をロゼリアが呼び止めた。鼓動が速くなるのを感じながら、それでも挑むように紫の双眸を見据えて告げる。
「最後に、ひとつだけ教えていただけませんか」
「何でしょう」
　リチャードはあらためてソファにゆったりと座り直した。たったそれだけのことでロゼリアはすこし気圧されてしまうが、くじけることなく言葉を紡ぐ。
「十年前、ウィンザー家がわたくしとの婚約解消を求めたのは、恋い慕っている方の娘と結婚するためだというのは、本当なのでしょうか？」
　いまさら知ったところでどうなるわけでもないが、許されるなら真実を知りたい。まじろぎもせずただひたむきに見つめていると、リチャードはやがて考えあぐねたような面持ちになり、小さく息をつく。
「まず、わたしは男色ではありません」
「えっ？」
「どういうわけか元同級生に懸想していると一部で思われているようですが、まったく

の事実無根です。ただ、その元同級生の娘と結婚するためにあなたとの婚約解消を求めたのは事実です。彼女と出会ってどうしようもなく心惹かれてしまったのです」
　そこまで話すと、すっと真剣な表情になってロゼリアを見つめる。
「わたしの都合であなたとクレランス家を蔑ろにしてしまいました。正直に話さず卑怯な手段を用いたことも言い訳のしようがありません。申し訳ありませんでした」
「いえ……父のしたことは事実ですし……」
　率直な謝罪とともに頭まで下げられて、ロゼリアは思わずそう返してしまった。すぐにあわてて言い継ぐ。
「もちろん正直に話していただきたかった気持ちはあります。ですが、あのとき聞いていたらショックで立ち直れなかったかもしれません。結果的にはこれでよかったのだと思うことにします」
「お心遣い、痛み入ります」
　彼はそう言うが、あくまでロゼリアの今現在における素直な所感である。
　そんなふうに冷静に受け止めることができたのは、もう彼への恋心がないからだ。今日こうして彼と対面することでそれに気付けた。長年トラウマのように引きずってきたけれど、いまようやく過去にできたのかもしれない――。

　帰路につくリチャードとその執事を玄関先まで見送ると、ロゼリアは深く息をつく。ただ座って話をしただけなのにひどく疲れてしまった。もちろんそれが精神的なものだということはわかっているけれど。
「大丈夫か？」
「ええ……」
　夫のグレアムが顔を覗き込んでくる。表情や声音があまり変わらないのでわかりにくいが、いつだって彼はこうしてロゼリアを心配してくれるのだ。ただ、今回の件についてはすべて自業自得である。
「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。本当に妻失格ですわね。跡継ぎも産めないくせにこんな面倒を起こしてしまって……離縁は覚悟しております」
「誰に何を言われても離縁などしない」
　その物言いは、断固とした意思表示のように感じられた。
　生真面目なひとなので、娶ったことに責任を持とうとしているのかもしれない。七年も子供ができないのに離縁をしなかったのも、その責任ゆえだろうか。我知らず自嘲の笑みが浮かんでロゼリアは顔を伏せる。
「お優しいのですね」
「優しくは、ない……君の心にまだウィンザー卿がいることはわかっていたのに、跡継ぎのことでつらい思いをしているのも知っていたのに、君を手放したくなくて離縁してやれなかった」
　えっ――？
　まるでロゼリアが離縁したがっているかのような物言いだ。もちろんそんなことは言ってもいなければ思ってもいない。どういうことなのかと怪訝に思いながら顔を上げ

た、そのとき。
「君が、好きだから」
　グレアムと視線が絡んで、息を飲む。
　嘘を言うようなひとではないはずだけれど……本当なの？　わたしとの結婚は家のためで、あなた自身は不本意に思っていたのではないの？　責任感から仕方なく夫の義務を果たしていたのではないの？
　ふいに彼が目をそらした。どういうわけか耳のあたりをほんのりと紅潮させながら。ロゼリアにとってはにわかに信じがたいことで、しばらくそのまま固まったように呆然と彼を見つめていたが――。
「わたしたち、お互いに言葉が足りなさすぎたように思います」
「……それは……そうだな……」
　ロゼリアも、彼も、相手の気持ちを勝手に決めつけてしまっていた。
　心で思っていることなんて相手に聞かなければわからないし、言わなければわかってもらえない。そんな大事なことがいまになってようやくわかった気がする。
「だから……七年分、話をしませんか？」
　そう提案して、無表情の夫にやわらかく微笑みかける。
　すこし怖いけれど、きちんと話をしなければきっと何も始まらない。誤解があるなら解きたいし、そのうえでこれからのことも話し合いたい。たとえそのさきにどんな結果が待ち受けているとしても――。

侯爵家の気弱な従僕は先輩侍女に逆らえない

「ジョン、服を脱げ」
　豪奢な椅子にゆったりと座している美しい男性が、尊大に命じる。
　その正面に立たされていた八歳のジョンはビクリとして固まるが、すぐ後ろに控えている叔父夫妻に脱ぎなさいと促されて、おどおどしながらシャツ、ズボン、靴下とひとつずつ脱いでいく。
　やがてパンツ一枚になった。恥ずかしいというより、何をさせられているのだろうという不安のほうが大きかった。うつむき加減のままチラリと視線だけを前に向けると、彼は冷ややかに言い放つ。
「下着もだ」
　言い知れない恐怖にぞわぞわと肌が粟立った。
　それでも叔父に早く脱ぎなさいと言われると逆らえなかった。全身にまとわりつくような視線から逃げるように目を伏せ、いつのまにか小さく震えていた手をおずおずとパンツにかけた。

　ジョン・グラミスは、貴族とは名ばかりの貧乏男爵家に生まれた。
　領地も持たず、使用人も雇わず、親子三人だけで慎ましやかに暮らしていた。しかしそれを不幸だと思ったことはない。家族みんな仲が良くて、あたたかくて、毎日がとても楽しかったのだ。
　しかし、先日、両親が馬車の事故で亡くなってしまった。
　祖父母は双方ともジョンが物心つくまえに亡くなっていたため、親戚は叔父だけだ。未成年は爵位を継ぐことができないので彼が継ぐらしい。だからジョンの面倒も見てくれるのだろうと思ったが。
「ジョン、君にはカドガン伯爵家に養子に行ってもらう」
　申し訳なさげにそう告げられた。
　彼によれば、カドガン伯爵は結構な金を父親に貸していたそうだ。それで後継である叔父にいますぐ返済するよう迫ってきたが、無理ならジョンを養子にもらいたいという話になったらしい。
「それで借金がなくなるのですか？」
「ああ、そう聞いている」
　自分が養子に行ってすむなら行くしかないだろう。叔父も返済できるほどの金は持っていないというし、そもそも自分の父親が作った借金なのだから。そう思って頷いたのだけれど――。

一糸まとわぬ姿になり、さすがに恥ずかしくて身を縮こまらせながら前を隠す。しかしカドガン伯爵に手をどけろと命じられ、叔父夫妻にも早くしなさいと急かされ、言うとおりにするしかなかった。
「ほう……」
鮮やかな碧眼が見開かれ、その端整な顔にどこか下卑た笑みが浮かんだ。そのままねっとりと舐めまわすようにジョンを見つめていく。顔も、体も、手足も、陰部も、余すところなく全部――。
「来なさい」
すっかり青ざめていたジョンはびくりとして思わず一歩下がる。どうして裸にされたのかも呼ばれたのかもわからなかったが、ただただ怖かった。しかし押しとどめるように叔父が背後からジョンの両肩を掴んだ。
「申し訳ありません。つづきは取引を終えてからにしていただけますか」
「……いいだろう」
カドガン伯爵は不愉快そうに秀麗な顔をしかめて応じると、書類を机の上に置いた。
叔父が目配せし、叔父の妻がそれに頷いておずおずと前に進み出る。そして伯爵に一礼してその書類に手を伸ばしかけた、そのとき。
バンッ！
壊れんばかりの激しい音を立てて扉が開いた。
そこにいたのはカドガン伯爵よりも幾分か若そうな男性だった。その後ろでは使用人が困りますと焦ったように訴えているが、彼は無視してまっすぐジョンのほうへ足を進めてくる。そして呆気にとられる叔父を無言で押しのけると、外套を脱いでジョンの体が見えないようにすっぽりと包み、片腕で抱き上げた。
「何者だ、貴様、カドガン伯爵家に楯突くつもりか」
「ポートランド侯爵家の嫡男、グレアム・ポートランドだ」
「なっ……」
カドガン伯爵は目を見開き、狼狽えた。
しかしグレアムは無表情のまま彼の執務机の前に向かい、その上に置かれていた書類を手に取って眺めると、どこからか取り出した重そうな小袋を机上に置いた。音からして金貨だろう。
「借入金額と利息分以上はある。釣りは不要だ」
「……ま……お待ちください！」
カドガン伯爵は執務机に手をついて勢いよく立ち上がった。
グレアムは片腕でジョンを抱き上げたまま立ち去ろうとしていたが、その声に足を止めると、そのままゆっくりと顔半分だけ振り向いて冷ややかな視線を流した。
「ここでおとなしく引いたほうが身のためだ。今後、この子に関わろうとすることがあれば、我がポートランド侯爵家が全力で相手をさせてもらう」
そう言うと、今度は叔父夫妻のほうに目を向ける。
「あなたたちもだ」

カドガン伯爵も、叔父夫妻も、ただ顔をこわばらせて立ちつくすだけだった。

ジョンはそのまま王都の屋敷に連れて行かれた。
すぐに使用人に風呂に入れられ、服を着せられ、食事をさせられた。何がなんだかわからなくて不安だったが、食事には我を忘れてがっついてしまった。両親が死んでから初めてのあたたかいごはんだったのだ。
「もう安心して大丈夫よ、グレアム坊ちゃまが助けてくれたのだから」
おなかが満たされたことで現実を思い出してしまい、また不安が襲ってきたが、年配の女性使用人がニッコリと優しく声をかけてくれた。それでようやく自分が助けられたのだとわかった。

食事のあとは、応接間に連れて行かれてしばらく待つようにと言われた。
やることもなく、ふかふかのソファに座ってぼんやりとしていたら、グレアムが入ってきて向かいに腰を下ろした。女性使用人も控えているので二人きりではない。おそらく彼の配慮なのだろう。
「助けてくれてありがとうございました」
ジョンはぺこりと頭を下げる。次に会ったらお礼を言おうと心に決めていたのだが、いささか唐突だったかもしれない。しかしながら彼の表情はほとんど変わらなかった。
「君のお父さんに返せていない恩義があった……それを返したまでだ。君は気にしなくていい。それより今後のことを話したいのだが、構わないだろうか」
「あ……はい……」
ズンと気が重くなった。助けてもらったはいいが、行くところがなくなっていたことを思い出した。いまさら叔父夫妻のところには帰れないだろうし、帰りたくもない。
「心配するな。君の養子先はわたしが責任を持って探すつもりだ。きちんと家族として迎え入れてくれるところをな。貴族は難しいが、商家なら養子を探しているところもあるだろう。もちろん君の意見は最大限に尊重する」
グレアムが淡々と告げる。無表情でまったくといっていいほど愛想はないが、真面目に考えてくれているのは伝わってきた。きっと彼の言葉に嘘やごまかしはないのだろうと思う。けれど――。
「僕は、よそには行きたくない……怖いです……」
今日のことを思い出すだけでぞわりと寒気がする。よく知らないひとのところに行ったら、またあんなことになるかもしれない。もっとひどいことになるかもしれない。そう思うと怖くてたまらなかった。
グレアムは目を伏せ、そのままじっと深く考え込んでしまった。
それを見計らったように、後ろに控えていた女性使用人がティーポットを持って紅茶を注ぎに来た。ほとんど中身の減っていないティーカップに形ばかり注ぎ足すと、やわらかく声をかける。

「グレアム坊ちゃま、この子にはまず休養が必要なのではありませんか？　大変なことがあったばかりですもの。ゆっくりと休んでもらって、落ち着いたころにまた話し合えばよろしいと思いますよ」
「そうだな……そうしよう……」
　ジョンは客間をあてがわれ、しばらくポートランド家の屋敷で過ごすことになった。
　自由にくつろいでいいと言われたが、ひとりでいるのも寂しかったので使用人たちについてまわり、そのうち仕事もすこしずつ手伝わせてもらうようになった。
「あら、芋剥きとても上手ね」
「よく手伝ってたんだ」
　みんな良くしてくれたが、特にメアリーという年配の女性使用人が優しかった。最初の日にジョンの世話を焼いてくれたひとである。使用人でジョンの事情を知っているのは彼女と執事だけらしい。
「あの、僕、そろそろグレアム様と話がしたいんだけど、時間あるのかな？」
「ではグレアム様に聞いておきますね」
　ここ二日ほど、仕事が忙しくなったようで顔も合わせていなかった。だからすぐには面会できないかもしれないと思っていたが、翌日、さっそく時間を取ってくれた。
「ここで使用人として働かせてください！」
　通された書斎でグレアムと向かい合わせに座り、心に決めていたことを前置きもなく訴えると、彼は絶句した。後ろに控えていたメアリーも目を丸くしている。
「ずっと家の手伝いをしてたので働くのは得意です。お父さんの借金も働いて返したいです。真面目に働くのでここに置いてもらえませんか？」
「……君は、貴族の家に生まれたんだぞ？」
「僕はもともと貴族だなんて思ってなかったです」
　一応、父親がグラミス男爵だという話は聞いていたが、そんな実感はなかった。だから使用人として働くことにもまったく抵抗がない。むしろ実際に手伝わせてもらって向いているとさえ思った。
　グレアムはしばらく難しい顔をして考え込んだあと、小さく息をつく。
「わかった。ただし君にはまず教育を受けてもらおう」
「えっ、使用人なら別にそんなの必要ないんじゃ」
「使用人にも教養がなければ務まらない仕事が多々ある」
「……それならちゃんと受けます」
　ジョンは約束どおり家庭教師から様々な教育を受けつつ、空き時間には使用人として雑用をこなした。最初は野菜の皮剥きなど簡単なことばかりだったが、みんなに教わりながら徐々にできることを増やしていった。

　三年後、グレアムは領地に戻ることになり、ジョンも一緒に連れて行かれた。
　領地にある彼の実家だという住まいは驚くほどの豪邸だった。王都のタウンハウスも立派だと思っていたが、その比ではなかった。もし宮殿だと言われたら疑いもせず信じてしまうだろう。

当然ながら領地もかなり広い。グレアムが戻ったのは、父親であるポートランド侯爵から領地経営を引き継ぐためである。領地が広い分、仕事も多岐にわたるので早いうちからすこしずつということらしい。

そのきっかけのひとつはグレアムの結婚が決まったことだ。一年の婚約期間を経て、この領地で結婚することになっている。グレアムにつづいて、妻となる女性もすぐに専属侍女を連れてやってきた。

彼女の名はロゼリアという。とても美しいが、どことなく冷たくてきつそうで気位の高そうなひとに見える。グレアム様にはもっと可愛らしくて優しいひとが似合うのに、とひそかに残念に思った。

「ロゼリア様って、あの悪役令嬢ローズのモデルなんですって」

結婚式が終わると、女性使用人たちのあいだでそんな噂が囁かれるようになった。

ジョンは知らなかったが、悪役令嬢ローズというのは人気小説の登場人物で、ロゼリアをモデルに書かれたと言われているらしい。だからロゼリアも傲慢な女なのではとみんな恐れていた。しかし――。

「あんなのロゼリア様とは似ても似つきません！」

その噂を聞きつけた専属侍女のアンナが全力で否定した。

もちろん失敗して叱られたことはあるが、不当な扱いは受けていない。ましてや他の令嬢を陥れるなんて絶対にしない。むしろ陰口をたたかれても黙って耐えていた。そんな強くて気高い方なのだと。

それを表立って否定するひとはさすがにいなかったが、みんなどこか信じきれずにいるようだった。噂になるのはやはり似たところがあるからではないか。ジョンもそんなふうに考えていた。

「本当なの？　かばってるだけじゃないの？」

アンナに誘われて二人でお菓子を食べているときに、率直に尋ねてみると、彼女は「信じてくれないなんてひどーい」と口をとがらせた。しかしすぐに吹き出すように笑って言葉を継ぐ。

「あの小説を最初に読んだときは、ロゼリア様をモデルにしてるなんて噂があることを知らなくて。読んでもちっとも気付かなくて。だってロゼリア様とは本当に似ても似つかなかったんだもの」

そこまで話すと紅茶を一口だけ飲み、遠くに目を向ける。

「だからロゼリア様がその小説を持ってるのを見たときにね、それ面白いですよねとか能天気に声をかけちゃって。でもロゼリア様はつらそうな素振りさえ見せなかったわ……そういう方なの」

その目がせつなげに細められた。

アンナの言ったことに嘘はないような気がした。もしかしたら悪役令嬢というほどではないのかもしれない。そう思いつつも、ロゼリアと関わりのないジョンには見極める機会もなかった。

ただ、二週間、三週間と過ぎるにつれて風向きが変わっていく。

ロゼリア様は確かに悪役令嬢ローズとは似ていない、ごく常識的な方だと——アンナの主張を信じたというより、ロゼリアと実際に接してそう感じるひとが増えたようだ。ジョンはまだ接したことがないのでわからないけれど。

「こんにちは、何か用事はありますか？」
ジョンが勉強を終えて調理場にひょっこりと顔を出すと、アンナもそこにいた。料理人のひとりと向かい合って何か話していたようだ。ジョンに気付くとひらひらと手を振りながら話しかけてくる。
「もう勉強は終わったの？」
「うん……アンナはどうしたの？」
「お茶会についての相談よ」
彼女によれば、王都ではマカロンとかいう新しい焼き菓子が流行っているので、それをここで作れないかと相談していたらしい。そういったことでポートランド家の威厳を示すのだという。
「ふぅん、貴族って面倒くさいんだね」
「なに他人事みたいに言ってんの」
「え……だって僕は貴族じゃないし……」
「でも貴族の使用人でしょ！」
「あ、そっか」
自分が元貴族であることを知られたのかと内心焦ったが、そうではなかった。へらりと笑ってごまかすと、アンナはあきれたようなじとりとしたまなざしになる。
「勉強ばっかしてるから自覚が持てないのよ」
「ひゃっ！」
いきなり二の腕をつかまれて思わず変な声が出てしまった。それでも彼女は構うことなく何かを確かめるように握々する。
「まあ、こんな細っこい腕じゃ力仕事もままならないだろうし、頭を使わせるしかないわよねぇ……」
ひとりつぶやくようにそう言うと、手を放した。
「旦那様のご厚意で勉強させてもらってるのは忘れないでよ。家庭教師だってタダじゃないの。しっかり頑張って旦那様のお役に立てるようになりなさい。それがひいてはロゼリア様のためにもなるんだから」
「わかってるよ……」
アンナはことあるごとに「ロゼリア様のため」と口にする。いいかげん聞き飽きたし、そもそもロゼリアばかり気にかけていることが面白くない。何となく。
「ジョン、こっちを手伝ってくれ」
そのときちょうど下ごしらえをしている料理人から呼ばれたので、じゃあねと逃げるように手伝いに向かう。しかし彼女は気にする様子もなくジョンを軽く見送ると、すぐに相談を再開していた。

「紅茶を買いに行くんだけど、ジョンも行く？」
「うん、行く！」
　そのうちにアンナは月に一回ほど街に誘ってくれるようになった。
　荷物持ちという名目だが、いつもたいして荷物がないのであまり役に立っていない。それなのにどうして誘ってくれるのかと不思議に思いながらも、うれしくて都合さえつけば同行していた。
　今日はロゼリアの茶葉を買うとのことである。このくらい他の使用人に任せてもいいのに、アンナは自分で選ぶことにこだわっているらしい。時間に余裕のあるかぎりはそうしているという。
「ま、息抜きの意味もあるんだけどね」
　アンナはエヘッと笑う。
　用事のあとはたいていカフェで休憩してから帰るのだ。ジョンはこれも楽しみだったりする。アンナとおしゃべりできるのも楽しいし、おいしいお菓子を食べさせてもらえるのもうれしい。ただ――。
「あんたいつまでたってもひょろっこいけど、ちゃんと食べてる？」
「食べてるよ」
　毎度そんなふうに心配されるのはあまり面白くなかった。確かにひょろっとしていて小さいけれど――自分でも気にしているだけに、悪気がないとわかっていてもちょっと悲しくなってしまうのだ。

　三年が過ぎ、十五歳になってもジョンは小さいままだった。
　もちろんそれなりには成長しているが、年齢のわりに小さくて痩せた体型というのは変わらない。顔も幼いため、まわりからはまだまだ小さな子供のように扱われている。くやしくて毎日牛乳をがぶ飲みしていた。
　そんな折、グレアムとロゼリアが半年ほど王都に滞在することになった。
　ジョンも当然のように同行するものとばかり思っていたのに、勉強があるから残るようにと言われてしまった。もっとも同行してもジョンにできることはそんなにない。だがアンナは――。
「わたしはロゼリア様の専属侍女なんだから、同行するに決まってるでしょ」
「そうだよね……」
　わかっていたつもりだが、実際に聞かされるとやはり寂しくなってしまう。ジョンがいちばん仲良くしているのはアンナなのだ。しゅんとすると、彼女はアハハと軽快に笑って頬杖をついた。
「たった半年なんだからそんな顔しないの！　王都で流行ってるお菓子とか買ってきてあげるから、楽しみにしてて！」
「うん」

笑顔の彼女にわしゃわしゃと頭をなでられる。また子供扱いされてしまったが、今日にかぎっては不思議と嫌だと思わなかった。

ほどなくしてグレアムたち一行は王都に向かった。
もっともジョンの日常はそれまでとあまり変わらなかった。家庭教師の授業を受けて、空き時間にこまごまと雑用をするという生活である。ただアンナがいないことだけがたまらなく寂しかった。

「えっ……ちょっとあんたずいぶん大きくなってない？　声も変わってない？」
半年後、王都から帰ってきたアンナに声をかけたら、彼女は振り向くなり大きく目を見開いて当惑を露わにした。そしてジョンもいつもと目線が違っていたので驚いた。以前は見上げるような感じだったのに、いまは同じくらいの高さだ。
「半年のあいだにけっこう背が伸びたんだけど、実感したのは初めてかも」
「何か腹立つわね！」
アンナは口をとがらせると、ズイッと距離を詰めて二人の背を比べるが、ジョンのほうが高かったようでさらにくやしがった。
「あのちっちゃかった子がこんな……声変わりまでして……」
「別におかしなことじゃないだろ、僕、もう成人なんだし」
「えっ、そうなの？！」
つい先日、十六歳になったところだ。
とはいえ成人に見えなくても仕方がないと自分でも思う。でもいずれは大人の男として見てほしい。すこしでも早くそう見てもらえるように頑張らないと――ジョンは内心ひそかに気合いを入れた。

「ジョン、成人おめでとう」
翌日、グレアムから書斎に呼ばれて祝いの言葉を贈られた。誕生日を覚えていてくれただけでもすごくうれしくて、ありがとうございますと元気いっぱいに応えたが、それが本題ではなかったらしい。
「実は、とある商家から君を養子にしたいと申し出を受けている」
「えっ……」
「わたしが長年懇意にしている夫妻だから信用していい。跡取りはいるが、君には経営を手伝ってほしいと考えているそうだ。そしてゆくゆくは店のひとつを任せられたらと。悪くない話だと思うが、どうだろう？」
突然、想像もしなかったことを言われてひどく困惑した。目を伏せ、グレアムの話を反芻しながら静かに考えをめぐらせる。そして――膝の上のこぶしにグッと力をこめると顔を上げる。
「僕は、ここにいたいです」

　それがジョンの素直な気持ちだった。一通りのことを思案したが心が揺れることさえなかったし、きっとこれからもないだろう。しかしその気持ちはグレアムに伝わらなかったようだ。
「わたしに恩義を感じてのことなら気にしなくていい」
「いえ……もちろんグレアム様には恩義を感じていますが、だからというわけではありません。僕にとって育ったところなので愛着がありますし、グレアム様のために働けることも誇りに思っています。あと正直なところ商売にはあまり興味がありません。ご迷惑でなければ、これからもここに置いてくださいませんか？」
　今度は精一杯の言葉を尽くして訴える。
　グレアムはわずかに目を伏せた。
「……わかった」
　そう答えながらも、まだ完全には納得していないようだった。
　彼としては、養子になったほうがジョンのためだと考えているのだろう。それでもジョンの意見を、意思を、最大限に尊重してくれた。そういうひとが主だからこそここで働きたいと思うのだ。

　成人を機に、家庭教師を呼んでの勉強はなくなり、執事見習いとなった。
　これでようやくグレアムに恩返しができると喜んだが、見習いなのでまだまだ雑用のようなことが多く、恩返しにはほど遠い。それでもほんのすこしでもグレアムの役に立てることがうれしかった。

　それから二年――。
　ジョンは十八歳になり、成人男性として普通くらいの身長になっていた。ただ、あいかわらずひょろっとした体型である。まったく運動をしていないわけではないのだが、筋肉はつかない。
　執事見習いのほうは意欲的につづけている。ひとりでこなせる仕事もだいぶ多くなってきたし、グレアムに同行することも増えてきた。それなりに仕事ぶりを認めてくれているのだと思う。
　ただ、先輩には気弱なところが難点だといつも指摘されていた。簡単に押し切られるようでは執事は務まらない。たとえ主が相手でも、毅然と対応しなければならないこともあるのだからと。
　理解はしていても、やはり性格によるところが大きいので改善は難しく――。

「ねえ、ジョンはあしたから五日間おやすみ取れる？」
　そんな折、アンナとお昼ごはんを食べていたら唐突にそう尋ねられた。いつもと変わらない軽い口調だが、その内容は軽くない。五日間もの連続休暇なんてこれまで一度も取ったことがないのだ。

「急にそんなこと言われても……」
「ちょっとつきあってほしいの」
「え、つきあうって？」
「カーディフの街に行きたくてね」
　それは隣の領地でいちばん賑やかな街である。
　ジョンも王都からここに来るときに通りかかったことがあった。馬車で二時間かからないくらいの距離なので、このあたりから遊びに行くひとも少なくないが、普通は日帰りか一泊程度だろう。
「五日間もいったい何するの？」
「楽しいこといっぱいしたくない？」
「あ、うん……休めるか聞いてみる」
　訝しみながらも、なかなか破壊力のある誘い文句につい頷いてしまった。特別な意味がないことくらいわかっているのに。彼女はジョンのことを弟のようにしか思っていないのだから。

　グレアムと先輩執事に明日から五日間の休暇を申し出たところ、快く了承してくれた。
　アンナとカーディフの街に遊びに行くからと正直に理由を言ったら、先輩からは気のせいか生温かい視線を向けられた。何か言われたわけではないので素知らぬふりをしておいたけれど。

「ええっ、そんなのダメだよ！　　やめようよ！」
　翌日、カーディフの街に到着して宿を取ったあと（ 部屋はもちろん別々だ ）、中央広場のテーブルで移動販売のサンドイッチを食べていると、アンナがとんでもないことを言い出した。本当はウィンザー公爵家の結婚を潰すために来たのだと――。
「もうっ、情けないこと言わないの！」
「情けないとかじゃなくて絶対ダメだよ」
「ロゼリア様の命令よ」
「いくら主の命令でも断らなきゃ」
「……」
　アンナは思いきり不服そうな顔をしてジョンを睨み、口をとがらせる。
「あいつはね、婚約者だったロゼリア様を自分勝手な理由で捨てたクソ野郎なの。そのせいでロゼリア様は社交界で嘲笑されて、あげく悪役令嬢なんてレッテルまで貼られることになったわ」
「ああ、あの小説の……」
　どうやらロゼリアはいまだに当時のことを恨んでいるらしい。だからといって侍女に復讐を命じるなんて悪役令嬢そのものでは――思わず眉をひそめるが、アンナはさらに前のめりになって訴えてくる。

「なのにあいつは素知らぬ顔で元同級生と幸せになろうとしてる。もちろん同性の彼とは結婚できないから、彼の娘さんと結婚するというかたちでね。ロゼリア様との婚約解消も実はそのためだったらしくて」
「ちょっと待って、ロゼリア様の元婚約者って、え……男色なの？」
「あんた知らなかったんだっけ。あいつがロゼリア様と婚約解消したあとで明らかになったのよ。当時の王都では有名な話だったし、うちの使用人も女ならだいたいみんな知ってるんじゃないかな」
　ぞわぞわと悪寒が走り、いまにも吐きそうなくらい気持ちが悪くなってうつむく。そんなジョンの様子に気付いていないのか、アンナは雲ひとつない青空を見やりながら頬杖をついた。
「いまの婚約者だってかわいそうよ。まだ十五歳なのに、そんなことのために男色のおっさんに嫁がされるだなんて。自分を利用して父親と夫がよろしくやってるとか、考えるだけでぞっとするわ」
「……やる」
　ジョンは低く唸るようにそう言うと、テーブルの上に置いていた手をグッと握りしめて顔を上げる。
「そいつの結婚を潰そう」
「ほんと？！」
　そんなことをしてはいけないと頭ではわかっているのに、激情には抗えなかった。やはり男色なんて変態のケダモノのクズばかりなのだ。このまま思いどおりになんか絶対にさせない――。
「それで、どうすればいいの？」
「ここからそう遠くないところに婚約者の家があるの。五日後の結婚式までに公爵家へ向かうはずだから、婚約者の家を見張って、その馬車が来たらこっそり壊すってのはどうかしら？」
　アンナの案は冗談かと思うくらいひどかった。
　考えてみれば彼女に緻密な計画など立てられるわけがなかった。行動的ではあるが思慮深いほうではないのだ。呆れたような落胆したような疲れたような気持ちになりつつ、溜息まじりに言う。
「そんなの代わりの馬車を呼ぶだけだよ」
「結婚式には間に合わないかもしれないじゃない」
「だからって結婚自体はなくならないだろ」
　反論すると、アンナは思いきり口をとがらせて不満を露わにする。
「じゃあどうすればいいのよ」
「急に言われたって……」
　だいたい結婚を潰すなんてとんでもなく大変なことなのだ。失敗して捕まりでもしたらただではすまない。だからこそ本当は時間をかけて慎重に策を練るべきなのに。そんなことをモヤモヤと考えながら眉をひそめていると。
「そうだわ！」
　アンナが両手を合わせ、わくわくしたような表情でグイッと身を乗り出す。

「婚約者を襲うってのはどうかしら？」
「ええっ、ダメだよそんなの！」
「衆人環視で肌をさらす程度よ」
「婚約者は悪くないのにかわいそうだろ」
「でも彼女の救済にもなるでしょ」
　ジョンは渋面で逡巡する。自分の父親に懸想する男色家に嫁ぐよりはいいのかもしれないが、何も悪くない彼女を辱めるのはやはりかわいそうだ。そもそもこれで婚約破棄になるかも微妙だろう。
「もっといい案を考えるからちょっと待ってくれる？」
「じゃあこれはプランＢってことで」
　いい案が浮かばなければ婚約者を襲うはめになる。
　ジョンは難しい顔をしたままサンドイッチにかぶりついてジュースを飲んだ。いつのまにか残り少なくなっていて、それに気付いたアンナが近くの移動販売でおかわりを買ってきてくれた。
「どう？　　何か思いついた？」
「うーん……」
　考えようとはしているものの空回りして何も考えられない。あまりにも情報がなさすぎるのだ。ピースがないのにパズルを完成させろと言われても無理である。ほとほと困り果てた、そのとき――。
「あっ！」
　そう声を上げたアンナが、ジョンをつついて広場の入口のほうをこっそりと指さす。そこには一組の男女がいた。二人で並んで話しながらこちらのほうへ足を進めてくる。
「あいつがロゼリア様の元婚約者リチャード・ウィンザーよ。まさかこっちに来てたなんて……隣の子はリチャード様の婚約者ね。めずらしいストロベリーブロンドだから間違いないわ。デートなのかしら」
　男性のほうは黒髪ショートヘアで圧倒的にスタイルがよく、少女のほうはピンクがかったふわふわのブロンドでかわいらしい雰囲気だ。二人とも遠くからでも目を引いた。不覚にもお似合いだと感じてしまったけれど。
　えっ――。
　ほど近いところを二人が通りすぎる瞬間、ドクンと心臓が跳ねた。
　よく見ると別人だったが、そのとき目にしたリチャードの顔がすこし似ていたのだ。八歳のジョンを買おうとしたあの伯爵に。当時のおぞましい記憶と恐怖が一気にぶわりとよみがえった。
「え、ちょっとジョンどうしたのよ」
「ううん……」
　顔面蒼白になっている自覚はあった。意識的にゆっくりと呼吸してどうにか気持ちを落ち着けると、ふいにひとつの案がひらめき、額に脂汗をにじませながらもニッと挑発的な笑みを浮かべる。
「あいつを犯罪者にすればいいんだ」
「え、どういうこと？」

「男色のあいつに僕を襲わせる」
「そう都合よく襲ってくれるかしら」
「まわりにそう思わせるだけだよ」
　そう答えると、喉の渇きを自覚してジュースを一口飲み、思案をめぐらせつつ言葉を継いでいく。
「まずは理由をつけてあいつを宿の部屋に連れ込むんだ。そこから僕がビリビリに服を破かれた状態で悲鳴を上げながら飛び出してくれば、襲われたってみんな信じてくれると思う。あいつは男色なんだから」
「なるほど！　　それなら結婚も潰れそうね！」
　アンナはパッと笑顔で両手を組み合わせながら同調した。その音量の大きさにジョンがあわててシーッと人差し指を立てると、彼女はゴメンと小さくなる。
「でもどうやって宿に連れ込むわけ？」
「ジュースをかけて、おわびに服を洗うとか言えば連れ込めると思う」
「へぇ、なかなか上手いこと考えるじゃない」
　横目でリチャードたちを窺うと、通行人の邪魔にならないところで何かやりとりをしているようだった。ジョンはジュースの入ったカップを手にして立ち上がる。
「アンナは離れてて」
「わかったわ」
　彼女が頷くのを見て、カップを持ったままリチャードのほうへ足を進める。背後にまわりこんで近づくとわざと肩からぶつかった。
「あっ！」
　ジュースが彼のシャツに上手くかかった。白い袖にべっとりと滴るくらいオレンジ色が染みている。
「ああっ、すみません！！」
「いいよ、仕方ない」
　彼は苦笑しながらそう応じた。本性はとんでもないクズのくせに、外面だけはいいのか好青年のような対応だ。腹立たしく思うものの表情には出さない。
「そのシャツ僕に洗わせてください！」
「え、洗う……？」
「泊まってる宿がすぐそこなので」
「いや、そこまでしてくれなくていい」
「それじゃあ僕の気がすみません！」
「だが、連れもいるし……」
「できるだけ急いでやりますので！」
　上目遣いで見つめつつグイグイと距離を詰めていく。彼は困惑しながらも、溜息をついて「わかった」とあっさり受け入れてくれた。やはり男色だけあって男に迫られると弱いのだろう。

「お嬢さんはこちらでお待ちくださいね」

宿に入るとすぐ、ジョンはついてきた婚約者の少女にそう告げる。
心細そうに頷いた彼女に、リチャードはなるべく早く戻るよと微笑みかけ、受付の男性従業員にも彼女のことを頼んでいた。自分が幸せになるために必要な存在だからか、大事にはしているようだ。
「ここです、どうぞ」
リチャードをつれて二階に上がると、客室に案内する。
宿を取ってすぐに出てきたので、着替えの入った鞄がひとつ置いてあるだけのきれいな状態だ。あちこちに目を走らせているので警戒しているのかもしれないが、何もないのだから何も見つけられはしない。
「シャツ、洗いますので脱いでくださいね」
「ああ……」
彼はどこか躊躇いがちにシャツのボタンに手をかけると、動きを止めた。
「なあ、悪いんだけど向こうを向いててくれるか？　同じ男とはいえ、そんなに熱心に見つめられると落ち着かない」
「あっ、すみません」
ジョンは素直に背を向けたものの、すぐに後悔する。
男色相手に軽率すぎた。細身ながらもしっかりと筋肉がついている彼なら、ひょろっこい非力なジョンなど簡単に組み伏せられる。背後からなら口をふさぐのも容易だ。そうなれば助けも呼べないまま体を暴かれてしまう――。
「脱いだぞ」
背中越しの声にビクリとした。
それでも何でもないかのような素振りで向きなおると、いきなり上半身裸の彼から脱いだシャツを放り投げられて、あたふたと受け取る。どうやら襲うつもりはなかったようでひそかにほっとした。
「では、洗ってきますね」
ニコッと人好きのする笑みを浮かべて応じると、いよいよ心の準備をしつつ扉のほうに向かう。ここからが正念場だ。彼に背を向けたまま扉のまえでそっと足を止め、そして思いっきり息を吸い――。
「やめてください！！　許してくださいっ！！　ああーーーッ！！！」
全力の悲鳴を上げる。
同時に自分の着ているシャツを両手で引き裂き、不規則に扉に体当たりして乱暴な音を立てると、叩きつけるようにそれを開け放って飛び出した。そのまま階段を駆け下り、驚く男性従業員の背中にまわりこんで縋り付く。直後、リチャードが上半身裸のまま必死に追いかけてきた。
「助けてください！　あのひとの服を洗ってあげようと脱いでもらったら、いきなりベッドに押し倒されてシャツを破かれて、もうすこしで襲われるところだったんです！」
「俺は何もしていない。こいつが急に一人芝居を始めたんだ」
「嘘です！　嫌だって言ったのに、押さえつけてキスして体をまさぐってきたじゃないですか！　僕が隙をついて逃げ出さなかったら強姦されてました！」

彼はわずかに眉をひそめて口を閉ざした。どうすればいいかわからなくて苦慮しているのだろう。いくら否定したところで、どちらに信憑性があるかなど状況から一目瞭然である。なのに――。
「それはおかしいですね」
背後から涼やかな声が上がった。
怪訝に振り返ると、すこし離れたところに彼の婚約者である少女が座っていた。彼女は冷たく怜悧なまなざしでジョンを見据えたまま、椅子からすっと立ち上がる。
「わたしがここで待っていることも、宿の方がここにいらっしゃることも、リック様はご存知でした。それなのに軽率に襲ったりするでしょうか。悲鳴も物音も丸聞こえなくらい近い部屋なのに」
「それはっ……あのひとが男色のケダモノだからです！　我慢できなかったんです！」
思わぬ指摘に焦り、ジョンは後ろのリチャードを指差して言い募る。稚拙な反論だという自覚はあるが、とっさのことでそれしか思いつかなかったのだ。やはりというか彼女の顔色は変わらなかった。
「リック様が男色かどうかは存じ上げません。ですが、いずれにしてもそのような無体を働く方ではないと、わたしは信じています」
「ぐっ……」
形勢は明らかにジョンのほうが不利である。だからといってここで引き下がるわけにもいかない。じわじわと額に汗がにじんでいくのを感じながら、どうにか頭を働かせようとしていると。
「ジョン！　プランＢよ！！！」
どこからかアンナの声が響いた。
一瞬、何を言っているのかわからなかったが、すぐに思い出した。あんなことはしたくないしするつもりもなかった。でも――グッと歯を食いしばり、ほとんどやけっぱちで婚約者の少女に突進していく。
ごめん！！
彼女の衣服を破こうと胸元に大きく手を伸ばした、その瞬間――腕を取られて視界がまわった。そして何が起こったのかわからないまま、激しい音とともに背中側を打ち付けられた。
「うっ……」
顔をしかめてうめきながらゆるくまわりを見まわして、ようやくテーブルや椅子の上に投げ飛ばされたのだと理解した。信じられないが、あのふわふわした髪の華奢で可愛らしい少女に。
「起きろ」
ジョンの二の腕を掴んで冷ややかにそう命じたのは、見知らぬ青年だった。
返事をする間もなく無理やり引き立たせられて、後ろ手で拘束される。打ち付けられたところがまだジンジンと痛むものの、骨は折れてなさそうな感じだ。内出血くらいですむのではないかと思う。
「痛っ！　乱暴にしないで！！」
耳をつんざくような悲鳴はアンナのものだ。

ハッとして振り向くと、彼女も自分と同じように後ろ手で拘束されていた。かなり抵抗したのか髪が乱れている。ジョンとしては彼女だけでも逃げてほしかったが、もうどうにもならない。

しかし捕まったときのことまでは考えていなかった。いまからでは彼女と話を合わせることもできない。ジョンとしてはポートランド家に迷惑をかけたくないので、素性は隠したいのだが——。

「おまえには見覚えがある。ロゼリアの侍女だな。俺を陥れるよう命じられたか」

「……」

隠すまでもなく知られていた。

そういえばリチャードはかつてロゼリアと婚約していたのだ。当然ながら専属侍女の顔くらい目にしていただろう。アンナは覗き込んできたリチャードから顔をそむけるが、いまさらもう遅い。

「来い」

拘束された二人の身柄はリチャードたちから衛兵に託されて、詰所と思われる場所に連行された。部屋は別々だ。連行されるときも、連行されてからも、二人が言葉を交わすことは許されなかった。

「あの、アンナは悪くないんです。だから……」

「後ほどリチャード様に申し上げろ」

アンナだけでも助けたくて訴えてみたものの、取り付く島もない。

ジョンは拘束されたままひとり部屋に残される。別室の彼女がどんな扱いをされているのか心配だが、悲鳴や物音のようなものは聞こえてこないので、すくなくとも暴力は受けていないのではないかと思う。

空腹を感じ始めたころ、ふいに勢いよく扉を開けてリチャードが入ってきた。彼は簡素な椅子に座るジョンを冷ややかに一瞥すると、机をはさんだ向かいにある同じ椅子に荒っぽく音を立てながら座った。

「名前、年齢、身分を明かしてもらおう。言っておくが、隠し立てはためにならないぞ」

「……ジョン、十八歳、ポートランド家の従僕です」

アンナがロゼリアの侍女だと知られている以上、隠しても無駄だろう。躊躇する気持ちはあるものの正直に話すしかなかった。

「どうしてあんなことをした？」

「あなたの結婚を潰せとロゼリア様に命じられました」

「それで君たちはただ従っただけというわけか」

「主の命令には逆らえません」

「人を殺せと命じられても粛々と従うのか？」

「それ、は……」

そう、リチャードの結婚を潰せと命じられたという話も、最初に聞いたときは止めなければならないと思っていたのだ。盲目的に従うべきではないとわかっていたのだ。それなのに——。

「あなたがいけないんだ！」

胸のうちで渦巻いていた怒りがふくれあがって爆発した。彼を睨めつけ、後ろ手で拘束されたまま噛みつかんばかりに前のめりになる。
「男色のくせに幸せになろうだなんて間違ってる！　それもまだ若い娘を利用して！　不幸にして！　かわいそうだと思わないのか！　こんな非人道的な結婚は潰さなきゃいけないんだ！！！」
「……大きなお世話だな」
リチャードはわずかに眉をひそめて吐き捨てると、鷹揚に腕を組んだ。
「そのせいでポートランド家は罰せられることになる。使用人に命じて公爵家を陥れようとしたんだ。下手したら領地没収や爵位剥奪もあり得るかもな」
「そ……んな……！」
ジョンの顔から一気に血の気が引いた。
ポートランド家が責任を問われるかもしれないとは思ったが、まさかここまでとは思わなかった。いつかグレアムに恩返しをするために働いてきたはずのに、どうしてこんなことに――。
「君たちの処分は追って連絡する」
リチャードは冷ややかに告げて席を立ち、退出した。
狭く殺風景な部屋で、拘束されたままひとり椅子に残されたジョンは、ただ呆然とうなだれることしかできなかった。

翌日、ジョンとアンナはポートランド家に移送されることになった。
処分についてはまだ何も聞かされていない。
怖くてたまらないが、それはアンナも同じようでひどく顔をこわばらせている。もう会話することは禁止されていなかったものの、ごめんと言い合ったきり二人とも無言で馬車に揺られていた。
ポートランド家に着くと、待ち構えていた家令に書斎へ行くよう命じられた。そのまえに彼にも謝ろうとしたものの、事務的に拒否される。まずは主であるグレアムにということのようだ。
「申し訳ありませんでした！！！」
書斎に入り、グレアムの姿を目にするなりジョンは土下座をした。隣ではアンナも同じく土下座をしている。いまの自分たちにできるのはこのくらいしかなかった。
「座りなさい」
静かに、いつもと変わらない落ち着いた声音でグレアムが言う。
それでもとても彼と目を合わせることはできず、視線を落としたままアンナとともにソファに腰を下ろした。向かいにはグレアムとロゼリアが並んで座っている。
「ジョン、アンナ」
ゆっくりと重々しく名を呼ばれると、グッと奥歯を食いしめつつおそるおそる顔を上げる。グレアムはいつもの無表情だったが、見慣れているはずのそれがいまはとても怖く感じられた。けれど――。
「今回の件は、ウィンザー卿の温情により不問に付された」

「えっ？」
　予想外の言葉にきょとんとしてしまった。
　それでもグレアムは淡々とつづける。
「ただし、君たちには主であるわたしから五日間の謹慎を命じる。この程度ですませるのはロゼリアにも責任があると判断したからだ。ウィンザー卿がお許しにならなければ、我がポートランド家は取りつぶされていたかもしれない。君たちがしでかしたのはそういうことだと理解してほしい」
「はい……本当に申し訳ありませんでした」
「わたしたちがいつも正しい命令を下すとは限らない。もちろん正しくあろうとはしているが、人間だから間違うこともある。今後、不当な命令を受けたのではないかと思ったときには、遂行するまえに必ず家令や執事に相談しなさい。決して自分たちだけで判断することのないように」
　その話を真摯に真剣に噛みしめながら、ジョンは深く頭を下げた。
「……アンナ」
　今度はロゼリアがそう声をかけてきた。いつもと違い、どこか申し訳なさそうで遠慮がちな響きが感じられる。ジョンは顔を上げたが、呼ばれた当人であるアンナはまだ頭を下げたままだった。
「わたくしはあなたに謝らなければなりません。命令のつもりはなかったけれど、そうとられてもおかしくないことを口にしました。あなたには申し訳ないことをしたと心から反省しています」
「違うんです！」
　アンナはパッと顔を上げて訴えた。
「ロゼリア様が本気で命じたわけではないということは、わかっていました。それでもロゼリア様にひどい仕打ちをしたリチャード様が許せなくて、だから結婚を潰そうとしたのはわたし自身の意思です」
　そう告げると、一拍の間をおいてさらにつづける。
「ジョンも悪くありません。わたしが何も言わずにカーディフの街に連れて行って、ロゼリア様の命令だと嘘をついて手伝わせました。ジョンは必死に止めようとしてくれたのに無理やり……」
「無理やりではありません」
　ジョンはとっさに割り込んだ。自分の心情まで明らかにするつもりはなかったが、彼女ひとりを悪者にしたまま知らんぷりはできない。緊張のせいか血の気が引いていくのを感じながら、あらためて口を開く。
「僕が結婚を潰そうとしたのは僕自身の意思です。確かに最初は止めようとしたんですけど、リチャード様が男色だと聞いて感情が昂ぶって……しかも顔があいつと似ていたから当時のことを思い出して……」
　話しているうちに、いつしかぽろぽろと涙がこぼれ落ちていた。
　あのときのことで泣いたのはこれが初めてだ。いまさらどうしてと思うが、涙腺が壊れてしまったかのように涙が止まらない。当惑した視線から逃れるように両手で顔を覆いながら上体を伏せた。

「すまなかった、ジョン……気付いてやれなくて」
　申し訳なさそうなグレアムの声に、ジョンはそのままの体勢でふるふると首を横に振った。グレアムには何の非もない。自分でさえ、こんなトラウマになっていたなんて知らなかったのだから。

　みんな何も言わずに待ってくれた。
　ひとしきり泣いて落ち着くと、濡れた頬を手で拭いつつおずおずと顔を上げる。グレアムはいつもと変わらず無表情のままだったが、ロゼリアとアンナは気遣わしげな顔でジョンを見ていた。
「すみませんでした。もう大丈夫です」
　そう言い、ぎこちないながらも笑ってみせる。
　それでもまだアンナは困惑したような怪訝な面持ちをしていた。そういえば彼女はジョンの過去を知らないのだ。そもそもどうして泣いたのかさえわかっていないのだろう。だから――。
「アンナにはあとでちゃんと話すよ」
「……いいの？　　無理してない？」
「うん」
　中途半端に聞かされたままではアンナも気になるだろうし、どうせなら自分の口から伝えたい。それがジョンの望みだ。これまで誰にも話そうとしたことがなかったけれど、アンナにならきっと話せると思う。
　そんな二人を見て、グレアムはこころなしかほっとしたように息をついた。

「ところで、ウィンザー卿の名誉のためにひとつ言っておくと、彼は男色ではないそうだ」
「……えっ？」

伯爵家の堅物当主は元同級生から離れられない

アーサー・グレイは、同級生のリチャード・ウィンザーが嫌いだった。

彼はウィンザー公爵家の嫡男である。

公爵家というのは王家に連なる血筋で、他の貴族とはいささか性質や役割が異なっている。国が安泰であるためには、公爵家が安泰であることが重要になってくるのだ。それゆえに責任が重い。

なのに彼はその責任を軽視している。

公爵家の人間ともなれば公の場に出ることも多いのだが、彼はごくたまにしか姿を現さない。未成年のうちだけならまだしも十六歳で成人になってもだ。それはすべて彼個人のわがままだという。

学業においても真摯に取り組んでいる姿勢が見えない。自主的に勉強している様子はなく、授業中でもぼんやりと窓の外を眺めていることが多い。ときには目をつむって微睡んでいることさえある。

「いまは自習の時間だ。居眠りをしていいわけじゃない」

「んだよ……誰にも迷惑かけてないんだから別にいいだろう」

「いいかげん公爵家の後継者たる自覚を持ったらどうだ」

「おまえ、ほんといつもそればっかりだな」

そんなやりとりは日常茶飯事だった。

課題の提出もいつも期限ギリギリだ。催促する役目はたいていアーサーに押しつけられる。誰も未来の公爵の不興を買いたくはないのだろう。先生も級友もみんな及び腰なのが腹立たしい。

「君はどうして期限ギリギリにしか提出しないんだ」

「期限には間に合ってるんだからいいだろう」

「催促されなければ提出しないつもりじゃないのか？」

「まさか」

アーサーが苦言を呈すのは、彼を公爵たるにふさわしい人物にしなければと思ったからだ。級友として、貴族として、国民として――頼まれもしないのに勝手に使命感にかられていたのである。

もっとも成績は彼のほうが良かった。いつも学年一位か二位で、アーサーはだいたい五位前後で一度も勝てたことがない。武術と剣術も彼が群を抜いて優秀である。ついでにいえば見目もいい。

そんな恵まれたものを持っているにもかかわらず、何にも関心を示さず、いつも醒めた目をしていることがひどくもどかしかった。
決して孤立しているわけではない。多くのひとに囲まれて笑みを浮かべてはいるが、誰にも心を許していないように見えるのだ。ときどき避難するように穴場の木陰でひとり寝転んでいた。

八年の学生生活を経て、雲ひとつない快晴の日に卒業を迎えた。
首席はリチャードである。これが不正や忖度でなく実力によるものだということは、同級生であればみんなわかっていただろう。本人は望んでいなかったようで面倒そうにしていたけれど。
それでも卒業生総代の辞は立派なものだった。内容もだが、それを堂々と述べる彼自身の姿に惹きつけられてしまった。さすが公爵家に生まれた人間だけのことはあると、感心せざるを得ない。
式が終わると、彼は中庭で大勢のひとに囲まれていた。
それを横目で見ながら通りすぎようとしたところ、彼がこちらに気付き、すぐにまわりのひとたちに断ってひとり駆け寄ってきた。めずらしく屈託のない表情をしているように見える。
「アーサー、いろいろ世話になったな」
「自覚があったのか」
急に殊勝なことを言われて軽く驚きながらそう返すと、彼はおかしそうに笑った。
つられてアーサーもかすかに笑みを浮かべた。これからはもうあまり顔を合わせることもなくなるし、苦言を呈することもなくなる。そう思うと、すこしだけ感傷的な気持ちになった。

卒業後、アーサーは領地に戻った。
領地経営をみっちり叩き込みたいという父親の意向である。アーサーは後継者として手伝いながら学んでいった。そしてほどよい頃合いに親の決めた相手と結婚し、三人の子供にも恵まれた。
妻のアリシアとは政略結婚だが、相性が合っていたようであたたかい家庭を築けていると思う。夫婦として互いに尊重し合いながら子供たちを慈しむ日々に、かつてない幸せを感じていた。

「それでは王都に？」
文官として働かないかと王宮から打診があり、それを承諾した旨を告げると、妻のアリシアは驚いたようにそう聞いてきた。アーサーは静かに頷く。
「先方が急いでいるので来週には行かなければならない。それで、できれば君と子供たちも一緒に連れて行きたいと考えている。まだ子供たちが幼いし、君には少なからず負

担をかけることになると思うが……」
「もちろん一緒に行きますわ」
　迷う素振りもなく彼女はにこやかに即答した。
　家族一緒に暮らしたいという気持ちは彼女も同じなのだろう。それでも急だったにもかかわらず笑顔で承諾してくれたことはありがたく、頭の下がる思いだった。

　翌週から、家族ともども王都のタウンハウスで暮らし始めた。
　急に環境が変わって子供たちがどうなるかと心配していたが、すぐに馴染んだ。特に第一子のシャーロットは街が好きなようで、使用人の買い出しにもしょっちゅうついていくという。
　アーサーは予定どおり王宮で文官として勤めている。しばらく人手不足だったので仕事がたまっていたらしく、かなり忙しくはあったが、それでも夜遅くまで働かされるようなことはなかった。

「え、アーサー？！」
　ある日、文官としての仕事で騎士団本部に足を運んだところ、ふと驚いたように名前を呼ばれた。ありふれた名前なので自分のことなのか不明であるが、反射的に声のほうに振り向く。
　そこには騎士服姿のリチャードがいた。
　思わず目を見開くが、そういえば彼は卒業したら騎士団に入るという話だった。公爵家の嫡男としては異例のことで、当時はかなり話題になったはずだ。いまのいままで忘れていたけれど。
「ウィンザー侯爵、お久しぶりです」
「いや、リチャードでいいよ」
「そういうわけにはまいりません」
「相変わらずだな」
　リチャードはそう言って苦笑する。
　現在、彼は従属爵位であるウィンザー侯爵を儀礼称号として名乗っている。学生のときは階級など関係なく対等に話すことになっていたが、社会人となったいまはそういうわけにもいかない。
「おまえ領地に帰ったって聞いたけど」
「はい、ですが王宮に勤めることになりまして」
「なるほどな」
　騎士団にも王宮の人手不足の影響があったという話なので、彼もそのあたりのことは聞き及んでいたのだろう。
　流れで妻子のことも尋ねられた。隠すことでもないので聞かれるまま答えるが、こういう話を穏やかに彼としていることが何か不思議だった。それだけ二人とも大人になったということかもしれない。

「あなたは……」
「ん、ああ、俺は先日婚約したところ」
「それはおめでとうございます」
　彼にも聞いてみたところ、思いがけない答えが返ってきて表情が緩んだ。
　公爵家は何より血筋を絶やさないことが求められている。なのにその嫡男である彼が結婚を忌避しているようだったので、学生時代は勝手に気を揉んでいたのだ。あとは彼個人の幸せにもつながるよう願うばかりである。

「すみません、失礼ですがグレイ卿でしょうか？」
　会話が途切れたところで、事務方と思われる男性がアーサーに声をかけてきた。自分を知っている人間がそういないはずのところで名指しされ、思わず怪訝な顔になる。
「そうですが……」
「さきほど近所の子供がこれを持ってきまして。どうやら見知らぬ男から騎士団本部に届けるよう頼まれたらしいのですが」
　差し出された封筒には『グレイ卿』と宛名が記してあった。
　おそらく騎士団本部に入るところを見ていたのだろうが、それにしても不可解だ。封筒を裏返してみても差出人の名前は見当たらないし、封蝋の紋章らしきものにも見覚えはない。けれど――。
「アーサー、いますぐ開けろ！」
「えっ、どういうことでしょうか？」
「いいから開けろ！！！」
　リチャードが血相を変える。
　戸惑いながらもアーサーは言われるまま封蝋を破り、二つ折りの手紙らしきものを取り出して開くと、冒頭の文章に目を落とす。それはいわゆる脅迫状だった。娘のシャーロットを誘拐したから身代金を払えという――。
「貸せ！」
　血の気が引いたまま呆然と立ちつくしていると、リチャードがひったくるように脅迫状一式を奪い取った。ひととおり目を通したのち、怖いくらい真剣な顔でアーサーを見据えて問いかける。
「アーサー、おまえ身代金は用意できそうか？」
「領地に帰れば……ですが、三日で用意できるかは……」
「だったら俺が個人的に貸してやる」
「えっ」
　当然ながら気軽に借りられるような金額ではない。ごく親しい相手であっても躊躇してしまうだろう。まして久方ぶりに再会したばかりの元同級生という、交流さえなかった相手になんて。
「いえ……それ、は、さすがに……」
「他に当てはあるのか？」
　そう言われて考えてみるが、それだけの金額をすぐに用意できるひとなどそういない

だろうし、そもそも王都に来て間もないので交流のある知人からしてあまりいない。だとしたら――。
「お言葉に甘えさせていただきます」
　気は引けるが、娘の命がかかっているのだからなりふり構っていられない。
「おまえは家に帰って状況を確かめてこい」
「わかりました」
　そう答えてすぐに自宅に向かう。
　リチャードに命じられて事務方の男性もついてきた。名はレオという。冷静ではいられないかもしれないので、事情を知っている人間がいてくれるだけでありがたい。
「あなた！　　シャーロットがいなくなったみたいなの！」
　邸宅に入るなり、妻のアリシアが顔面蒼白でそう訴えてきた。
　やはりシャーロットは誘拐されていたようだ。焦燥と恐怖と不安と怒りでどうにかなりそうだが、自分がいまここで取り乱すわけにはいかない。
「話を聞かせてくれ」
「侍女のマヤがシャーロットを連れて街へ買い物に行ったんですけど、彼女ひとりが路地裏で頭を殴られて気絶していたらしくて……シャーロットの姿はあたりを探しても見当たらなかったみたいなの」
　おそらくそのときに誘拐されたのだろう。侍女を殴り倒してまでということは、最初からシャーロットを狙っていたとしか思えない。それもグレイ伯爵家の娘であることを知ったうえで。
「マヤはいまどこに？」
「病院です。さきほど執事が向かいました」
「わたしも話を聞いてこよう」
「お願いします」
　アリシアの双眸はひどく不安そうに揺らいでいた。そんな彼女に追い打ちをかけるのは気が咎めるが、黙っているわけにもいかない。アーサーは覚悟を決めると一呼吸してから切り出す。
「実は、シャーロットを誘拐したという脅迫状が届いている」
「えっ？」
「身代金の受け渡しは三日後と指定されているから、それまでは無事だろう。身代金は借りられることになったし、騎士団も動いてくれている……シャーロットは必ず無事に戻ってくる」
　最後は力強く断定した。
　アリシアはいまにも泣きそうに顔を歪ませたが、どうにかグッと唇を引きむすんでアーサーを見つめ返すと、気丈に頷く。こぼれそうなほどの涙をその目にたたえながら。

「もっ、申し訳ありません……取り返しのつかないことを……」
　病院に行くと、ちょうど侍女のマヤが目を覚ましたところだった。かなり出血したとのことで頭には白い包帯が巻かれている。最初はまだぼうっとしていて状況も理解でき

ていないようだったが、こちらから説明すると記憶がよみがえってきたらしく、真っ青になって震え出した。
「謝罪よりもまずは話を聞かせてほしい。何か覚えていることはないか」
「はい……いきなり後ろから何かで頭を殴られたので、顔は見ておりません。ただ、倒れたときに船乗りのような靴が見えました。潮のにおいもかすかにしたような気がします」
　これが手がかりになればいいが――。
　何か思い出したら騎士団本部まで連絡するよう言い置くと、病室の隅に控えていた執事にマヤのことを頼み、同行していたレオとともに急いで騎士団本部へ向かった。

　騎士団本部では、誘拐事件の捜査会議が行われていた。
　リチャードも参加していたが、レオが会議の邪魔にならないよう静かに呼びに行ってくれた。すぐさま抜けてきた彼にさっそく侍女から聞いた話を伝えると、彼は納得したように頷く。
「やはり港だ」
「えっ？」
　思わず聞き返すと、すこし躊躇う様子を見せながらも教えてくれた。この一年のあいだに類似の誘拐事件が三件あったこと、今回の誘拐事件も含めて同じ組織の犯行と思われること、三件で得られた情報を総合して港に目星をつけていたことを。
「それで、過去三件の事件はどうなったのでしょう？」
「……最初の二件は身代金を払って子供は無事に戻ってきた。ただ、騎士団が知ったのは身代金の受け渡しが終わってからだ。最後の一件は期限までに身代金を用意できずに騎士団を頼ってきた。それで身代金を受け取りに来た男を捕らえたが、監禁場所を吐かせようとしたところ自害され……子供は遺体で発見された」
　アーサーは息を飲んだ。わかってはいたつもりだが、その危険があることをまざまざと思い知らされた。目の前が暗くなるのを感じてふらりとする。
「そ、れは……身代金さえ払えば、無事に戻ってくると……」
「身代金はいま用意させている。ただ、騎士団としては素直に身代金を払うだけというわけにはいかない。これ以上の犠牲者を出さないために組織を壊滅する必要がある。もちろん娘の身の安全は最優先に考えるが、状況によっては身代金の受け渡し前に作戦行動をとるかもしれない」
　リチャードがつらそうな顔をして現実を告げるが、すぐには受け止められない。
　これ以上の犠牲者を出さないためにというのは理解できるし、王国や王都を守る騎士団としてはそれが正しいのだろうが、親としてはすこしの危険も冒したくない。身代金を払えば無事に戻ってくるのであればそうしたい。けれどそれは自分たちのことしか考えていないということで――。
「シャーロットは必ず助ける」
　逡巡したまま承諾も反対もできずに奥歯を食いしめていると、彼はまっすぐにアーサーを見つめてそう断言した。

アーサーはそのまま騎士団本部に留まることになった。
とはいえ捜査会議には入れないので来客用の部屋で待つだけだ。たびたびレオが姿を見せてはこまごまと世話を焼いてくれたが、せっかく用意してくれた軽食はあまり喉を通らなかった。
そのうちウィンザー家の執事が身代金となる金貨を届けてくれた。それが手元にあるだけで安心感が違う。これほどの大金をこんなにも早く用意してくれた彼らには、いくら感謝してもしきれない。
夜になると出入りが激しくなり慌ただしい気配を感じた。気にはなるが、状況については聞いても答えられないとあらかじめ言われている。アーサーにはただ祈ることしかできなかった。
そのまま一晩が過ぎる――。
ずっと一睡もせず、胃がキリキリするのを感じながらソファに座っていた。用意してくれた毛布はきれいに折りたたまれたままだ。いつ何が起こるかもわからないのに眠れるわけがない。
「グレイ卿！」
空が白み始めたころ、レオが慌ただしくバタンと扉を開けて飛び込んできた。ハッとはじかれたように立ち上がったアーサーに向かって、髪を乱したまま声を張り上げる。
「娘さんが救出されました！　無事だそうです！！！」

いてもたってもいられず騎士団本部のまえで待つ。
シャーロットは港から馬で連れ帰るところだという。手足を縄で縛られていたので若干の擦過傷はあるが、それ以外は何ともないらしい。けれど自分の目で確かめるまではとても安心できなかった。
朝靄が消えるころ、数頭の馬がゆっくりとこちらに向かってくるのが見えた。どうやら白馬に乗っているのがリチャードのようだ。そして、彼のまえに乗せられている小さな子供が――。
「シャーロット！！！」
到着するのを待っていられずに我を忘れて駆け出した。リチャードは白馬を止め、眠っているシャーロットを片腕に抱えて下りると、必死に両手を伸ばしたアーサーに横抱きにして渡す。
瞬間、アーサーの視界がにじんだ。
そのぬくもりで、重みで、ようやく娘が無事に生きて戻ってきたことを実感した。全身の力が抜けそうなほど安堵して膝から崩れ落ちる。それでも娘はしっかりと腕に抱いたまま離さない。
「ありがとうございます。本当になんとお礼を言ったらいいか……ああ……」
「俺は騎士として仕事をしただけだ」
リチャードはあたりまえのようにさらりと受け流すと、じゃあなと軽く手を上げ、馬を引きながら仲間と騎士団本部のほうへ足を進める。その背中にアーサーは精一杯の気

持ちをこめて頭を下げた。

　数日後、妻と子供たちは領地に帰した。
　今回の誘拐事件で王都に置いておくことが心配になったのだ。必ずしも王都だからというわけではないのだろうが、子供たちに起こりうる危険は可能なかぎり回避したい。妻も同じ気持ちだった。
　領地においても、グレイ家の敷地外に子供たちを出さないよう妻に頼んだ。過保護かもしれないが、大人と一緒にいても誘拐された事実があるのだから、そうでもしないと安心できなかった。
　ただ敷地はかなり広く、小規模ながらも山や川や森などの自然があるし、広場で乗馬もできるようになっているので、遊びには事欠かない。少なくともあまり窮屈な思いはしないですむはずだ。
　遊び相手には従兄弟、つまりアーサーの弟たちの子供を考えている。いまのところ男の子ばかりなのが難点だが。みんな遠くないところに住んでいるので、ときどき来てもらうことは可能だろう。
　そして、いつか外に出るときのために護身術を習わせるつもりだ。成長に合わせてすこしずつ――。

　翌々日、ひとりの男性がアーサーを尋ねてきた。
　彼は広大な領地を有するポートランド侯爵家の嫡男で、名をグレアムという。アーサーとは同年齢で、互いの領地が隣接しているということもあり、友人というほどではないがそれなりに交流はあった。
「それで、どういったご用件でしょうか」
「いますぐ金を借りたい」
　まさか裕福なポートランド家の人間からそんなことを頼まれるとは思わなかった。いくらなのか聞いたところ、アーサーでもすぐに出せるくらいの金額だったが、だからこそなおさら何があったのか事情が気になる。
「理由をお伺いしても？」
「……先日、恩人夫妻が馬車の事故で亡くなり、その息子が借金の形に売られそうになっている。今日の午後四時までに相手方に返済しなければならないが、手持ちではすこし足りなかった。領地に戻っていては間に合わないのであなたに縋った次第だ」
　葬儀に出たとき、息子の叔父夫妻が話しているのを耳にしたという。借金の相手はカドガン伯爵だ。少年を性的に好んでいて孤児に手を出しているとか、良くない噂をささやかれる人物である。
「そうなると、本当にただの事故だったのか疑わしいですね」
「ああ……だが時間がないので、ひとまず借金を返済して彼を助けたい」
「わかりました」
　アーサー自身も誘拐事件のときに金を借りた。結局、使うことなくそのまま返却した

のだが、借りられたことでどれだけ精神的に助かったかわからない。だから、自分が金を貸すことで助けられるのならそうしたいと思った。
「助かる。来週には返済する」
　金貨を用意すると、グレアムはそう言い残して屋敷をあとにした。

　翌週、返済に訪れた彼に話を聞いたところ、恩人の息子は無事に助けることができたそうで、いまは彼の屋敷に住まわせているという。関わったひとりとして上手く事が運んだことに安堵した。
「それで、その子のことはどうするおつもりですか？」
「養子先を探そうと思っていたが、よそに行きたくないと言うので悩んでいる。カドガン伯爵のところで怖い思いをしたせいだろう。一時的なものかもしれないし、いまはあの子が落ち着くのを待っているところだ」
　アーサーは頷く。
　実直で思慮深い人物なので心配はしていなかったが、この答えを聞いて、あらためて彼に任せておけば大丈夫だと思うことができた。きっとその子にとって望ましい結論を出してくれるに違いない。

「アーサー、久しぶりだな」
　慌ただしさが落ち着いたころ、王宮の仕事場に突然リチャードがやってきた。
　誘拐事件のあとも聴取などで会っていたので久しぶりという気はしないが、言われてみれば十日くらいは顔を合わせていなかったかもしれない。自席から立ち上がると軽く会釈して尋ねる。
「お約束はなかったと思いますが、いかがしましたか？」
「こっちに用があったから寄ってみたんだ」
　彼がここに来たのはアーサーの知るかぎり初めてだ。同僚の若い女性たちは色めき立っているし、上司は当惑している。公爵家の跡継ぎが前触れもなくふらっと訪れたら、そうもなるだろう。
「こちらへどうぞ」
　内心で嘆息しながら隣の応接室へ通した。
　そこは応接セットがあるだけの簡素な部屋である。仕事の打ち合わせには基本的に会議室を使うし、賓客向けには共用の立派な応接室もあるので、ちょっとした来客のときにしか使わないのだ。
「別に応接室でなくてもよかったのに」
「申し訳ありません、こちらの都合です」
「まあ二人っきりのほうがいいか」
　リチャードは軽く笑いながらそう言うと、向かいに腰を下ろしたアーサーに優しい目を向ける。
「元気そうでよかったよ」

「ええ、もうだいぶ落ち着きましたので」
「このまえは顔色が悪かったからな」
　気付いていたのか――。
　確かに誘拐事件から数日は心労が響いたのか体調が優れなかった。睡眠不足もあったかもしれない。妻子を領地に帰すための準備に追われていたのだ。それでも彼のまえではいつもどおりに振る舞っていたつもりなのに。
「ご心配をおかけしました」
　そう応じて、座ったまま丁寧に頭を下げる。
「このとおり体調も戻りましたので、今度、何かお礼をいたします」
「礼は不要だ。あくまで騎士団としての仕事だから気にしなくていい」
「でも身代金は個人的に用意してくださったのですよね」
「まあ、それは……」
　リチャードは困惑したように目をそらせて言いよどみ、そのまますこし考え込むような素振りを見せたあと、再び視線を上げる。
「じゃあ、一緒に食事に行くってのはどうだ？」
「……あなたがそれでよろしいのでしたら」
「店は俺が決める。明日の夜は都合がつくか？」
「問題ありません」
　ただ、そんなことで果たしてお礼になるのか――。
　一抹の不安を感じつつも、本人が望むものを拒否するわけにもいかず、彼に仕切られるまま約束を交わしてしまった。

　翌日、リチャードに連れられて店に向かったのだが、そこは酒場だった。
　公爵家の人間にはおおよそ似つかわしくない庶民的なところだ。うるさいくらい賑やかだが、治安は悪くなさそうに見える。おそらく騎士団の同僚たちと飲みに来たりしているのだろう。
「こういうところは初めてか？」
「ええ……」
「安心しろ。意外と味は悪くない」
　リチャードはニッと口元を上げると、店員を呼んでメニューを見ながら適当にあれこれと頼んでいく。ほどなくしてジョッキが運ばれてきて乾杯した。そのうちに料理も次々と運ばれてきて二人で食べていく。
　アーサーは何もかもが初めてだった。いかにも庶民的な料理も、大雑把な大皿の盛り付けも、ジョッキで飲む酒も、陽気で騒々しい店内も。戸惑う気持ちはありつつも料理は素直においしいと思えた。
「そういえば、おまえ妻子を領地に帰したんだって？」
　お互いの仕事のことで軽く雑談したあと、リチャードがジョッキを片手にふと思い出したようにそう言った。どうしてそんなことまで知っているのだろうと驚いたものの、表情には出さずに頷く。

「ええ……このまま王都に置いておくのはやはり心配でして」
「まあな。でも帰すまえに言ってほしかったよ。一度きちんと会いたかった」
「申し訳ありません」
　言われてみれば、恩人の彼に何も言わないままというのは失礼だった。余裕がなくてそこまで頭がまわらなかったのだが、本来なら妻とともに挨拶くらいは行ってしかるべきだろう。ただ――。
「シャーロットは元気か？」
「ええ、とても元気にしています」
「それならよかった」
　ふっとやわらかい笑みを浮かべるリチャードを見て、心苦しくなる。
　彼女は元気にしているが、どうやら誘拐された事実を忘れているようなのだ。それほどショックだったということだろう。だから、恩人がいるということさえ話すわけにはいかなかった。

　それからリチャードはたびたび仕事場に訪れるようになった。
　ただ長くは居座らず、すこし言葉を交わしただけで帰っていくのでそう支障はない。おそらくついでに寄っているだけなのだろう。同僚たちもいつしか慣れたようであまり気にしなくなっていた。

　しかし――その日、リチャードは応接室で話がしたいと言ってきた。
　最初に来たときのように簡素な応接室に通して向かい合わせに座る。ただ、そのときとは違って彼はひどく真面目な顔をしていた。アーサーもつられるように緊張して落ち着かない気持ちになる。
「先日、俺は婚約を解消した」
「えっ？」
　思わず聞き返した。聞こえていなかったわけではないが、あまりにも唐突でにわかには受け止められなかったのだ。しかし彼は何でもないかのように淡々と話をつづける。
「公表は明日だ。そのまえにおまえには伝えておきたくて」
「そう、ですか……何と申し上げたらいいのか……」
「そんな顔するな。別にショックを受けたりはしていない」
　リチャードはクレランス侯爵令嬢のロゼリアと婚約していた。
　両家の親が決めた縁談とのことだが、誰もがうらやむ美男美女でとてもお似合いだと評判だった。実際、アーサーが数週間前に夜会で二人を目撃したときも、リチャードがそつなくエスコートし、彼女も誇らしげに受けていて、これといって問題はなさそうに見えたのに――。
「何か、家のご都合で？」
「悪いが理由は話せない」
「申し訳ありません」

どうにも信じがたくて思わず聞いてしまったが、いささか不躾だった。
ただ、やはり考えられるとしたら両家の問題ではないかということだ。二人が仲違いした程度のことで婚約解消が認められるとは思えない。あるいは二人のどちらかに結婚を取りやめざるを得ない事情が発覚したか――。
「いつか……話せるときがきたら話すよ」
リチャードは遠くに思いを馳せるかのような顔をしてそう言うと、アーサーに視線を移してふっと笑う。このときの表情を、アーサーはどうしてだかいつまでも忘れることができなかった。

翌日、予定どおりリチャードとロゼリアの婚約解消が公表された。
当然ながら、数日後の夜会ではその話題で持ちきりになっていた。理由が公表されていないことも拍車をかけているのだろう。みんな好き勝手に憶測を披露しては盛り上がっているのだ。やはり家同士の事情ではないかという説が有力なようだが、その事情については意見が分かれている。
アーサーはその話題に積極的に加わろうとはしなかったが、リチャードの元同級生だと知られているため、何か聞いていないかとあちらこちらで尋ねられた。本当に聞いていないので正直にそう答えているが、たとえ聞いていても、公表されていないものを勝手に話すことはないだろう。
ザワッ――。
ふいに空気が変わった。ざわめきがさざ波のように広がっていく。
何があったのだろうと怪訝に思いながら周囲の視線を追うと、人垣のあいだからロゼリアの姿が見えた。エスコートしているのは彼女の兄だ。まさか婚約解消した直後に現れるとは誰も思わなかっただろう。
しかし彼女はそんな好奇の視線など意に介していないかのように、堂々と背筋を伸ばして歩いている。優美な笑みさえ浮かべながら。それは前を向いて生きていくのだという覚悟の表れのように見えた。
まだ年若い女性なのに、強い――。
恥知らずだの小癪だの鉄面皮だのと眉をひそめるひともいるのだろうが、むしろ貴族の常識からすればそういうひとのほうが多いのかもしれないが、アーサーはひそかに彼女に好感を持った。

「リチャード様って本当に素敵よねぇ」
昼休憩中にあてもなく王宮内を散歩していたら、ふとそんな声が聞こえた。
振り向くと、同僚の女性二人が庭園のベンチに並んで昼食をとっていた。どちらも後ろ姿しか見えないが誰なのかはわかる。その若いほうがどうやらリチャードに憧れているらしい。
「言っとくけど、リチャード様が婚約解消したからって夢見ちゃダメよ」
「わかってるわよ……いろんな意味で分不相応だってことくらい自覚してるわ」

「ん、それもあるけど」
　知人の話なので気になるが、だからといって盗み聞きするつもりはなかったので、そのまま足を止めずに通りすぎようとしたところ――。
「リチャード様って実は男色らしいのよ」
「え、うそ？！」
　思わぬ発言に驚き、ほとんど反射的に白い柱の陰に身を隠してしまった。幸か不幸か周囲には他に誰もいない。鼓動が速くなっていくのを感じながら聞き耳を立てる。
「婚約解消もそのせいじゃないかって」
「じゃあ、どうして婚約なんて……」
「婚約してから目覚めたとか聞いたけど」
「なるほど」
　彼女たちは合間にすこしずつサンドイッチを頬張りながら、なおも話をつづける。
「でも目覚めたというより自覚したというほうが近いのかも。子供のころからずっと女嫌いだったみたいだし、女性関係も皆無のようだし、そういうお店にも行ったことがないらしいわ」
　いまはわからないが、確かに学生時代は女性関係が皆無だったはずである。女遊びは一切しないし、娼館にも決して行かないともっぱらの噂だったのだ。そのあたりに関しては真面目だなとひそかに感心していたのだが。
「でね、リチャード様はいまアーサーに懸想してるみたいなの」
「ええっ？！」
　はあっ？！
　どうして自分が――あまりにも予想外のことでわけがわからない。もしかしたら名前が同じだけで別人かもしれないと思ったが、この二人がどちらも同僚であることを考慮すると、やはり自分だろう。
「騎士団のひとに聞いたんだけど、リチャード様って自ら積極的に交流するタイプじゃないらしいのよ。苦手なわけじゃなく淡泊みたいで。なのにアーサーには自らグイグイ行ってるでしょ？」
「確かに……」
「事務方の雑用を奪ってまで王宮に来てるって話よ」
　言われてみれば、騎士団員が王宮に来るような用事はそう頻繁にないはずだ。もちろん王宮や王族の護衛にあたっていれば別だが、リチャードはそうではない。
「ふふっ、それが本当なら初めて恋をした少年みたいね」
「騎士団でも初恋なんじゃないかって言われてるらしいの。みんなこっそりと生あたたかく見守ってるみたい。だから本人は気付かれてるなんて全然わかってなくて。何かちょっとかわいいわよね」
　笑い合う二人の声を聞きながら、アーサーはひっそりと音を立てないようにその場を離れた。彼女たちの目の届かないところまできても足を止めず、そのままあてもなく回廊を歩きつづける。
　まさか、いくら何でもそんなことは――。
　男色については判然としないが、アーサーに懸想しているというのは周囲の憶測にす

ぎない。こんな何の確証もないことを安易に信じるわけにはいかない。そう自分に言い聞かせた。

「よう、元気にしてるか」
　その日もリチャードはひょっこりと王宮の仕事場に姿を現した。
　妙な憶測を聞いてしまったせいで少なからず意識してしまうが、それでも努めて普段どおりに接する。どうやら不審に思われない程度には取り繕えているようだ。彼の様子はいつもと変わらない。
「おまえ十日ほど領地に帰るんだって？」
「そんなことまでよくご存知ですね」
　ほんの数日前に上司に相談して休暇をもらったばかりなのに。思わず半ば呆れたような物言いになったが、彼は気付いているのかいないのか平然として話を進める。
「それさ、俺もついていっていいか？」
「……何か御用がおありなのでしょうか」
「シャーロットに会いたくなってな」
　それが本心なのかはわからない。ただ、いずれにしてもグレイ領の邸宅までついてくれば、シャーロットと顔を合わせないわけにはいかない。机の上で組み合わせた両手に力がこもる。
「あなたがシャーロットを救ってくれたことには、本当に心から感謝をしています。ですが……こちら側の事情で非常に申し訳ないのですが、シャーロットには会わないでいただきたいのです」
「事情？」
「シャーロットはあの事件のことをあまり覚えていないようなのです。それだけショックが大きかったのでしょう。ですから、それを思い出させるようなことは避けたいと考えていまして」
「そうか……」
　ひどく残念そうにしながらも、それなら仕方ないと一応は納得してくれたようだ。それでもただでは引き下がらないのが彼である。
「じゃあ、せめて写真を撮ってきてくれないか」
「……わかりました」
　受けた恩を思えば、写真のひとつやふたつくらいやぶさかではないが、彼がそこまで必死に要求することに何か違和感を覚えた。本当に救出した少女を気にかけているだけなのだろうか――。

「おとうさま！」
　領地の邸宅に帰るなりシャーロットが満面の笑みで駆け寄ってきた。アーサーはすぐに抱き上げ、遅れてやってきた妻や息子二人とも笑みを交わし、胸を熱くしながらただいまと告げる。

子供たちはみんな一目でわかるくらい大きくなっていたし、重くなっていた。子供の成長は本当に早い。それをこうしてありありと実感できるのは幸せだが、一緒に暮らせない現状はやはり寂しい。
「仕事を辞めたくなるな」
「さすがに早いわよ」
おかしそうにころころと笑う妻に、こちらに戻ってからの子供たちの様子を聞いたところ、敷地内だけで楽しく日々を送っているとのことだった。いまのところ街に行きたがることもないらしい。
ひとまずは安堵した。けれど成長するにつれて不満が出てくる可能性は大いにある。そうなったらどうすればいいのだろうか。そもそもいつまで禁止すればいいのだろうか。今後の不安は尽きない。
とはいえ、いずれにしてもいますぐにどうこうすべき問題ではないのだ。おいおい妻と相談しながら考えていけばいいだろう。それよりもまずは子供たちと過ごす時間を優先しようと決めた。
「シャーロット、写真を撮るよ」
「写真ってなぁに？」
「肖像画みたいなものかな」
翌日には写真技師を呼んでシャーロットの写真を撮った。ついでに妻の写真も。息子二人はまだじっとしていられないので見送ったものの、もうすこし成長したら撮れるようになるはずだ。
決して安くはない。しかしそれに見合うだけの価値は十分にあると思っている。
そもそもはリチャードに頼まれたことがきっかけなのだが、いまはアーサー自身がおおいに乗り気になっていた。家族の写真があれば、離れて暮らしているあいだの心の支えになるだろう。
「どれもよく撮れているな」
「わぁ、そっくり！」
写真が出来上がると、ローテーブルに広げて家族みんなで見ていく。
シャーロットは初めて見る写真に驚いているようだった。すぐに手にとり、凝視したり裏返したり光にかざしたりと興味津々である。一方、妻は自分の写真を目にして微妙に恥ずかしそうな顔になった。
「これ、あなた本当に持っていくの？」
「そのために撮ったからな」
反対はしないので、ただ単に照れているだけなのだろう。
写真はすべて折れないよう丁寧にファイルに挟んで鞄にしまった。それを持ってあした王都に戻る予定だ。寂しい気持ちはあるが、妻子を領地に帰したあのときほどの孤独感はなかった。

「シャーロットの写真です」
王都に戻ると、約束を果たすために騎士団本部のリチャードを訪ねた。

挨拶もそこそこに厳選した五枚を彼の執務机のうえに並べる。どれもこのうえなくかわいくてきれいで愛らしくて、彼の思惑がどうであれ、見てもらえるだけで誇らしいような気持ちになる。
「あのときよりもすこし大きくなってるよな」
「はい、元気にすくすくと育っております」
どうして写真をと思ったりもしたが、もしかしたら本当にシャーロットのことを気にかけていたのかもしれない。彼はやわらかい微笑を浮かべつつ一枚一枚しっかりと目を通していた。ただ――。
「ありがとな。五枚ももらえるとは思ってなかったよ」
「……あの……差し上げるつもりはなかったのですが」
「えっ？」
彼は困惑しているようだが、アーサーのほうこそ大いに困惑している。写真を撮ってきてくれとは言われたものの、写真をくれとは言われていないのだ。
「元気にしている姿をお目にかければいいだけかと」
「いや、せっかく撮ってきたんだからくれよ」
「ですが……よその子供の写真なんて要りますか？」
「俺とおまえの仲だろう！」
どうしてそこまで写真をほしがるのかもわからないし、俺とおまえの仲というのもわからない。一瞬、アーサーに懸想しているという例の憶測が頭をよぎったが、そんなわけはないと慌てて思考から振り払う。
「わかりました」
すこし迷ったが、恩人である彼の要望なら断るわけにはいかない。度が過ぎたものではなく写真がほしいというだけなのだ。
「それでは一枚だけ差し上げますのでお選びください」
「ん、一枚だけ？」
「もともとわたしが眺めるために持参したものですから」
「なるほど、それで五枚も撮ってきたというわけか」
彼は得心したように頷くと、机のうえに並べられた五枚を見比べながら考え始める。どうしてそこまでというくらい真剣な様子で。
「んー……じゃあ、これをもらうよ」
選んだ写真はシャーロットの顔がアップになっているものだ。すこしの揺るぎもない清冽な緑の瞳をまっすぐに向けられて、まるで奥底まで見透かされるかのように感じてしまう、そんな一枚である。
なかなかお目が高い――。
それが最もシャーロットの本質を捉えていると思っていた。もちろん他もそれぞれ違った魅力があるのだが。そんなことを考えながら丁寧に残りの写真を回収して、脇に抱えていたファイルに挟む。
「あなたも早く結婚すればいい。我が子はかわいいですよ」
「そうはいっても当分のあいだは結婚できないんだよなぁ」
「それは、どうして……」

聞いていいのかどうかわからず躊躇いがちに尋ねると、彼はふっと思わせぶりに口元を上げ、紫色の挑発的なまなざしでアーサーを見据えて告げる。
「おまえのせいだ。責任は取ってもらうからな」
「えっ……わたしの……？」
そのとき、最後のピースがはまった気がした。
ここまできたらもはや誤解や曲解だと思うほうが難しい。アーサーに懸想しているという例の憶測は正しかったのだ。彼の同僚たちも、そこここでひっそりと生あたたかい笑みを浮かべていた。

どうしたらいい——。
その夜、自宅に帰ってからひとり書斎で煩悶した。
学生時代はリチャードのことが嫌いだったものの、いまはそうではない。しかし彼の気持ちには応えられない。アーサーは既婚者だし、そもそも男性を相手にすることは考えられないのだ。
それでも彼から向けられる恋情を不快には思っていない。むしろ悪い気はしていないというか、かすかな優越感のようなものさえ感じている。そんなことは絶対に誰にも言えないけれど。
さんざん悩んだ結果、いままでどおり何も知らないものとして接することに決めた。もし交際を迫られたら丁重に断るが、彼なら現状を犠牲にしてまで見込みのない賭けには出ない気がした。

そうして翌日からも変わらない関係をつづけた。
リチャードは王宮に来る用事があるとついでに顔を見せるし、アーサーも騎士団本部に行く用事があるとついでに顔を出している。そしてときどき一緒に昼食をとったりもしていた。
そのうち、たまに彼に誘われて休日に出かけるようにもなった。このあいだなど、アーサーが紅茶を好んでいることを知ったからか、わざわざ評判の店を調べて連れて行ってくれたりもした。
シャーロットの写真については領地に戻るたびに撮影し、彼に渡している。アーサーの気を引くためかもしれないが、彼はいつも興味を持って見聞きしてくれるので、親としてはうれしかった。
ただ、シャーロットに会いたいという要望だけは断っている。もうだいぶ時間が経過したので大丈夫かもしれないが、記憶がよみがえって再び恐怖にとらわれる可能性もなくはないのだ。

そんな折、ポートランド侯爵家のグレアムが自宅を訪ねてきた。
内密に相談したいことがあるので二人きりで会えないだろうか——という主旨の文を

受け取り、あらかじめ承諾の返事をしていたのだ。深刻な話かもしれないと緊張しつつ応接室に通したのだが。
「実は、ある令嬢と結婚したいと思っているのだが、どうすればいいか……」
「は？」
　肩透かしを食らった気分だった。
　しかし目のまえにいる彼はひどく思い詰めた表情をしていて、本気で言っているのだということは理解できた。ただ何について悩んでいるのかまではわからない。
「縁談を申し込めばよろしいのでは？」
「それは……そうなのだが……」
　広大な領地を有し、海運の要衝も抱え、強い発言力を有するポートランド侯爵家と縁続きになりたい貴族は多い。しかもグレアムは次期後継者である。普通に考えれば先方から断られる可能性は低いだろう。
「相手側に何か問題があるのでしょうか？」
「問題というか……彼女は過去に婚約解消していて……」
「なるほど、それでご両親に反対されているのですね？」
「いや、両親はクレランス侯爵家なら歓迎だそうだ」
　クレランス侯爵家ということは相手はロゼリア嬢だろう。彼女はリチャードと婚約解消したことで傷物とみなされている。夜会でも敬遠され、ひとり壁の花になっているのをときどき目にしていた。
　そうなったのは自分のせいかもしれないという後ろめたさもあり、アーサーは何度かダンスに誘っている。実際に話してみると凜としていながらも意外と可愛らしくて、ますます好感を持った。
　だから彼女にはぜひとも幸せになってほしいと願っている。グレアムが相手であれば家柄的にも人柄的にも言うことはない。彼に結婚する気があるのなら全力で応援したいところだが――。
「では、あなた自身の気持ちの問題でしょうか？」
「……おそらく彼女はまだ元婚約者を忘れられずにいる。きっと傷も癒えていない。わたしのことを男として意識さえしてくれていない。ダンスを踊ったときの感触だと嫌われてはいないと思うが」
　侯爵家の次期後継者でもう二十代も半ばだというのに、あまりにも青いことを言うので驚いた。思わずあきれたような胡乱なまなざしになってしまう。
「それで、自分のことを好きになってくれるまで待ちたいと？」
「……彼女の気持ちを蔑ろにしてはかわいそうだ」
「だからといって手をこまねいていたら掻っ攫われますよ」
　それは決して大袈裟な物言いではない。
「婚約解消からもう二年です。あなたが好意を寄せるくらい魅力的な女性ですし、何よりクレランス侯爵家と縁続きになりたい家は多い。彼女のご両親もそろそろ次の縁談を考える頃合いでしょう」
「……」
　彼はグッと押し黙ったまま葛藤しているようだった。額にはうっすらと汗がにじんで

いる。その様子をアーサーはしばらく無言で見守っていたが、やがて静かに口を開く。
「結婚してから信頼関係を築いていくというのも、悪くないと思いますよ」
　その言葉はアーサー自身の経験によるものだ。
　もちろんひとそれぞれなので押しつけるつもりはないが、彼が後悔しない選択をするための一助になればいい。そう願いながら、まだ躊躇っている様子の彼にやわらかく微笑みかけた。

　まもなくグレアムとロゼリアは婚約し、一年の後、領地に戻って結婚した。
　今後、グレアムは後継者として領地経営をすこしずつ引き継いでいくという。アーサーはまだ王都にいる予定だが、いずれ領地に戻ったときには仕事方面でも彼と関わることになるだろう。
　結婚式にはアーサーも妻を伴って参列した。
　グレアムが好きな女性と結ばれたことには素直に祝意を表し、ロゼリアが良縁に恵まれたことにはひそかに安堵した。彼女の婚約解消にはいささか責任を感じていたので、勝手ながら肩の荷が下りた思いだ。
　ただ、二人ともまだどこか遠慮がちでぎこちなさが窺える。きっとこれから時間をかけて信頼関係を築いていくのだろう。この結婚を望んだひとりとして、二人が幸せになれるよう願わずにはいられなかった。

　その後も王都で文官として働き、ときどき領地に戻るという生活をつづけていた。
　リチャードとは友人としてそれなりに親しくしているが、想いを告げられたとかそういうことはない。やはりアーサーとどうこうなりたいわけではないのだろう。だからといって結婚して身を固めるような気配もなかった。

　ある日――何の前触れもなく、そんな日常を打ち破る出来事が起こった。
　父親であるグレイ伯爵が急死したという一報が入ったのだ。事故ではなく、急に倒れてそのまま亡くなったらしい。急いで領地に戻り、葬儀を執り行い、諸々の手続きをすませて伯爵位を継いだ。
　領地経営も継ぐので文官の仕事は辞めざるを得ない。事情が事情だけに引き留められることはなかったが、突然だったので申し訳なく思う。上司にも同僚にも迷惑をかけることになってしまった。
「大変だったな」
「ええ……」
　父親の死亡は公表済みなので、説明するまでもなく事情はわかっていたのだろう。文官を辞して領地に戻ることを告げると、リチャードはただ静かに寄り添うような言葉をかけてくれた。
　本当に慌ただしくて、大変で、悲しむ暇さえなかった。

　それでも落ち着いていたし意外と平気だと思っていたのに、彼の言葉を聞いた瞬間、何かがぷつりと切れて目頭が熱くなるのを感じた。そのとき初めて心が憔悴していたことに気付いた。
　そんなアーサーの様子に、彼はつらそうに痛ましそうに顔を曇らせた。そして何かに操られるようにそろりと手を上げかけたが、途中で戻し、代わりにごまかすような微苦笑を浮かべて言う。
「また王都に来たら顔を見せてくれ」
「はい」
　今後も何らかの用事で王都に来ることはあるだろう。
　ただ、彼もいつまでもこのまま王都にいるわけではない。その現実に思い当たり、アーサーは追い打ちをかけられたかのように感じて、うっすらと目を潤ませたままそっと静かにうつむいた。

「シャーロット、おいで！」
　まばゆいくらいの陽光が降りそそぐ芝生の庭で、二人の弟と楽しそうにじゃれあっている彼女を呼ぶと、ぱあっと顔をかがやかせて駆け寄ってきた。ドレスにも髪にもあちこちに細かい芝がついている。
「写真を撮るのね」
「そう、だけどまずは準備だな」
「はい！」
　彼女は満面の笑みで元気よく返事をすると、邸宅のほうへ駆けていく。
　今日、写真を撮るということはあらかじめ伝えてあった。五歳のころから少なくとも年二回は撮影しているので、もう慣れっこである。何を準備するのかということもわかっているのだ。
　写真はリチャードに送るためのものである。
　領地に戻ってからの慌ただしさが一段落したころ、シャーロットの写真を添えて彼に手紙を出したところ、近況をしたためた返事が来て、そこからゆるやかに文を交わすようになったのだ。
　写真については別に求められたわけではないが、手紙だけというのは何となく気恥ずかしくて、毎回、言い訳のように添えている。彼もそれなりに楽しんでいるようなので構わないだろう。
「旦那様、写真技師の方がいらっしゃいました」
「すぐに行く」
　そう返事をして、アーサーも邸宅のほうへと足を進めた。

　そんな楽しくて賑やかで平和な日々を積み重ねて、シャーロットは十五歳になった。
　少なからず親の欲目はあるのかもしれないが、本当にいい子に育った。明るくて、素直で、穏やかで、誰にでも分け隔てなく優しい。気がかりなのは聞き分けが良すぎるこ

とくらいで——。
　結局、あの日からずっと敷地外に出ない生活を強いてしまったが、彼女は一度も文句を言わなかった。
　だからといっていつまでもこのままというわけにはいかない。十六歳になるまえにすこしずつ外を見せていかなければ。あまりに世間知らずでは社交デビューにも差し障りがあるだろう。

　そんなことをのんびりと考え始めていた矢先、グレイ家に激震が走った。

「は……っ……？！」
　ウィンザー公爵家から前触れもなく正式な書状が届いたが、何なのか見当もつかず、おそるおそる開封して緊張しながら中に目を通したところ——驚愕のあまり頭がまっしろになった。
　それは、シャーロットに対する縁談の申し入れだった。
　相手はウィンザー公爵家の嫡男であるリチャードだ。そう、あのリチャードなのだ。しかもどういうわけか国王陛下の口添え状まである。何もかもが想定外すぎて現実を受け止めきれない。
　どうして、こんなことになった——。
　静寂に包まれた書斎でアーサーはひとり頭を抱え、執務机に突っ伏した。

　やがてどうにか落ち着きを取り戻すと、妻を書斎に呼んだ。
　ローテーブルを挟んで互いに向かい合わせに座り、無言で例の書状を渡す。彼女は不思議そうな顔をしてそれに目を落とすが、すぐに息を飲み、ほっそりとした色白の手でそっと口元を覆った。
「ウィンザー公爵家って……陛下の口添えまで……」
　驚愕しながらも、取り乱すことなく念入りに読み込んでいく。やがて腑に落ちない表情でそっと書状を置いた。
「ウィンザー公爵家がどうしてそこまでしてうちを選んだのでしょう。正直、うちと縁続きになっても先方に利があるとは思えません。口添えを頂戴したのなら他にもっといい選択肢があったはずです」
　その疑問に、アーサーは答える義務がある。
　彼女をここに呼んだ時点ですべて打ち明けるつもりでいたが、あらためて覚悟を決めて話していく。彼が十年前に婚約解消したのは男色に目覚めたからだということ、そしてそのころからアーサーに懸想しているということを。
「本当は結婚したくなかったが避けられなくなったのだろうな」
「では、グレイ家に縁談を申し入れたのは……」
「ウィンザー家ではなく彼個人の希望ではないかと思う」

「あなたとは結婚できないからせめて姻戚関係にということ？」
「せめてわたしの血を引いた娘をということかもしれない」
「それって、身代わり……ですよね」
　アーサーにはそれを否定することができなかった。つらそうな顔をしている彼女から曖昧に視線を外し、いま言える精一杯のことを絞り出す。
「悪いやつではないんだ。シャーロットを蔑ろにはしないと思う」
「……そう祈るしかありませんよね」
　国王陛下の口添えがある以上、縁談は断れない。
　妻にはもはや祈ることしかできないだろうが、リチャードに懸想されているアーサーになら、もうすこし何かできることがあるかもしれない。シャーロットにつらい思いをさせないために――。

「わかりました」
　縁談について告げると、シャーロットはやわらかく微笑んでそう応じた。
　さすがに相手が男色だとかそのあたりのことについては話していないが、それでも異例ずくめの急な縁談なので、少なからず動揺したりショックを受けたりするだろうと思っていたのに――。
「わたしは貴族の娘ですから、家のために結婚するのは当然だと思っています。陛下のお口添えがあるのなら従うしかありませんし、相手が公爵家なら当家にとっても悪い話ではありませんよね」
「シャーロット……」
「そんなお顔をなさらないでください。相手がどのような方なのかはわかりませんが、どうせならお父さまとお母さまのようないい夫婦になりたいですし、そうなれるよう努力するつもりです」
　そんなことを言ってニコッとかわいらしく笑う。まだ幼さの残る少女の顔で。
　泣かれるのもつらいが、これほどまで殊勝なのもやりきれない――アーサーは返す言葉が見つからずに目を伏せる。その隣で、妻はこらえきれずに顔を覆って嗚咽した。

　ウィンザー家に承諾の返事を送り、ほどなくしてアーサーはひとり王都に赴いた。
　久しぶりに訪れた騎士団本部はあのころとあまり変わっていない。懐かしく思いながら受付でリチャードへの面会を申し入れたところ、すこし待たされてから騎士団長の執務室に案内された。
　その奥の執務机にリチャードはいた。
　いつのまにか騎士団長になっていたらしい。騎士服はいささか立派なものになっていたが、彼自身の見目はあのころのままである。一礼すると、彼は気まずそうな笑みを浮かべて立ち上がった。
「久しぶりだな」
「はい」

部下を下がらせてアーサーに応接ソファを勧めると、向かい合わせに座る。
「約束もなくお伺いして申し訳ありません。所用で王都まで来たので、失礼ながらついでに寄らせていただきました」
「来てくれてうれしいよ」
リチャードがやわらかい微笑を浮かべるのにつられて、アーサーの頬も緩んだ。
何となく縁談には触れないまま互いに近況を話していく。しかしすぐに話題は尽き、二人きりの部屋に息の詰まるような沈黙が落ちた。アーサーは腿のうえで組み合わせた手に力をこめる。
「……シャーロットは」
目を伏せたまま、どうにか決意を固めて本題を切り出した。
「あの子は、わたしたち夫婦にとってかけがえのない大切な娘です。これまで愛情をもって大事に育ててきました。なので……こんなことを言える立場でないのは重々承知しておりますが……」
そこで顔を上げると、まっすぐにリチャードの目を見据えて訴える。
「どうか、シャーロットを幸せにすると約束してください」
彼女のために自分ができるのはせいぜいこのくらいのこと。しかし他ならぬアーサーが頼むからこそ効果がある。そう信じて、仕事が忙しいにもかかわらず自らここまで足を運んだのだ。
「ああ……必ず幸せにすると約束する」
リチャードは目をそらすことなく受け止めてくれた。
本当にシャーロットが幸せになれるかは別にして、きっと努力はしてくれる。少なくとも蔑ろにはしないはずだ。彼の言葉で、表情で、態度で、どうにか自分をそう納得させることができた。

非常識に短い婚約期間は着々と過ぎていき、婚儀の日が迫る。
リチャードは騎士団の仕事が忙しく、いまだにデートどころか婚約の挨拶にさえ来られないままだ。無理して来なくてもいいと言ったのはアーサーなのだが、やはり微妙な気持ちにはなる。
ただ、両親のウィンザー公爵夫妻は当人抜きで挨拶に来てくれた。どちらも物腰が柔らかい印象だ。シャーロットには申し訳ないことをしたと頭を下げられて、こちらが恐縮したくらいである。
婚儀の準備についてはすべてウィンザー家に任せてあるが、進捗に問題はないと聞いている。さすがは公爵家というべきか。ウェディングドレスもいっさい手を抜かずに間に合わせたらしい。

そして、とうとうシャーロットがグレイ家で過ごす最後の日になった――。
婚儀までにはまだ数日あるが、ウェディングドレスの最終調整や段取りの打ち合わせがあるので、すこし早めにウィンザー家へ向かうことになっているのだ。アーサーたち

家族も同行する予定である。
「お父さま、お母さま、今日はひとりで考えたいことがあるので、部屋にいます。夜までそっとしておいてもらえませんか？」
「……わかった」
　おそらくまだ心の整理がついていないのだろう。アーサーとしてはやはり家族と過ごしてほしかったが、それを押しつけるわけにはいかない。残念に思いながらも彼女の意思を尊重することにした。
「ありがとうございます」
　シャーロットは申し訳なさそうに微笑むと、昼食用のサンドイッチと紅茶を用意して二階の自室にこもってしまった。なのでアーサーもひとり書斎にこもって仕事を片付けていたのだが――。
「お嬢さまが部屋から消えていました」
「どういうことだ？」
　夕方になり、青ざめた侍女からそんな報告を受けた。
「部屋の窓がずっと大きく開いたままで、物音ひとつ聞こえなくて、お声をかけてもまったく返事がなくて……奥様に相談して扉を開けてみたら、お嬢さまの姿はどこにもありませんでした」
　結婚が嫌で逃げた、のか――？
　部屋にはサンドイッチも紅茶も手つかずで残っていた。置き手紙は見当たらない。カーテンがゆるくはためく窓のほうへ目を向けると、すぐ近くに木が見える。木登りの得意な彼女ならそこから庭に降りられそうだ。
　だが、逃げるとしてもどこへ。金を持っていないので遠くへは行けないはずだが、彼女に同情して手引きした者がいないとも限らない。彼女と面識があるのは親族、教師、使用人くらいだろうか。
「エリザは手の空いているものと敷地内をくまなく探してほしい。メイソンはシャーロットと面識のある人物すべてに当たってほしい。同時に自警団にも捜索を依頼しておくように」
「畏まりました」
　冷静に指示を出すと、控えていた侍女と家令はともに一礼して部屋をあとにする。すぐに侍女のパタパタという軽い足音が聞こえてきた。本来であればいくら急いでいても走るべきではないのだが、いまは咎める気になれない。
「わたしも探してみます」
　動揺していた妻も、気を取り直したように足早に部屋から出て行った。

「お嬢さまーーー！　　どこですかぁーーー！！！」
　さっそく外から侍女の声が聞こえてきた。
　敷地内にいるのなら本気で逃亡する気はないだろうから、呼びかければ出てくるかもしれない。問題は本気で逃亡しようと敷地外に出てしまった場合だ。取り返しのつかない事態になっていないことを祈るしかない。

アーサーは執務机につき、かすかに震える両手を組み合わせてうつむく。
すまない、シャーロット――。
そこまで嫌なら断ってやりたいが、陛下の口添えに従わなければ叛意ありとみなされてしまう。爵位と領地を没収されるくらいですめばまだいいが、家族もろとも処刑ということもあり得るのだ。
結論の出ないまま胃が痛くなるようなことばかり考えていると、にわかに書斎の外がざわめく。すぐにバタバタと足音がして、開けっ放しにしていた扉の向こうから侍女のエリザが飛び込んできた。
「お嬢さまがお戻りになりました！」
アーサーは息を飲み、はじかれたように椅子から立ち上がった。

「シャーロット！」
リビングに駆け込むと、彼女は普段とすこしも変わらない姿でそこにいた。アーサーの姿をみとめて気まずげな顔になったものの、すぐさま我にかえったように表情を引き締めて一礼する。
「お父さま、ご心配とご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。結婚するまえに、どうしても一度カーディフの街に行ってみたかったのです」
「……逃げ出したのではないのか？」
「そんなつもりはありません。最初に言ったように結婚は受け入れていますから。いつか誰かとすることですもの。あ、これおみやげです」
ふと思い出したようにローテーブルの上の紙袋を手に取り、アーサーに渡す。
中にはいくつかの茶葉の瓶と小さな包みが入っていた。ローテーブルの上にはまだ同じ小さな包みが三つあるので、家族みんなに買ってきたのだろう。中身はおそらくハンカチではないかと思う。しかし――。
「おまえ、お金なんて持っていなかっただろう？」
「ネックレスをひとつ売りました。申し訳ありません」
「それは構わないが……」
ほとんどのものはここに置いていくことになっているので、最後に役に立てたのならよかったが、未成年が売るとなると裏通りの治安のよくない店しかない。下手したら無事ではすまなかったと今更ながらヒヤリとする。
「……街は、楽しかったか？」
「はい、劇場でお芝居を観ましたし、カフェにも行きました。移動販売でサンドイッチも食べたんです。とても楽しくて……本当に、夢みたいで……」
最初はニコニコと無邪気に声をはずませていた彼女が、途中で言葉を詰まらせる。ここではないどこかにせつなげなまなざしを向けて。その表情にアーサーは胸を締めつけられてしまい、何も言えなくなった。

翌日、予定どおり馬車でウィンザー家に向かった。

夜更けに到着すると、公爵夫妻はにこやかな笑顔で歓迎してくれたが、結婚する当人であるリチャードはまだ来ていなかった。どうしても外せない仕事ができたので少し遅れるとのことである。

仕方ないとは思いつつも、婚約者どうしの顔合わせもまだなのにと不満は募る。結婚式に間に合うかも不安だ。シャーロットもそういう素振りは見せないものの、同じ気持ちではないかと思う。

ただ、彼女にはそれなりにやることがあったのでよかった。ウェディングドレスのサイズ調整をしたり、結婚式の段取りを確認をしたり、公爵夫人とお茶をしたりであまり悩む暇はなかっただろう。

だが、結婚式当日の朝になっても夫となるひとが到着していないと聞くと、さすがに不安をにじませた。公爵夫妻もひどい顔色である。それでも時間までには来ると信じて支度を進めるしかなかった。

シャーロットを幸せにすると約束してくれたはずなのに、さっそくこんな——。

アーサーも心配と不安でどうにかなりそうだった。自分たちの支度をすませると、他にすることもないのでひたすら気を揉むしかない。グッと奥歯を噛み、まだ姿を見せない彼に内心で苦言を呈したそのとき。

「リチャード様が到着しました！　いま大急ぎで支度をしているそうです！」

「そう、か……よかった……」

グレイ家の控え室に飛び込んできた執事の報告にほっとして、全身から力が抜けた。開始時刻に間に合うのかはまだわからないので、安心するのは早いが、それでも最悪の事態は避けられたと思っていいだろう。

「お嬢さまのお支度が終わりました」

つづいて侍女が報告に来た。

アーサーも妻もまだ一度もウェディングドレス姿を見ていない。そわそわしながら花嫁の控え室に向かい、先導していた侍女の手でゆっくりと扉が開かれると——アーサーは大きく息を飲んだ。

そこにいたシャーロットは、まるで天使か妖精のようだった。

純白のウェディングドレスは公爵家が用意しただけあって見事なもので、その方面に詳しくないアーサーにも上質で精緻であることが窺えた。そして何より彼女自身の可憐で清浄な美しさがそれに負けていないのだ。

「きれいよ、シャーロット」

ふいに隣の妻が感極まったようにそう声を震わせる。

アーサーも実感をこめて頷いた。ただ、本当に嫁いでいくのだという現実をあらためて突きつけられて、いまさらながら胸がつぶれそうなほど苦しくなってしまった。

「シャーロット、夫のウィンザー侯爵のことで何かあれば言ってきなさい。わたしのほうからできることがあるかもしれない」

「でも、あまり実家が出しゃばるのはよくないですよね？」

「まあ、そうだが……それでも本当に困ったときは躊躇わずに言ってきなさい。実家というより友人として話すつもりだから」

自分が頼めば、リチャードはそれなりに聞き入れてくれるはずだ。

彼の恋心を利用するようでいささか気が咎めるが、そもそも彼が恋心を暴走させたせいで彼女が犠牲になったのだから、このくらいのことは許されてしかるべきだろう。
「……はい」
シャーロットは当惑したような面持ちで話を聞いていたが、一呼吸して肯定の返事をすると、あらためて姿勢を正してまっすぐにアーサーたちを見据えた。
「お父さま、お母さま、これまで本当にありがとうございました。わたし、お二人のように幸せになります。だから、どうか心配なさらず笑って送り出してください」
そう告げてふわりと花が咲くように笑った。
アーサーは思わず隣の妻と目を見合わせてしまったが、すぐに二人してシャーロットのほうに向きなおると、彼女の願いどおりに微笑んでみせた。寂しさと不安と後ろめたさは心の中にしまいこんで。

花嫁の控え室を退出すると、そのすぐ傍らでグレイ家の執事がひっそりと待ち構えていた。そろそろ参列者が聖堂に入る時間だと知らせに来てくれたのだ。
「君は子供たちを連れて先に行ってくれ」
「あなたはどうするのです？」
「ウィンザー侯爵が間に合うか見てくる」
妻を執事に任せて、アーサーはそのまま花婿の控え室へ向かった。
扉のまえで足を止めてコンコンと軽くノックすると、どうぞと応じる声が中から聞こえてきた。それは間違いなくリチャード本人のものだ。急激に緊張が高まるのを自覚しながら、そろりと扉を開く――。
「アーサー！」
リチャードはパッとうれしそうに顔をかがやかせ、立ち上がった。
後ろから従者が黒髪を整えていたところのようだが、もう十分に整っているし、衣装もきっちりと着ているし、見たところだいたい支度は終わっているようだ。アーサーはほっと息をつく。
「どうやら間に合いそうですね」
「ああ……おまえにも心配かけたな」
「あなたは昔からいつもギリギリだ」
「それでも遅れたことはないよ」
リチャードは悪戯っぽく肩をすくめる。パブリックスクール時代を思い起こさせるやりとりに、アーサーもつい表情が緩んでしまう。
「ところで何の用だ？」
「いえ、あなたが結婚式に間に合うのか確認に来ただけです。気が気でなくて……シャーロットに惨めな思いはさせたくありませんから」
仕事なら責められないが、花嫁の父として心配するくらいのことは許されるだろう。そう思ったが、彼はどういうわけか急に怖いくらい真剣な顔になり、一気に間を詰めてアーサーの背後の扉にドンと勢いよく手をついた。
えっ――。

さらに息がふれあうくらいにグイッと顔を近づけ、覗き込んでくる。
思わずアーサーはびくりと体をこわばらせて息を殺した。まさか――これから娘と結婚しようというのに、この教会で宣誓しようというのに、よりによってどうしていまここでこんなことを。
「じょっ、冗談にしても……あまりこのようなことをなさるのは……」
冗談であってほしい、そう願いながらおずおずと探るような言葉を向ける。
それでも彼の表情はすこしも変わらなかった。アメジストのような紫の双眸で鋭くアーサーを射竦めたまま、さらに顔を近づけてくる。こらえきれずにアーサーはギュッと目をつむったが――。
「おまえさ、俺がおまえに懸想してるだなんて本気で思ってるのか？」
「えっ……ぁ……えっ……？」
驚いて目を開くと、彼は呆れたような冷ややかな半眼でこちらを見ていた。しかしアーサーとしては何がなんだかわからないままで、困惑の声しか出ない。
「どうしてそれを……いえ、あの……違うのですか？」
「おまえのことは友人としか思ったことがないし、そもそも俺は男色じゃない」
「……本当に？」
はぁ、と彼は盛大な溜息をついて体を起こした。
彼の顔が離れてアーサーはようやくほっと息をつくが、彼の言ったことはまだ信じきれずにいた。じっと訝しむような探るような目を向けていると、彼は何とも言えない微妙な面持ちで腕を組む。
「なあ、俺がおまえに懸想してるだなんてどうして思ったんだ？」
「同僚がそうではないかと……いえ、すぐにそれを信じたわけではなかったのですが、あなたが……結婚しないのはおまえのせいだ責任を取れなどと言うので、やはりそういうことなのかと……」
そう告げると、彼は眉をひそめながら首をひねる。
「そんなこと言ったか？」
「言いました」
確信したのはそのときなのではっきりと覚えているのだが、彼は記憶にないらしい。本当に懸想などしていないというのなら、いったいどういうつもりでそんなことを言ったのだろうか。
「まあ、何にせよおまえに懸想してるってのは完全な誤解だ」
「でしたらシャーロットとの結婚を望んだのはなぜですか？」
「ああ……」
彼はどこか緊張した面持ちでアーサーに向きなおり、口を開く。
「シャーロットとの結婚を望んだのはシャーロットが好きだからで、他意は一切ない。おまえが心配しなくても彼女のことは大事にするし、二人で幸せになるつもりだ。何せ十年も待ったんだからな」
「えっ？」
十年も待った？　シャーロットのことが十年前から好きだった？？
確かに十年前の誘拐事件のときにシャーロットと出会っているが、彼女はまだ五歳

だった。そのときから結婚を意識していたというのはさすがに無理がある。写真で成長を見守るうちにということだろうか。
「ほら、時間だぞ」
「ですが……」
「またあとでな」
　肩を押され、半ば強引に控え室から追い出された。
　詳しく話を聞こうと思ったところだったので、何となくごまかされた気がしないでもないが、確かにもう時間はない。釈然としない心持ちのまま身を翻して歩き始める。
　カツッ、カツッ、カツッ――。
　無機質な靴音が一定のリズムを刻む。
　それを意識することなく耳にしているうちに、何か言いようのない苦しさと寂しさが湧き上がり、足が止まった。たったひとつの音が消えた冷たい廊下にひとり佇む。
　――シャーロットとの結婚を望んだのはシャーロットが好きだから。
　――おまえのことは友人としか思ったことがない。
　それが事実なら、きっとシャーロットのことを大事にしてくれるだろう。身代わりなどではなかったのだから。もうアーサーが心配する必要もないのかもしれない。ただ――。
「いっそ、嫌いなままでいたかった」
　幽かな声がこぼれ落ちた。
　瞬間、ハッと我にかえって顔を上げる。さいわい周囲を見まわしても誰ひとりいなかったが、それでも何か気まずくて、その場でゆっくりと深呼吸をして仕切りなおした。
　よし――。
　再び聖堂へ向かって歩き始める。その足が途中で止まることは、もうなかった。

エピローグ ～公爵家の幼妻は旦那様と仲良くしたい

宴が一段落すると、シャーロットは夫のリチャードとともに引き上げた。

すぐに侍女の手を借りながら湯浴みをして寝衣に着替える。公爵家が用意したそれは膝下丈のゆるりとしたドレスで、薄地のシルクながらも身頃の透け感はそれほどなく、繊細なレースやフリルがあしらわれた上品で可愛らしいものだ。

「若奥様、緊張なさってますか？」

「平気よ」

気遣わしげな侍女にニッコリと微笑んでみせる。

さすがにこういう状況なのですこし緊張しているものの、落ち着いてはいると思う。ただ若奥様と呼ばれることにはまだ慣れておらず、何となくむず痒いような気持ちになってしまった。

「行ってくるわ」

そう言い置き、侍女に見送られつつ寝室へつづく扉を開ける。

明るい――。

てっきり薄暗くなっているものとばかり思っていたが、普通に灯りがついていた。

寝台にはリチャードがひとりで腰掛けている。手に持っている何か小さなものを見ていたようだが、シャーロットが扉を開けるとすぐに振り向き、ふっと目を細めて笑った。

「すみません、お待たせしましたか？」

「いや」

彼は自分の隣をぽんぽんと叩いて、おいでと言う。

シャーロットは扉を閉め、素直に示されたところまで歩いていくと腰を下ろした。そのとき彼の手にしているものがチラリと視界に入った。どうやら紙片の束のようだ。

「もしかしてお仕事でした？」

「これは違うよ」

そう笑いまじりに答えながら手渡され、瞬間、小さく息を飲む。

そこには幼いころの自分自身の顔がうつっていた。おそらく初めて写真を撮ったときのものだろう。まだ五歳くらいで、何もわからないまま写真技師に撮影されたことを、おぼろげながら覚えている。

あわてて一枚ずつ確認するが、他もすべてシャーロットを被写体にした写真だった。幼少期から最近まで成長を追うようにそろっている。ただ、染みがついていたり波打っていたりと傷んでいるものが多い。

「ずっと大切にしてた俺の宝物」

彼はシャーロットの手からまとめてそれを抜き取ると、サイドテーブルに置いた。

どうしてあなたが——ずっとというくらいだから、婚約してから譲り受けたわけではないのだろう。そのときどきで手に入れていたのかもしれない。いずれにしても入手先として考えられるのはひとつだ。
「父から？」
「そう、あの誘拐事件のあとアーサーに頼んで写真をもらってたんだ。そのためにつきまとってたから懸想してるとか誤解されたんだろうが、事実無根だからな。俺が好きなのは今も昔もシャーロット、君だけだ」
躊躇いもなくまっすぐに目を見つめながらそう言われ、鼓動が跳ねる。しかしながら素直にすべてを信じることはできなかった。
「本当に、十年前から……？」
「初めて会った誘拐事件のときに好きになったんだ。君と確実に結婚できるように、騎士団長にまでなって陛下の口添えをいただいた」
とても嘘を言っているようには見えないが、事件当時のシャーロットはまだほんの五歳である。そんな小さな子供を異性として好きになったうえ、十年もかけて結婚を画策するだなんて——。
「悪いな、結婚をなかったことにはしてやれない」
シャーロットが微妙な面持ちのまま考えをめぐらせていると、彼は自嘲まじりにそう言い添えた。あわててシャーロットは弾かれたように「いえ」と声を上げた。
「わたしは結婚をやめたいだなんて思っていません。ただ、リチャード様が失望してしまわないかと心配していたのです。いまはもう、あなたが好きになった五歳の女の子ではありませんし……」
「いや、別に俺は幼女が好きってわけじゃないからな？！」
必死に言い訳する彼に、シャーロットはただ曖昧な笑みを浮かべて応じた。
この十年のあいだに成長して変わったところは多々ある。そのことで失望されるかもしれないという不安は消えないが、それを追及する気はなかった。なのに——彼はふと何かを察したように真面目な顔になり、言葉を継ぐ。
「君のことはあのときからずっと写真をもらって見てきたし、話も聞いてきた。会ってはいなかったがある程度はわかっていたつもりだ。でも実際に会った君はそんなものをはるかに超えていたよ……ロッテ」
甘く愛おしむような声であのときの名前を呼ばれて、頬が熱くなる。
彼の話から、少なくとも十年前の幻影を追っているわけではないとわかった。きっとこれからも目の前のシャーロットと向き合ってくれる。そう思うと、ようやくすこし安心できた。
「そういえば、あのとき最初からわたしだと気付いていたのですよね？」
「ああ……ひとりで街にいる君を見かけて本当に驚いたよ。自分の素性を明かさなかったのは、君に結婚を強いた公爵家の人間としてではなく、ひとりの男として見てほしかったからかもしれない」
きまり悪そうにしながらも、彼は聞きたかったことまで先回りして答えてくれた。
あのときシャーロットが街にいることは誰も知らなかったはずなので、出会ったのは本当に偶然だろうし、素性を明かさなかったのも明確な意図はなかったのかもしれない。

それでも——。
「ずるいです」
　あえて口をとがらせて言う。
「そのせいでわたしがどんな気持ちでいたかわかりますか？　とうに心を決めていたはずなのに、結婚するのがつらくなってしまって……こんなことなら出会いたくなかったとさえ思いました」
「それって……」
「リック様を好きになってしまったんです」
　その告白に、彼は想像もしなかったとばかりに大きく目を見開いた。たった半日しか一緒に過ごしていないのだから当然かもしれない。それでもシャーロットはにっこりと微笑んで言葉を継ぐ。
「だから、責任をとってくださいね」
「責任……？」
　そう聞き返す彼に、やわらかに腕を伸ばして抱きついた。
　瞬間、薄布越しに伝わってきたのは無駄なく鍛えられた体躯、そして体温。こんなにも男性に密着したのは初めてのことで、心臓が壊れそうなくらいドキドキしながらも、そっと口を開いて言う。
「ずっと、末永く仲良くしてほしいの」
「……約束する」
　静かながらも芯のある声が返ってきた。
　ほっとした瞬間、彼にやさしく両肩を押されて二人の体が離れた。戸惑いながら顔を上げると、怖いくらいまっすぐな目がそこにあって息を飲む。まるでとらわれたかのように絡んだ視線がほどけない——。
「後悔はさせない」
　ふいにリチャードが宣言した。
　そしてゆっくりとシャーロットの頬に手を添えながら、顔を近づけてくる。その表情は婚儀のときよりずっと真剣で——思わずシャーロットはくすりと笑い、ほどなくして紫の双眸に吸い込まれるように目を閉じた。

伯爵家の箱入り娘は婚儀のまえに逃亡したい

著　　瑞原唯子

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社